

# コードギアス Gの軌跡(笑)

木下 瀬那

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

コードギアスの世界に生まれ落ちた転生者

憧れのグラハムになるべく、不幸を取り除くべく

自分なりの「グラハム」で未来を切り開いて

「チヨリーツス!!」

開い

「これが私なりの愛のベーゼだ！新型!!」

ひら

「この気持ち、正しく愛だ!!!」

……切り開ける……はず

※夢に見て友人と話していくうちに書くしかないと思つて書き始めました。初執筆なので拙いところあると思いますが、よろしくお願ひします。

※尚、順次タグは必要に応じて追加していく予定です。

# 目次

初めましてだな！世界！ | 1

初めましてだな！兄上！ | 10

初めましてだな！本格説明！ | 20

初めましてだな！姉上！ | 28

幕間・コーネリアの出会い 前編

37

幕間・コーネリアの出会い 後編

47

初めましてだな！家族！ | 61

初めましてだな！謁見！ | 70

初めましてだな！従者！ | 80

初めましてだな！別れ！ | 90

初めましてだな！日本！ | 101

初めましてだな！藤堂！！ | 111

幕間・藤堂の矜持 | 121

初めましてだな！武人！ | 139

初めましてだな！修行！ | 149

初めましてだな！首相！ | 162

初めましてだな！妊娠！ | 171

記念話・夢の中で 出会い | 182

初めましてだな！取引！ | 196

初めましてだな！資源！ | 206

初めましてだな！やらかし！ | 215

初めましてだな！兆し！ 前編 | 227

幕間・ジョウシキ ト ショウジキ





# 初めましてだな!世界!

人は生まれながらに不平等である。誰かがそう言っていた。平等こそが悪であると。

しかし、それでも人には平等に訪れるものが存在する。それを悪と否定するのは人という存在の否定であると、私は考える。

人が喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。そんな感情発露は平等に訪れる。無論環境によっては訪れる時期、感情の大きさは変化するだろう。

では、そんな環境に左右されない平等とはなにか? 簡単な問いだ。それは生まれる瞬間である。

人は誰しも誰かの腹から生まれ落ちる。これは人であるが故に決して覆らぬ生物としての循環サイクルすなわち平等。ならばその先こそが不平等を形作る第1歩であると私は考える。

さて、では平等に人が生まれ落ちたその後、誰を認識するのだろうか。

自分を抱く親の顔か。看護婦や医者顔か。それともその誰でもない赤の他人なのか。不平等とやらが示す私の場合は……

「ふむ、これが3人目か……見る限り普通の子だねシャルル」

「ええ、兄さん……普通の我が子のようにです」

やけに髪の毛の長いパツキン少年と、それを兄と呼ぶ同じく髪の毛の長い茶髪のやけに特徴的な声のおっさんだった。

神聖ブリタニア帝国第98代唯一皇帝シャルル・ジ・ブリタニア。

それがあの特徴的な声のおっさんの名前だった。（私の容態を見に来た看護婦がフルネームで言ってた）

はて？ブリタニア？シャルル？………つまりはコードギアス???

それを認識すると同時に思う

あ、これ私死んだわ……

いや、だつてあれじゃん？コードギアスの世界つて言ったら戦争真つ只中で、その戦争を引き起こす国であるブリタニアの捨てられた皇子ことルルーシュがなんだかんだやって、ブリタニアぶつ潰して最後世界平和を求めるやつじゃん？（超ザツクリ）

その過程で、ブリタニアの首都に住んでる住人とか貴族とか皇族とか全員死ぬじゃねーか……

この世界……なんて言い方が出来るのは私がこの世界の異物、「転生者」と言える存在



だからだ。

そう思う理由は2つ。

1つは、さっきのシャルルしかり。その隣にいた少年もだが、私がテレビで見ていたアニメのキャラクターと同じ名前と声であること。(シャルルに関しては原作よりなんか若かったが)

そして、もう1つは神聖ブリタニア帝国なんて名前の国は、私の生きている時代にアニメ以外で聞いたことがなかったからである。

しかし、どうせなら……どうせ転生するならガンダムの世界が良かった!!

確かにギアスの世界もガンダム系と同じで戦争や戦いだらけだけど!どっちもロボットいるけど!!

私はガンダムが好きなのだ!愛していると言っても過言ではない!ガンダムの世界が!人間が!物語が!ロボットが大好きなのだ!!

さらに言うのであれば!!00と呼ばれる作品の……

いや、これ以上思いの丈を解放して悩むのはやめよう

私の感情が高ぶったせいか、赤子である私が泣き出してしまって周りを困らせている。

自分が泣いているというのに、こうも他人事のように感じるのも「転生者」として精

神がある程度成熟しているからだろうか？

いや、成熟していたらそもそも泣かないか……

まあ、転生してしまったものは仕方がない……そもそも私がいつ死んで転生してしまっただのかわからないが、してしまっただけは仕方がない……仕事とかいろいろあつたけど死んでしまっただけだから、元の世界のこととか、もういいだろう。(よくない)

さて、まずはこの原作でおきる大半の事件の黒幕的存在の2人が、何故私を見ているのか、この状況を理解して今後生きていく指標を決めよう。

さあ！ 貴様ら！ なぜ私をみる！！ ころら！ なんかヒソヒソ話してないでこつちを見ろ！！

「……兄さん、この子の名前決めました」

この子の名前？……おい、待て……名前？……そういえばさつき3人目とか、我が子とか……言つて、た……

「うん、シャルル。聞かせてくれる？」

……いやいや、まてまて「この子」ってことは私はあんたの息子か!? そして、あんたの息子の3人目ってことは……クロヴィスじゃねえか!! え、そのポジションはすぐ死ぬ!

「この子の名は……」

い、言うな!! やめろ！ 現実を突きつけるな!! ……や、や、やめろおおおお!!

「……グラハム」

………は？

「この子はグラハム・エル・ブリタニア。我が3人目の息子よ、強く育て。我らが夢、我らが世界の為にも……」

………どうやら、私は原作第3皇子クロヴィスではなく……「グラハム」の名で生きていくことが決定したらしい

………そっかああ、グラハムかああ。いやあ、グラハムなら仕方ないなあ! うん! グラハムならコードギアスの世界でも仕方ないなあ!! グラハムなら!!

「兄さん、この子……」

「うん、シャルルの言葉がわかったみたいだね。名前をつけられて嬉しそうだよ……無邪気なものだ」

「ええ。これこそ仮面のない……」

「嘘のない世界の象徴だね。だからシャルル……」

「……はい、兄さん。まだ始まったばかりです。これからも続けなければ」

「僕たちの夢の為にね」

なんか、物騒な話してそうだけど、んなことはどうでもいい（よくない）

私は、少し前にガンダムの世界に行きたかった！と思ったが、私の行きたい理由の3分の1は私の名前で解消された。

「グラハム」とは、先程語りたくなつた00という作品に登場するキャラクターの1人なのだが、この人ともなく強いのである。

彼、「グラハム・エーカー」は空に憧れ、モビルスーツ「フラッグ」と呼ばれる可変式ロボットを駆り、その世界で各国の脅威となる「ガンダム」を一对一で相手どることができる数少ない人間として描かれているのだ。彼が「ガンダム」に固執していくことで、その高潔な軍人としての人間性が歪んでいくのだが、それも人間らしくてまた良い!!歪んでいく中でも死んだ戦友に誓った「フラッグでガンダムを倒す」という信念を貫こうとする姿はとても輝いて見えたものだ!事実彼は性能差が圧倒的に開いているガンダムにたいして、フラッグ単機で片腕をもぎ取り圧倒するなど正しく阿修羅も凌駕する活躍を見せるのだ!!己を鼓舞するために色々と口走るため、視聴者に「変態」「気持ち悪い」「ネタ枠」等言われているがそれがどうした!!!むしろそれが良い!!!そこから産まれる名言・名言・迷言ツ!その見た目!声!カッコよさからくるカリスマ性!彼の活躍の度にフラッグのプラモデルがおもちゃ屋の店頭から消えるのも仕方ないのだ!!

………かなり興奮してしまったが不審がられていないだろうか?

「では、兄さんまだ新しいギアスは……」

「うん、このままでは望ましい結果は得られないかな……」

おい、不審がられてないのはいいが、せつかく産まれた私にたいして関心無さすぎではないか?……まあ、この2人に不審がられたらいろいろと恐ろしいんだが……

まあ、そんなわけで(どんなわけ)憧れのグラハムさんと同じ名前になったのであれば、例えコードギアスの世界であろうと恐れるものは何もない!(手のひらドリル)血筋的に金髪になる可能性は高いし、何なら瞳の色も近いはず。3人目の息子つてことは、原作の第1皇子オデユツセウスと第2皇子シュナイゼル2人が兄!2人の瞳は確か青っぽい色だったし!(グラハムさんの瞳は緑)これはこのままグラハムさんムーブをしていけという神の思し召しでは!?(違う)

ふふふ、ふははは!これで私の指標は決まった!!私グラハム・エル・ブリタニアは「グラハムさん」のように生きるのだ!いや!生きていこう!!

「では、兄さん私はこれで……」

「うん、またあとでねシャルル」

私が興奮している間に大事な話は済んだようで、シャルルが踵を返し病室から出ようとしている。

おう帰れ帰れ、確かあれだろ？シャルルって自分の息子売り飛ばしたり、その息子殺そうとしたり、何だかんだ世界を好き勝手しようとしたやつだろ？（いろいろ違う）私も貴方のような下衆の顔など見たくないわ！……声はカッコいいけどよ

「……さて、表情のコロコロ変わる子だねグラハム。シユナイゼルとはまるで逆だね。1つ違いで同じ女から産まれたらこうも変わるのかな？」

シャルルが帰るとまだ何か用があるのか、少年が私の顔を覗いてきた。

ふん！知ったことか！……だが良いことを聞いた。シユナイゼルの1つ違いということは、私がコードギアスを見終わった時に調べた年齢が合っていれば、シユナイゼルが28歳の時が原作時だったはず……となると、その時私は27歳……

ふふふ、なんと！27歳か！！00 first season時のグラハムさんの年齢ではないか！なんとという僥倖!!やはりこれは（割愛）

「でも……あまりシャルルを困らせないでね……あまり変なことしてると……」

ん？なんだ？私は今喜びに浸っているのだ、赤子に何を言うつもりだ？静かにしてほしいのだが！

「その変な精神ごと、僕が殺すからね」

小さな声でハッキリとそう告げると、少年はどこか楽しいな雰囲気です病室を出ていった。

……………第1目標。まずは早く大人になってブリタニア皇族からどうにか逃げよう。

私の転生後の第1歩はそんな感じで締まらないスタートを切ったのであった。

初めましてだな！兄上！

私が生まれてから3年の月日が経った。

無事首も座り、多少ならば歩けるようにもなった。

しかし、思い返すとこの3年間は退屈に過ぎるものだったな

今も私は小さな部屋に半ば軟禁状態だ。(子供が住む部屋としては大きい部類) こんなところでは筋トレしかできないか。(まだ3歳時の為そもそもやつちやダメ) さて、まずは現状の確認だ。

あの少年、「V・V」はあれ以降何度か私の顔を見にやって来ていた。やれ誕生日だの、やれ国の記念日だの、シャルルがなにかしただの、何かにつけてやって来てそれを私に伝えてくるのだ。……これはあれか。反応を見て楽しんでいるのか？そう考えるとあの時最後に私に伝えてきた「変な精神」とはやはり「転生した私の精神」という意味なのだろうか？……しかし、そんな精神とか見る能力がV・Vにあつたとか知らないんだが？てか、そんなもんあつたらもう私詰んでないか？(まだ詰んでない)

逆にシャルルのほうは、あれ以降1度も顔を出してこない。あれかギアス主人公のルーシユの母マリアンヌとイチャイチャしてるのだろうか。爆発しろ。



現状といえば、V・V・の訪問時の話でいくつかわかったこともある。

まず、私の母親だが名前も顔も知らないときた。私を生んだ後に亡くなったのか。それとも、このV・V・がなにかしたのか。わからない以上、いない人間として扱うしかあるまい。前世での親は優しくかったからか、この世界の親にたいしてあまり親しみを覚えられないのが、この場合は良い具合に精神を安定させてくれている。

また、3人目という言葉に引つ掛かっていたがどうも男の子としての3人目の意味のようだ。既に第1皇女ギネヴィアと第2皇女コーネリアは産まれてるらしい。V・V・にとつて女性は政治的価値以外に興味は今のところ無いらしく、男の子にたいしてのみその興味を向けてくるようだ。

そして、これが私の未来のために重要な事なのだが。……ナイトメアフレームの開発具合だ。

現状第一世代すら開発は出来ておらず、どうも手探りの状態でまだ戦争は戦車や装甲車、戦闘機といったもので行っているようだ。

ナイトメアフレーム。KMF

神聖ブリタニア帝国の次期主力兵器となる予定の人型の機動兵器。

原作ではこのKMFの第四世代の「グラスゴー」の投入により、日本との戦争を有利に進める決め手となったのは印象深い。

テレビアニメでは最終的に第九世代相当のKMFが出てくるため弱く見られがちの第四世代だが、この世界初の大型人型兵器は十分な脅威となりうる。

私の指標。「グラハムさん」の為にはまずこのKMFに乗り、その実力をもつてエースパイロットとして名を上げていくのが理想的だ。

正直言うと「ユニオンフラッグ」をどうにか開発して乗りたいが、私自身機械の設計についてはド素人な上、フラッグ自体空を飛ぶことを前提としている機体であり、原作KMFが空を飛べるようになるのは1期の終盤。尚且つ完璧に再現するとなると変形機構が必須なのだが、そもそも変形するKMFは、原作2期から出てくる第八世代と言われるブリタニアの「トリスタン」と主人公が乗る「蜃気楼」の2機しか確認されていない。早期から変形機構込みの空を飛ぶロボットの開発はとても難しいだろう。

となると、今すべきことはKMFに乗るための体作りを行うことだろう。「グラハムさん」はフラッグに乗り、10Gと呼ばれる殺人的加速に耐えうる体を持っていた。彼を目指すのならばそれぐらいこなしてみせねば、同じ名を持つ人間として申し訳がない。

そして、どうにかして皇族の身分を捨て軍人になり、戦闘機乗りとして功績を上げ、最

後まで生き抜くのだ。

そうすれば、いずれ空を飛ぶ人型兵器に乗れるはず。

そこまで考えていると、3回ノックの音がした。後扉が開く音が聞こえた。私は部屋の中央でうつむきながら考えていた為、顔を上げて今回の来訪者を確認する。

さて、またぞろV. V. の訪問か、それともメイドが食事でも運んできたのだろうか。余談だがメイドが持つてくる飯は結構美味い。グラハムさんらしくはないが、私自身メイドという存在は前世から好きなので食べさせてくれる時は少しの幸せを感じてすらいる。

しかし、訪れたのはどうやら私の地獄<sup>V.</sup>と幸福<sup>V.</sup>のどちらでも無いようだ。

「やあ、はじめまして。君が僕のはじめての弟かな」

そう言いながら、原作において最後まで主人公ルルーシュを苦しめた男「<sup>第2皇</sup>シュナイゼル」は薄い笑みを浮かべながら、私の前に現れたのだった。

「はじめましてだな! あにうえ!」

私は、空虚なのだろうか？

私が初めて言葉を理解したとき、最初に父から言われた言葉は空虚な子だった。

空虚とは何か？空虚であることは何を意味するのか？そもそも父は私を見て、何を感じて空虚と称したのか？……疑問はとどまることなく溢れそうになるが、ふとそれは止まった。

そもそも、何をもって空虚となすかなど今はどうでもいい。

それを探す必要などない。それが何なのか知らなくてもどうとでもなる。私の根底に關係ない。何故なら、生きていく上で目の疑問などいざれわかるのだ。それがわからないからといって今死ぬわけではない。そもそも自分が今生きている意味すら必要と感じない以上、その先を理解することなど非合理的だ。

そう心と頭が言葉は違えども「必要なし」と断じた瞬間から、私の根底は決定したの  
だろう。

合理的。己が存在を守るものと断ぜず、ひたすら負けない理由と場所を理解し、その  
上でどう転んでも大局において決定的に負けない生き方を選ぶ。

故に空虚。

ならば、是非もなし。私はその答えを得た時から。シユナイゼル空となつたのだ。

「しかし、これはナンセンスではないかな?」

私の根底が定まってから4年の月日が経ち、私に弟が出来ていた事を知つた。

確かに私は人1人の価値など、自分の身分故に国やその先を考えれば重要ではないと  
理解している。その自分自身すら捨てることも時には必要だろうと。

しかし、そのためにはまず知らなければならぬ。意味を、意義を、存在を。

故に、私が未だ知らない家族コマがいるのならば、まずは会って理解しなければならぬ。

理解した上で接し方を考えよう。そうすれば、未だ理解できないあの父上のことも多少は解るのではないか？ そう思いながら、その弟のいる部屋に向かう。

部屋の前に立ち、3回ほどノックをして中に入る。

父などは私の部屋に入るとき、1度もノックなどしたことはないが私は常にしている。父にとって私は下位。なれば礼儀は不要といったところだろうか？ 理由はわからないが私にとっては、最初に印象を悪くしないためには必須の行動になるとここ2年で学んだ。

部屋の中から返事がないため、留守かと思つたが部屋の前に立つメイドからまだ声を聞いたことがないので、話せないのかも。と言われ、ならばとそのまま中に入る。

「やあ、はじめまして。君が僕のはじめての弟かな」

私は部屋の中央で下を向いている子供に、普段周りに話すときと同じように声をかける。

私の声に顔を上げた弟を見ると、見た目は私と同じ金色と髪を短く切り揃えてあり、瞳の色は緑がかった青色。私と血の繋がった兄弟とわかる特徴をしていた。

しかし、私が2歳のころから片言とは言え話していたらしいが、この弟はまだ声も出

せないらしいとは。やはり彼も普通の家族コマなのだ、と思つていと

「はじめましてだな!あにうえ!」

「ツ!グラハム殿下がお声を!」

弟が声を上げたのだ。私の後ろに立つメイドが驚いていることからして、本当に今初めて声を出したのだろう。初めてにしては言葉を理解しているようなところが不思議だが。まあ、私のような例もある。さして、重要ではない。

それよりも重要なのは、私を見るこの弟の目だ。こんな突き刺すような視線は初めて感じる。

父の視線もどことなく鋭さを感じるが、この弟の目はそれとは違う。

そうだな、これは貴族が向けてくる探る視線のようでもあり、何か興味深いものを見るような視線でもあり、何よりうっすらとだが警戒心を感じる視線だ。

私の想像話に怒りの表情を浮かべる時の軍人が、主にこの警戒心を向けてくることがあるが。

何故、ただの、初めてであったはずの弟が私にそのような視線を向けてくるのか。

その視線に、とても興味が湧いた

私は気付くと口元に笑みを浮かべていた。弟グラハムが初めて喋った相手が私とあつては、多少なりと喜ぶのが人間的であり合理的だろう。

その後は他愛もない自己紹介をした後、また来るよと告げそのまま自分の部屋へと戻った。

彼の視線の意味。彼の初めてを向けてきた意味。深読みすればどうとでも捉えらる。

浅く考えれば、ただの子供の成長の一端に立ち会えただけと思える。しかし、私は深読みしたくなった……あの視線の意味を知りたい。

あれは知らなければならぬ。あれは私の空虚を埋める可能性を持っていると直感的に感じた。

それからは、ことあるごとにグラハムのもとを訪れるようになる。

私はシユナイゼル<sup>空</sup>。己の根底にあるこの合理性<sup>空</sup>をもって、興味の対象を事細かに暴



く。

私のこの生き方を決定付けたのは恐らく……この弟<sup>異</sup>グラ<sup>物</sup>ハムと出会ったからなのだろう。いつか私の空虚を埋めるものを見出だすその時まで、私は止まらない。そしてその時まで、私を楽しませてほしい。グラハム・エル・ブリタニア……

# 初めましてだな！本格説明！

あれからさらに2年の月日が経ち、私も晴れて5歳となった。

原作グラハムさんでいうと、孤児として劣悪環境真つ只中のはずだが、私はブリタニア皇族第3皇子とやらの身分のおかげで不自由はしていない。別に悪いことではないがこのままではグラハムさんのような気高き精神は育まれないのではないかと日々考えている。

不自由はしていないが、この2年で大きく変わったことがある。

あの唐突なシュナイゼルの訪問にたいして、何とか渾身のグラハムさん台詞を噛みながら返すことができたのだが……まさかこの世界ではじめての言葉を……ましてグラハムさんの台詞だと言うのに……！噛んでしまうとはッ！なんと情けないッ！！

いや、まあ、情けなくはあるがそれより驚くことが起こったのだ。

あのシュナイゼルが薄い笑みを浮かべて私を見ていたのである。

コードギアスファンならば考えたことがあるだろうが、彼は決して悪人というわけ

はない描写が原作中よく挟まれている。

彼がラスボスのポジションに立っていたのは、その卓越した思考力とそれを千手先ま  
で合理的に捉える人間性にあると私は考えている。

その合理的な人間性は、必要悪を容認し、その上で少数の犠牲による多数の幸福を  
現しようとすることに一切の躊躇を持たない。

決して人の気持ちを理解しないのではない、

決して少数の犠牲を悲しまないのではない、

決して片寄った価値観を持っているのではない、

しかし彼は、決して己の幸福を望んでいるのではない。

人間として必要な、所謂本能的欲求がどこか致命的に欠けている。それが私のシユ  
ナイズルにたいする評価だった。

そんなまるで自分を含めた全てを駒のように捉えることのできる男が、私にたいして  
興味深そうに薄い笑みを浮かべていたのだ。

はじめての弟が、反応をしたことを喜んでいるのならばまだ良い。私もただの肉親な

らばその程度の情を持つ。

しかしいつからあの思考と合理性を獲得したのか不明だが、原作を知っているものとしては、警戒すべき事態と捉えても良いだろう。これが演技ならば恐ろしいものだが、逆に今だあの考えに至っていないのであれば納得のいく行動。

そこまで考えて、私は「らしくない」とその考えを捨てる。

警戒はしても良いだろう。疑うのも当然だ。だが悩みすぎてはいけない。私の知る「グラハムさん」は常に行動し、結果を出し、その先の答えを戦うという手段で模索し続けた男だ。ならば私もそうしよう、考えすぎず心のままにぶつかろうと今決めた！

その警戒心を知ってか知らずかシユナイゼルは、少し悩む素振りを見せた後、自身の名前「シユナイゼル・エル・ブリタニア」と私の実の兄であることだけを伝え、また来るよと言い部屋を出ていった。

余談ではあるが、何故かシユナイゼルが出ていった扉の横でメイドが私を見ながら涙を流していたがあれはなんだったんだろうか？

そんなシユナイゼルとの「初めまして」のあと1週間も立たないうちに、彼は私のも

とを訪れていた。

「やあ、グラハム。元気にしてるかい?」

「ふ、ぐもんだな。みてのちよおり、げんき」

こんな感じの、実にふてぶてしい喋り方ではあったが、私との会話をしに、彼は毎週欠かさずに部屋に来ていた。

私が部屋から出る許可が出ていない間の情報は、この彼の行動によってある程度補完されていた為、警戒はしつつも楽しい会話を続けることができたのは嬉しい。

それに何より、私が話せるようになったことを聞き付けたV・V・Vが私の部屋を訪れる頻度が上がっていた為、精神的にもV・V・V以外の会話相手がいて助かったというのも嬉しい理由の1つだ。(尚、2年経ってからわかったが、私の外出を禁じていたのはこのV・V・Vの独断だったようだ)

早い話がこのシュナイゼルとV・V・Vの行動が私の2年間の大半を埋めていたのだ。

そして2人の話によるとKMFの第一世代機の開発が進んでいるらしい。アニメで

は第一世代と第二世代機は実験機のような扱いで名前も登場せず、その世代があつたことだけ語られていたが、どうやら今開発の真つ最中のようなようだ。

となると、近い将来第三世代機にしてアニメ上ではいわく有りの機体。あのマリアンヌがテストパイロットを務めた「ガニメデ」が誕生するのだろう。

マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア。またの名を「閃光のマリアンヌ」

彼女の説明はなんとも難しい。アニメにおいては最初に死亡していることが判明しているキャラクターにして、このコードギアスにおいてルルーシュの生き方を良くも悪くも決定付けていく存在の1人だ。

ブリタニア帝国において、「皇帝の剣」「ブリタニア最強の騎士達」と呼ばれる称号「ナイト・オブ・ラウンズ」の一員にして、そのラウンズにおける最強「ナイト・オブ・ワゴン」に、恐らく特殊な力一切無しで土を着けた唯一人の人物。そのKMFの腕と容姿、性格全てをシャルルに気に入られ、唯一シャルルが愛した女性として描かれている。

主人公ルルーシュの母である時点で、キャラクターとしては重要度が高いと考えられるが、後々明らかになる情報が濃すぎて魔女を通り越し悪女とすら呼んでも間違いないキャラクターになっていた。

まあ、今はこのマリアンヌ某はどうでもいい。戦う機会があれば同じ強キャラ設定を持つもの同士(?)として、存分に力をぶつけさせて貰うが、今はどうでもいい。(よくない)

私に気になっているのはこの「ガニメデ」のほうだ。

正確にはこのガニメデの腕の機構なのだが、私の指標……いや、この際目標と言い換えよう。

私の目標、「グラハムさんのように生きる」その為に必要なものの一つ。「フラッグ」が作れる可能性を秘めているのがこのガニメデの腕なのだ。

「フラッグ」という可変機はその背中の特徴的なウイングもさることながら、頭部のセンサー内蔵型のオレンジのバイザーと形!により人形形態時と飛行形態時の機能的で尚且つかっこよさの際立つ洗練されたフォルム!!そしてその変形時のフォルムを保っていると言っても過言ではないパーツが腕と足なのだ。(無論、もつと突き詰めれば正しく黄金比とも呼ぶべ(割愛))

このフラッグの腕や足は変形時に軽く折り畳まれるのだが、その腕の中や足の関節部に武器が収納されているため、無理のない、しかし流動的な関節を再現しなければならぬ。その点で言うと、先ほどのガニメデというKMFは待機状態の時、その両腕をな

るべくコンパクトに畳んでいるのがアニメでは見受けられた。

ならばその腕の機構を参考にし、無理のない武装格納型の関節を早期に開発できるのではないかと思う。

実際アニメに登場する第四世代以降のナイトメアは肘や膝といった関節部にも武装を標準装備しているため、早いか遅いかの違いであると考える。

あとは、私の理想の「フラッグ」の実現が可能な開発者の発掘だが……それは最悪シユナイゼルが後に自身の資産で立ち上げる予定の研究組織でも利用しよう。

さてここまで考えたところで、私は自身の立場を改めて考える。

あのボス級シユナイゼルとV.V.の2人との日々のお話のおかげで、私の舌足らずは大分まともになった。

ならばそろそろ、この皇族という身分を捨てて、孤児という栄光あるグラハムさんロードの第一歩を踏み出すべき時が近いのではないだろうか（何故そうなる）

このまま、皇族のまままで居続けなければいずれマリアンヌと出会い、ルルーシュやその妹ナナリーが生まれ、いろいろと厄介な原作事件が発生していくのだろう。そしてその妹に私はルルーシュかシユナイゼルに殺される未来が待っている。

このまま第3皇子で居続けられれば、恐らく日本侵攻作戦後に日本占領後の総督として原



作通りに送り込まれる可能性が高い。その場合アニメのクロヴィスよろしく、私がルーシユに殺される。

逆に、どこにも行かず皇族のままでこのブリタニアの首都ペンドラゴンに居続ければ、皇帝となったルーシユのギアスで強制労働の果てにシュナイゼルによる攻撃で首都ごと殺される。

こんな結末しか待っていないのだから、皇族なんて辞めちまおう。それが私の結論だ。

仮にこれ以外の結末が待っていたとしても、そもそもシャルルにシュナイゼル、そしてV・V・というラスボスの魔窟の中、グラハムさんムーブで生き延びる自信はまだない。

ならば多少なり強引に自身を谷底にでも突き落として、グラハムさんムーブを磐石にしつつ、運命をねじ曲げて切り開く理想だ。

そこまで決めれば、後は行動に移すのみ。さてどうやって皇族を辞めるべきか………私はそれを考えながら、毎日やっている筋トレに励むのだった

初めましてだな！姉上！

私は今、この世界に生まれてから初めての危機に陥っている。V・Vの件もまあ危機と言えば危機だったのだろうが、あれ以降仄めかすような発言も無いため、とりあえずは大丈夫だろう。

毎日のように行っている筋トレの最中に来客が訪れたのがすべての始まりだった。

私の部屋に訪れたその人物は、赤みがかったピンク色の長い髪に、皇族特有の豪華な服。どこことなく気の強さを感じさせる瞳。あえて言おう、コーネリア皇女殿下であると。

……………うん。何で来たの？

コーネリア・リ・ブリタニア。後にその高度な指揮能力とKMF操縦技術を持って頭角を表し、『ブリタニアの魔女』の異名を持つこととなる女傑。ブリタニアの第2皇女である。

原作1期において、ルルーシュの前に何度も立ちはだかることとなる強敵だ。

その高潔な人間性によって、優秀な部下を何人も持ち、心の弱い者を「脆弱者」と呼び嫌う、さながら戦国武将のような人物だ。

……………そんな彼女が何故私のもとに訪れたのか

「失礼する。お前が私の弟、グラハム・エル・ブリタニアだな。少し面を貸せ。聞きたいことがある」

「ふ。初めましてだな、姉上」

開口一番この台詞と共に、私の部屋に無言で居座っているのである。

恒例のグラハムさん台詞は挟むことができたが……………(グッド)

かれこれ一時間は経つだろうか……………私が筋トレの最中だと理解すると、それが終わるまでは待つと部屋にあるベッドに腰掛けこちらをじっと見つめているのだ。

……………うん。何でそんなに無言で見つめてるの？

私は自慢ではないが、前世において(この世界では尚のこと)女性経験など皆無なのだ。

そして、こんなシチュエーションなど勿論経験したことがない。いくら血の繋がった姉弟とはいえ、私はどうしたらいいかわからないほどの緊張を今憶えている。将来主人公と敵対することを知ってるが故の緊張なのだろうか……………

グラハムさんならば、こんな時どうするッ!! 思い出すんだ、グラハムさんが作中で行った女性との接し方を!! 台詞を!!!

『免許があると言った』

『ガンダムを越えようと愚行を繰り返した男だ』

……………うん。ないな

……………普通にグラハムさんを引用するだけでは、女性とまともに会話する糸口が見つからん

しかし、グラハムさんはあれでも高潔な軍人氣質であり、紳士的な立ち振舞いを

.....

『失礼!』(双眼鏡をぶんどる)

『な、何を!?!』

『失礼だと言った』(まるでジャアニズム)

.....うん。マジどうしよ

「.....ふむ、グラハムよ。いつもそのようにして過ごしているのか?」

そうこうして、悩んでいるとコーネリアから声をかけてきた。

「フーン!ああ、私は毎日筋トレはフーン!欠かさないようにしている」

そうだ、私は4歳児の時点から毎日筋トレを欠かしていない。

V・V・が訪れる日も(相変わらず)、シユナイゼルが菓子を持ってきてくれた日も(旨かった)、メイドが服を買ってきてくれた日も(何故サイズが把握されているのか)、シャルルが野球に誘いに来た日も(何故来た)、その時の対応は欠かさず、しかし筋トレそのものも決して欠かさずにいる。

私の目標、グラハムさんムーブの第一歩。『10Gすら耐えうる体を手に入れる』ために。

まあ、その目標をコーネリアに伝えたところで私の思いまでは伝わるまい。

「何故、体を鍛えるのだ」

故に、理由を聞かれればこう答えよう

「愚問だな。フーン！私はまだ成長の途中だ。フーン！生きていればこの先様々な壁にぶつかるだろう。フーン！それが物理的な壁か精神的な壁かはわからないが……フーン！いざその時が来たとして、フーン！私は後悔したくないのだ。私の目標の為に……フーン！……故に時が許す限り私は自身のできることをフーン！やり続けるのだ」

「それが、筋トレである？？」

「フーン……そうだ」

「……………そうか」

私の答えに何を思ったのか、またコーネリアは黙り混み私の筋トレを眺め始める。また、一時間程こちらを見る気かと思っていたが次に口が開かれたのは直ぐだった。

「……………グラハム、お前は皇帝についてどう思う」

開かれた口から出た言葉は、どことなく緊張の色を帯びているように感じる。

「ふう……どう、とは?」

流石に真面目な話なのだと感じ、筋トレを中断してコーネリアの目を見つめ言葉を返す。

「……皇帝という役割についてだ」

「随分と抽象的な事を姉上はお聞きになる」

「お前は、オデュッセウス兄上のようにのんびりしているわけでも、シユナイゼル兄上のようにどこことなく冷静に物事を見ているようには見えない。お前の中では何か明確な答えがあるのではないか?」

……つまり、私を探りに来たのか?……いや、それは無いな。コーネリアは原作においてルルーシュを苦しめるほどのスペックを誇る人間だが、その精神は高潔だ。こんな搦め手を使ってまで私の何かを探ることはすまい。

となると目的は………

「それは皇位継承権を持つものの資質を、私に問われているのだろうか」

「………そう、とつてもらつても構わん。私は答えが知りたいだけだ」

否定はしないが、答えは求めるか………まだこの年のコーネリアは大人として完成はしていないのだな。自分の意見を通すために意思の強さのみで向かってくるとは………実に幼い人間らしい。ならば、私もその意思の強さに答えねばなるまい。

「私にとって皇帝という役割は、国の象徴を背負う立場だと思う」

「国の象徴ではなく、それを背負う立場だと？」

「国の象徴は何も皇帝だけではない、国の旗であり、国の特産であり、国の誇り、引いては国民そのものが国の象徴として捉えることができる、私は考える。ならばこそ、皇帝はそれを一身に背負い、それを諸外国に示すための立場だと考える」

「皇帝という役割は代わりがいないとしても言うつもりか？」

「ふ……そう、とつてもらつて構わんよ、姉上」

これが私の今出せる私自身の意思による答えだ。彼女がこのブリタニアの皇帝という立場に何を見ているかはわからないが、こんな考えをする人間は他にいない（いやいるだろう）。それ故に、何を悩んでいるかは知らんが、1つの選択肢としての提示が遠回しとはいえ、出来たのではなからうか。

いや、まあ冷静に考えるとそんなこと考えるような年ではお互い無いんだがね？てか、そんなことしなくても高潔な人間になるんだから私がああだこうだ言わなくても、シャルル皇帝の異常な部分は何となくわかつていくだろう（たぶん）。まあ、だからもう面倒だからぶつちやけるが……



「何はともあれ、私は皇帝という役割に興味はない。無論皇族であることにも。故に姉上、安心めされよ。私は身内と皇位継承争いをする気など微塵もない。というか、皇族という身分すら必要ないのではないかな?」

「そうか……やはり身内で争うのは……いや、グラハムお前それは言い過ぎでは?」

やはり、コーネリアは皇位継承争いによる身内争いを危惧して、その可能性があるのか確認しに来たのだな……

言い過ぎかもしれんが、それでも私の意思は伝えた。コーネリアならばV・V・ヤシャルルにこの話をもらすことはあるまい(謎の安心感)。高潔だし(今はまだだろうたぶん)。

そして、私は困惑しながらも、どこか安心した顔を見せているコーネリアを前に筋トレを再開した……

「……………まだ続けるのか?」

「フーン……………無論だ!」

余談だがその後、コーネリアが部屋を出るまで、また一時間を必要としたのは何故だったのだろうか。帰る前に笑われた気もする……解せぬ

## 幕間・コーネリア の 出逢い 前編

私は弱いものが嫌いだ。コーネリア・リ・ブリタニアという人間にとって、弱いものは唾棄すべき存在である。

力がなければ、何も手に入らない。身分が無ければ、影でいわれの無い侮蔑を受ける。それが、皇位継承権争いの渦中で育った私の、一番最初の価値観だった。

私の父上は、この国で1番偉い人間だ。故に力を持っている。

自分の意見を通せる力。それがある父上にたいしては、誰も何も言えない。

私の姉上は、女性の子供のなかで1番面倒な人間だ。故にその面倒な話術とやらで力を持っている。

自分の言うことを聞く人間を集める力。それがあある姉上にたいしては、誰も逆らえない。

私の2人の兄上の内、上のオデユツセウス兄上は、男性の子供の中で1番優しい人間だ。故にその優しさを周りに向けることで力を持っている。

自分を守ってくれる人を引き寄せる力。それがあある兄上にたいしては、誰も強く当たろうとしない。

もう1人の兄上。シュナイゼル兄上は、男性の子供の中で1番賢い人間だ。故にその知識で大人をも言い負かす力を持っている。

周囲を納得させる力。それがある兄上にたいしては、誰も正面から否定することはできない。

………そんな家族を持つ私は、まだ何の力も持っていない。だから、私は私が嫌いだ。

母は私はまだ、力なんてこと考えなくても良いと言ってくれてるが、その影で皇位継承権の低さに考え悩む姿を隠そうとしていることを私は知っている

嗚呼……母も強い人間だ。私にその弱さを見せまいといつも笑顔でいることができる強い人間だ。

私は、そんな弱い自分が嫌いだからこそ、強くなる方法を探し始めた。最初は、いつも受けている帝王学とかいうのを教えている先生に聞いてみた。

「先生、私はどうやったら強くなれるのでしょうか？」

「そうですね……皇女殿下はどんな強さが欲しいのでしょうか？」

「……………私は、とにかく強さが……力が欲しいのです」

その言葉に、先生は考え込んだ後に

「では皇女殿下……まずは今のこの勉強を頑張ってみてくださいませ。そうすれば少なくとも皇帝陛下のような人を率いる力は、ついていきますので」

……………それからは、今までより勉強を頑張るようにしてみました。

ある時は、自分達の住んでいる屋敷の庭でシユナイゼル兄上に聞いてみる事ができた。年も同じで誕生日も1日違いで、他の家族よりは話す機会も多い為、すぐに私が悩んでいることを察してくれ、相談に乗ってくれた。

「ふむ、『力』が欲しい、か……………」

「ええ……兄上はどうやってその知識を手にいれたのですか？」

私の質問に、また先生の時のように考え込んだ後

「…コーネリア、僕の知識は手にいれたというよりも、自分の中と他人の中から見つけ出したものなんだ」

「自分の中と……他人の中？」

「知識は力と、考えること事態は悪いことじゃないけど、それは手に入れると言うよりも、自分の力で見つけ出す必要があると僕は考えるよ」

兄上は「例えば…」と言いなながら屋敷の角を指差す

「僕は、自分の知らないことを知るために、今もそれを探し続けている。でもそれは簡単には見つからない、とても頑丈な宝箱に入っているんだ」

「宝箱ならば、鍵を探して開ければよいのでは？」

「じゃあ、その鍵はどこにあると思う？」

……急に理解できないことを言ってきたと思ったら、鍵は何処かと聞いてくる兄上。そんなものわからない、そもそも宝箱がどんな形かもわからないのに…

「ふふ……わからないだろう？ コーネリアにはその宝箱がどんな形なのか、どこにあったのか、周りに何があるのか。何も知らないのだから」

「あ、当たり前です！ それを探しているのは兄上なのでしょう？ 私が探しているのは『力』だったね、じゃあその『力』はどこにあるのかな？」

「ツ！?今は兄上の宝箱の話をしていただけでは無かったですか!?!それにそれを知るために私は兄上に聞いているのです！」

あまりにも何を言いたいのかわからなくなってきた、私は思わず声を荒立ててしまった。それにたいして兄上は笑みを浮かべながら

「ふふ、そう怒らないでくれ可愛いコーネリア。そう、今は僕の宝箱の話をしていた。でもそれは僕が宝箱の話を始めただからだ。だからそれを君も考えることができた。知識とは、最初に何かを知ろうとするところから始まっているんだ。『力』を得たい。知識という力を手にいれたい。コーネリア、君は既にその『力』を手に入れる条件を満たしているんだ。私に聞くまでもなくね」

条件を満たしている？

「ならば、何故先ほどは手に入れるのではなく、見つけ出すものなどと」

「だって、知識というものは人に教わるだけじゃなく、自分で必要として探して初めて自分の『力』になるからね。ただ何処から手に入れただけじゃ、それはただの知識だ。君の求める『力』にはならないのさ」

……何となく………本当に何となくだが言いたいことが解ってきた気がする

「……つまり、知識とはどうにかして手に入れるものではなく、必要なものを自分の意思で探していかなければならないもの、と？」

私にはそう、言っているように捉えることができたが……それにたいしてシユナイゼル兄上は、少し眉を寄せたあと

「……ああ、そうだね。そう捉えることが出来たなら。それこそがコーネリア、君にとつての知識の入り口だよ」

と、笑いながら言ってくれたのだ。

私はシュナイゼル兄上のことが好きになった。親身に話を聞いてくれて、自身の『力』なにかを手に入れるすべをおしえてくれた恩人。この日から、私は何度もシュナイゼル兄上のもとに訪れるようになる。

シュナイゼル兄上の部屋を度々訪れるようになって暫くたったある日のことだ。その日は珍しく兄上から頼み事をされた。

「そうだ、コーネリア。君にお願いがあるんだが」

「ほう?……うむ! 兄上からのお願いとは珍しい。私にできることなら何でも言ってくれ」

「この前、君が持ってきてくれたチョコレート菓子何だが」

兄上がそう言いながら、部屋の角に置いてある、その菓子が入っていた包装箱を指差す。



私は兄上に相談に乗ってもらってから、自分の『力』として知識を手に入れる為に、ありとあらゆる分野に興味を持つようになっていった。

その中の成果として、兄上に「こんなものを見つけていることができるようになった」と何度か自分で見つけ、買うことができたものを部屋にお土産として持っていくことがあった。

兄上が指したチョコレートもそのお土産の1つだ。

「ああーあの老舗の「ハムハムチョコレート」だな。それがどうかしたのか?」

「実は、あれを買いに行きたくてね。プレゼントしたい子がいるんだ」

ふむ……てつきり美味しくて気に入ったからまた食べたい、とかかと思っただが。プレゼントか……いったい誰に?」

「別に構わないが、買いにいくより取り寄せよう。あのチョコレートは母も気に入ってくれてな、あれから何度か買いにいって、連絡先も教えてもらっているから直ぐに連絡しよう。ところで誰へのプレゼントなのだ?」

話ながら、兄上の部屋の電話の前まで行き、店にかける準備をする。

プレゼントしたい子、と言っていたからにはおそらく年下だろうが、つい先日生まれたクロヴィスは赤ちゃんだから違うだろう。そうなると他に年下の仲の良い人など……いや、1人だけいたな

「ああ、グラハムだよ」

「ツ！あの軟弱者にですか!?!」

やはり、そうか。思わず声を荒げてしまったが、やはりあのグラハムか。

私とシユナイゼル兄上より1つ年下の弟。グラハム・エル・ブリタニア。

この男が生まれてから、今だ顔を合わせたことはないが、ろくな噂を聞かない。

曰く、声が出せない

曰く、体が弱いため部屋を出ることができない

曰く、部屋の前を通るとフンフンと音がする

等々。まあ、皇位継承権争いが起こると影で囁かれている現状を考えれば、恐らく陥れるための嘘も混じっているのだろうが……

私は、例え嘘だとしても部屋から1歩もでず、噂が流れるままに任せているなど、心も体も弱い私の大嫌いな人間だろうと考える。

しかし、何故かその不肖の弟を、シユナイゼル兄上はいたく気に入っているようなのだ。

私がシユナイゼル兄上の部屋にお邪魔するような日は、時間の許す限り私と歓談に付

き合ってくれるのだが、それ以外の日はあのグラハム・エル・ブリタニアの部屋を頻繁に訪れているらしい。グラハム付きのメイドが言っていたから事実だろう。

「何故……何故兄上はあのような軟弱者に会いに行かれるのですか……私には理解できません」

気付いたら、私は思わず自身の想いを吐露していた。

「……君は、グラハムに会ったことは？」

「……いえ、まだ一度も」

むしろ、あんな噂がまかれている中、会いに行く理由など無いのだが……

「……そうか。なら今度一度会ってみるといい」

しかし、そんな私の心を知ってか知らずか兄上は会えと言ってきた

「なッ、何故私が会う必要があ」

「君は知識という『力』を欲していたね」

なにか理由をつけて断ろうと口を開いた途中で、兄上は今まで見たことの無い鋭い視線で言葉を重ねてきた

「コーネリア、知識を力と理解できている今の君には、彼に会うことを心からおすすめるよ」

「何故ですか!」

「それが、きつと君のためになるからさ」

兄上はそう言うと、もうこれ以上はこの話をする気は無いのか、ハムハムチョコレート店の電話番号だけ私から聞くと、また今度話そう、とそれだけ言うと私のほうを見なくなった。

癪ではあるが、兄上がそこまで言うのならば1度ぐらいは会ってみるべきなのかもしれない……

そう考えた私はそれから1週間後にグラハム・エル・ブリタニアの部屋を訪れたのだ。

それが良くも悪くも、私の生き方を定める出逢いとも知らずに……

## 幕間・コーネリア の 出逢い 後編

私はグラハム・エル・ブリタニアに会う前に、あの男の情報を自身の手で集め始めた。他人の噂だけで判断してはシュナイゼル兄上が私に伝えたいことが解らなくなる可能性を危惧しての行動だ。

まず最初に調べたのは1日の行動パターン。それから始めないとその人のなりはわからないと、シュナイゼル兄上に教わったからだ。

まずは調べ始めて1日目。まったく部屋を出ないことがわかった。どうも出てはいけない理由があるらしい。やはり体が弱いのか……

2日目。部屋から聞こえるフンフンって音は、どうやらグラハムの声らしい。部屋の前に待機しているメイドが笑いながら教えてくれた。声がでないわけではなかったらしい、少し安心した。

3日目。部屋の前を彷徨っていると、見たことの無い貴族のような髪の長い少年が部屋に入っていくのを見た。……いったい誰なんだろうか？……友達ならば良いが。

4日目。今日はシュナイゼル兄上が例のハムハムチョコレートを持って部屋に入っていくのを見た。その後、部屋からシュナイゼル兄上の笑う声が廊下まで聞こえてきて

ビックリした。私の前では笑う事はあっても、声を上げてまで笑った事はないため少し羨ましい……。

5日目。今日はグラハム付きのメイドからグラハムの献立について聞いた。私たちが与えられる食事とは違って、なんとというか緑が多い料理だった。やはり体が弱いから、食事も健康に気を使っているのだろうか。……大丈夫なんだろうか？……会う日を決めたら何か体に良いものでも持参しよう。

6日目。どうやらグラハムに会いに行く人間は、あの見たことの無い少年とシユナイゼル兄上、そしてお付きのメイド2人の計4人だけのようだ。……やはり体が弱く、外に出れないから友達が少ないのだろうか……会いに行く時は年の近い付き人を選ぶ。外話が合えば友達を増やせるかもしれない。

7日目。……調べている内に、どうも自分の意思で弱い立場に甘んじているだけではないように思えてきた。……どうしようもない理由があるならば、何か力になれることはあるだろうか？……やはり血の繋がった相手だからか、会う前から情がわいてしまっている。……会うときには強い自分を見せなければ。

8日目。……何故か父上が変わった棒と分厚い手袋のような物、それと白いポールを持つてグラハムの部屋を訪れたという噂が広がっていた。ありえない、あの皇帝陛下がそんな訳のわからないものを持つて……ましてやグラハムの部屋を訪れるなど、まっ

たく想像がつかない。……噂の出どころがシユナイゼル兄上だったため、本当なのだろうが……不思議だ……まったく想像がつかない。

9日目。……もう特筆して調べることが無くなってしまった。そろそろ直接会いに行ってみることにしよう。

そうして調べ始めて10日で、私はグラハム・エル・ブリタニアの部屋を訪れることにした。

私はグラハムの部屋の前まで行くと、部屋の前で待機しているメイドに私の付き人から紙袋を渡させる。

「……滋養強壮に効くという料理のレシピ本と、それが買える店の電話番号が書いてある紙を入れてある。活用すると良い」

「あ、ありがとうございます！コーネリア皇女殿下！」

「……ふん」

メイドが頭を深く下げて、そのピンク色の髪が私の目の前に写る。

一応あそこまで調べてはみたが、ハッキリとグラハム・エル・ブリタニアの人のなりが解ったとは言えなかった。

イメージとしては「病弱」もしくは「貧弱」であり、しかしシュナイゼル兄上が気に入る程の何かを持ち、メイドからの印象は良好、そして友達も一応一人ぐらいは要るようだ。……うむ、自分で調べておいて何だがまったくわからない。今までこんな人間とは会ったことがない。

ならば、もはや当たってみるのみ。今まで調べて買ったことのある中で、健康に良さそうな物を身繕い持ってきたのだ。

頭を下げたメイドから目を離し、部屋の扉に手をかけそのまま開き中に入る。

「失礼する。お前が私の弟、グラハム・エル・ブリタニアだな。少し面を貸せ。聞きたいことがある」

とりあえず、簡潔に用件があることを伝えながら中いる人物を見る。さてグラハム・エル・ブリタニアとはいったいどんな人物なのか……

「ふ。初めましてだな、姉上」

そこには、何か……その、よくわからない格好をした金髪が腕立て伏せをしながらこちらを見ていた。

……体が弱いから、体を鍛えているのだろうか？それにしてもその服はいったいなんなのだ……

その服は、間接部に何か黒くて重そうな物体がついており、とてもではないが体の弱



い人間が着るような服には見えない。

私が出来て直ぐに腕立て伏せは止め、今度は部屋の壁にかけてある茶色い片刃の剣のよ  
うなものを手に取り、素振りをし始める。……………「貧弱」ではなく「病弱」な  
だろうか？

「ふむ、トレーニング？の最中だったか。用件はそれが終わってからでいい。少し部屋  
で待たせてもらおうぞ」

とにかく、私は何か話をしようと思ってきたのだ。相手が弟とはいえ訪ねてきたのは  
私の側だ。そのトレーニングが終わるまでは待つべきだろう……何よりグラハム本人  
のことを知ることができる良い機会だ。今のうちに観察させてもらおうつもりで、そのま  
ま部屋のベッドに腰掛ける。

「ありがたい。では御言葉に甘えて続けさせてもらおう」

グラハムはそう言葉を返すと、そのまま素振りを再開しはじめる。

……………ふむ、重りのような物をつけている体がまったくぶれずに素振りをしてい  
る。恐らく始めて数日等ではなく、もつと長い期間やっているのだろう。私が5歳の頃  
……1年前は護身術ぐらいは習いはじめているが、ここまで綺麗な動きは自分にはでき  
そうにない。

そのまま、素振りの回数が30……40……60と続いていくうちにふと思った。こ

れ何回までやるのだろうか？腕立て伏せに素振りとは、腕に負担のかかるトレーニングを続けている……腕立てを何回やったかは知らないが、あまり多くはないと思うが……

「フーン……フーン……フーン！」

……なるほど、部屋の前から聞こえるフンフンという声の正体はこの素振りの時の声なのか。あの噂が流れ始めたのは1年前……ということは少なくとも1年以上も前からこのトレーニングをしているのだろう。

「フーン……フーン！」

……それにしても、ほんと何回するつもりなんだ？もう100回は越えたぞ？

「フーン……ハアッ……フーン！」

ん？何か掛け声に違うものが混じってきたな……

「セイツー……フーン……愛……フーン！」

………何故、愛？今「愛」って言わなかったかこいつ？

「フーン……フーン……フラッグ……フーン！」

おい、また何か混じったぞ?!フラッグってなんだ!?何で掛け声に旗!?

というか、もう120から数えるのを止めたがそろそろ一時間立つのだが………そろそろ声をかけよう。このまま見続けているのは正直耐え難い。

「……………ふむ、グラムムよ。いつもそのようにして過ごしているのか？」

「フーン！ああ、私は毎日筋トレはフーン！欠かさないようにしている」

……………おい。え？そのまま言葉を返すのか？普通その手を止めてから話すべきではないのか？

そう考えてから1つの考えが浮かび上がる。

もしや……………まともな教育を受けていないのでは？

体……………は弱いようには見えないが何か理由があつて部屋を出れないならば、私のように屋敷の勉強部屋で先生に何かを教わることも難しいのかもしれない。

ふむ、そうなるかと常識を問うのもまた違うのかもしれない。

ならば、このまま話を続けよう。……………後で常識だけでも教えてやるか

「何故、体を鍛えるのだ」

とりあえず、気になった。何故、それほどまでに体を鍛えるのか

「愚問だな。フーン！私はまだ成長の途中だ。フーン！生きていればこの先様々な壁にぶつかるだろう。フーン！それが物理的な壁か精神的な壁かはわからないが……………フーン！いざその時が来たとして、フーン！私は後悔したくないのだ。私の目標の為に……………フーン！……………故に時が許す限り私は自身のできることをフーン！やり続けるのだ」

……その答えに、驚かなかったといえれば嘘になる。この男は、自分よりも年下なのに……常識も持っていないのに……自分の前に今のままでは越えられない何かがあると気付いている。この男もまた、私と同じで弱い自分を良しとしないのだろう、故に鍛える。強くなる手段を求めている。この男にとってそれが……

「それが、筋トレであるか?」

「フーン……そうだ」

「……………そうか」

……正直私はここに来るまで、何かを話そうとは特に決めていなかった。

しかし、このトレーニングをする理由が自分の弱さを認めず、強さを求めているなら……私と近いのならば聞いてみたいことができた。誰にも……そうシユナイゼル兄上にも聞いたことのない話を。

「……………グラハム、お前は皇帝についてどう思う」

私がそう口にした瞬間、部屋の空気が変わった気がした。

うまく口にはできないが、この男の目が鋭くなったような……何かを怖がっているような目になっているように感じた。

「ふう……どう、とは？」

グラハムは素振りを止めてこちらを見つめてくる。

……やはり、先程までと何か違う。もしや、常識がないわけではないのか？

とにかく、話を正面から聞いてくれそうなので、私は自分の中で答えがとててもはやもやしている疑問をぶつけてみた。

「……皇帝という役割についてだ」

「随分と抽象的な事を姉上はお聞きになる」

ああ、抽象的なのは私もわかつている……だが抽象的だからこそ答えられる人間は限られる。

「お前は、オデュツセス兄上のようにのんびりしているわけでも、シュナイゼル兄上のようにどことなく冷静に物事を見ているようには見えない。お前の中では何か明確な答えがあるのではないか？」

オデュツセス兄上は、抽象的な質問にはどこかほわくんとした答えしか返ってこない。

逆に、シユナイゼル兄上は、答えこそ返ってくるものこの質問をするのは……怖かった。この質問をしたら何か知りたくない……知ったらいけないものを知ってしまう気がしたのだ。

2人とも、種類は違えど『力』を持つが故の答えなのだと思う。しかし私は違う……私と同じ……いや、私に近い答えをくれるのは、弱さを認めず力を求めるこの男ではないかと思うのだ……

「それは皇位継承権を持つものの資質を、私に問われているのだろうか」  
皇位継承権か……それについても考えないわけではない。今はそれについてでもない。この男の答え知れるならば構わない

「……………そう、とつてもらっても構わん。私は答えが知りたいだけだ」  
そう、答えを。

ふと、グラハムの目がまた変わったように感じた。

「私にとつて皇帝という役割は、国の象徴を背負う立場だと思う」  
象徴？力の象徴ではなく？まして、それを得るのではなく背負う？……………どういうこと

だ？

「国の象徴ではなく、それを背負う立場だと？」

「国の象徴は何も皇帝だけではない、国の旗であり、国の特産であり、国の誇り、引いては国民そのものが国の象徴として捉えることができる、私は考える。ならばこそ、皇帝はそれを一身に背負い、それを諸外国に示すための立場だと考える」

……確かに、言われて考えてみると多少の納得はいく。この部屋のベッドの頭に置いてある「ハムハムチョコレート」の箱もしかし。これを店の主人Ⅱ皇帝と捉えると簡単だ。

この店は主人が店を開いてはいるが、店を象徴するのは主人だけではない。主人が用意する商品、名前、そしてそれを買うに來る客が店の象徴なのだ。ならばそれを示す立場が、客を迎える主人の役割なのかもしれない。だがそう考えると疑問が湧く……

「皇帝という役割は代わりがいるとでも言うつもりか？」

そう、そう考えると別にその役割は主人や皇帝でなくても良いと思うのだ。示すことができるのであれば、それが従業員でも、ただの客の一人でも可能に思えるのだ。私の質問にグラハムは

「ふ……そう、とつてもらつて構わんよ、姉上」

と、私が先程返した言葉とほぼ同じ言葉を返してきたのだ。

私はそれに……思わず呆けてしまった。

この男は、今の私が心のうちに持つ答えとは別の答えであったが、それを私の中に納得できるように伝えてきたのだ。私自身の言葉を使って、それを考えられるように誘導までして……

なるほど……あのシュナイゼル兄上がああも気にかけるわけだ。とても自分より年下の人間とは思えない。この男……いやこの家族は……弱い自分をどうかしようと思掻きながら、人にも何かを与えられる強い人間なのだ……

そう感慨に耽っていると

「何はともあれ、私は皇帝という役割に興味はない。無論皇族であることにも。故に姉上、安心めされよ。私は身内と皇位継承争いをする気など微塵もない。というか、皇族という身分すら必要なのではないかな？」

「そうか……やはり身内で争うのは……」

私の先程の曖昧に求めた答えまで寄越してきたではないか……この男はオデュッセウス兄上とは違う力を……まるで慈しむような優しさという力を持っているのかもしれない……

そこまで考えてから、グラハムの言葉を自分のなかで反芻して、思わず

「……いや、グラハムお前それは言い過ぎでは？」



なんて、取り繕うこともせず言い出してしまったのだった。

なんとも可笑しな男だ……

体が弱いと思つたらそうでもなく

自身の弱さに甘んじているかと思つたが、それを払拭せんと鍛えており

心が弱い故に交友関係が狭いかと思えば、話すどことなく優しさを感じる

どことなく私に近い存在……これもまた家族なのだとは私は認めた。これからはグラハムを悪く思うことなどできそうにない……グラハムは決して「軟弱者」などではなく

……

「誇りある優しい弟なのだな……」

その言葉は決してこの弟の耳には入るまい。思わず溢すように言ってしまったが、彼は既に素振りを再開していた。

「……まだ続けるのか？」

「フーン……無論だ！」

どうやら、この弟はまだまだ止まる気は無いようだ。ならば私も強くなるためにでき

ることをまた探し始めよう。

まずは、この弟を真似て体を鍛えるのもいいかもしれない。自分よりも幼い体の弱い（かもしれない）男が必死に頑張っているのに、姉である私が女であることを理由に体を鍛えないのはダメだ。それは私の弱さになる。それに……この弟には私の強くなった姿を見せつけてやるのだ。私が悔ってしまった男が自身の強さを見せてくれたように、私も自身の強くなった先を、この弟に………

その後も、何となくグラハムの素振りを見続けていたがあの時折混ざる変な掛け声に耐えられなくなり、笑いを堪えながら部屋を後にするのだった。

「さて……まずはおりをみて常識を教えるか……私の知識<sup>カ</sup>を見せてやらねばな」

## 初めましてだな!家族!

人生とは選択の連続であると、誰かが言っていた。人の数だけ選択肢があり、その選択肢の数だけ未来がある。

前世で私は35歳までは生きていたことを憶えている。私の前世での選択の結果が、今の私を形作っているのだ。

「……そうだ、もう少し力を込めるんだ……ああ!いや込めすぎだ!もつとそつとだな……」

前世の記憶がある転生者としてのアドバンテージの1つは、その選択の結果がある程度わかっていることにあるだろう。

人を殴れば相手は傷付く。

物は壊せば元に戻らない。

人は死んだら生き返らない。

そんな生きているとおのずと解る様々なことを理解していることは、明確な強みになる。

「コーネリア……そんな教え方じゃ彼もわからないのではないかな?もつと理論的に教

えてあげたらどうだい？ 例えば、持つときに腕全体に力を込めるんじゃないやなくてね？ 握る手だけに集中して……」

その強みで死ぬ可能性を無くしていったり、逆に目的の為の道を選んでいったりするものが昨今で見られる、いわゆる「異世界転生もの」というものなのだろう。私のこの前世の自分と違う姿で（おそらく）コードギアスの世界に生まれたこともその「異世界転生もの」と言える。実際、喋れるようになってからは相手の性格、反応をある程度予想した上で話し、その予想通りの道筋を歩いていけている。つまり「グラハムさん」の道だ。

「兄上！あまりそう理詰めで教えなくとも……難しく考えてしまつて体が動かなければ意味がありません！ いざというときに動けるように、体に覚え込ませていく為にもですね……」

「グラハムさん」のように振る舞うよう努め、自分の死亡フラグはなるべく回避し、ちよつと変わったことを言うが良くも悪くも普通の人間に今は見えるようにしてきたつもりだ。

「いや、コーネリア。今のうちに理論的に憶えていれば、これから僕たちがいない時の練習を効率的にできると思うんだが……」

「それはそれ！ できるようになってからでも遅くは……」

前置きが長過ぎたな……………うん、簡潔に言うのだね。

「コーネリア……………」

「兄上!」

「グラハム、君（お前）はどっちの教え方がいい?（!）」

コーネリアとシュナイゼルが私の取り合いをしているんだ、ハハ!想像つかないだろ?

……………うん、どうしてこうなった?

コーネリアが初めて私の部屋を訪れてから、シュナイゼルの時のようにまたすぐに訪ねて来たのはまあ、予想できなかったわけではない。「グラハムさん」の魅力に引かれたのかもしれないからな。うむ。しれっと素振り中にフラッグとか言っていたのが効いたのだろう（笑いを堪えていただけ）。コーネリアは原作でも強者の部類だからな、可能なら敵対はしたくないし、何より彼女にもいずれフラッグの良さを理解してほしいと思っただけ、サブリミナル効果とやらを試してみたのだが……………効きすぎたか（いろ

いろ間違つてる)

あれからコーネリアもまた、1週間に1度部屋を訪れるようになった。

最初は他愛もない、その日何があつた、私はこんなことを知っている、お前は普段何してる?といった話ばかりだつた。

ふむふむ、私のグラハムさんぶりに何か思うところでもあつたのだろう(違う)。私と仲良くなり人間性を計ろうとしていいるのだ(だから違う)。ならば拒みはすまい!存分にかかつて来るがいい!(割愛)

と、樂觀してた時期が私にもありました……………。

コーネリアが様々な話をして数日たったある日、いきなり

「お前には足りないものが多すぎる!私自らお前を鍛えてやろう!」

なんて言いながらお土産片手に部屋にやってきたのだ。

お土産自体はありがたい、私付きのメイドさんもコーネリアが持つてくるお土産はとて嬉しいらしく、いつも私にあれを貰いましただのこれを貰いましただの涙混じりに話してくる。……良かったですお殿下、の一言は意味がわからないが喜んでいいのだ(気付け)。

それから来る度に、

やれ素振りの時の力が余分なの、

やれもつと良い鍛え方があるのだの、

やれたまには外に出てみるのだの、

とにかく口うるさく構ってくるのだ。まったく鬱陶しいと思わない自分が不思議だ。

彼女はKMFを自身で駆って戦場に立つ、数少ない皇族故体も鍛えてるだろうとは思ったが……ちよつと懲りすぎてはないだろうか?もつと休んでもバチは当たらないと思う。ん?私?グラハムさんのようになるためなら休みなどいらん。当たり前だ(手のひらドリル)。

そんな感じで(どんな感じだ)コーネリアのレッスンが始まってまたまた数日経ったある日、

「コーネリア……それじゃ、グラハムも疲れてしまうよ。さ、今日はゆっくりしようじゃないか」

シユナイゼルがハムハムチョコレート片手に乱入してきたのだ。

いや、会いに来てくれるのはいいんだ。最近大分シユナイゼルの空気というか、雰囲気慣れて会話を本気で楽しむ余裕が出てきたし。でも、コーネリアとシユナイゼルと一緒に私の部屋に来たことなど無かったから、今の2人の関係がまったくわからず、私

は何も言えずにいた……そうして呆然としているうちに今にいたるのだ……

「理論も大事ですが、兄上は少し甘やかしが過ぎます！」

甘やかし？いや、結構精神の削れる話とかするよ兄上？

最近で一番削れたのは今何がしたいって質問だったよ。フラッグ作りたとか言えないじゃん。滅茶苦茶困ったよ。てきとーに「ふ、私は我慢弱い人間なのだよ」って言つてずうっと黙つてたら何か納得して帰つてくれたけど。やっぱり困つたときはグラハムさんだな（尚コーネリア時）

「コーネリア、厳しく当たれば良いというものでもないと思うんだ僕は。グラハムのペースを守つてあげられるように手を貸すなら僕も良いと思うよ？……ふふ、それに君の方がグラハムに甘いように見えるけどね？」

コーネリアが甘い？いや、結構厳しいよ姉上？

最近で一番厳しかったのはテーブルマナーを教えられた時だったよ。やれ使う順番が違う、外側から使え、音を立てるな、そんなにながつつくな、まだあるから、等々ずうつと私の側で指導してくるのだ。思わず「興が乗らん!!」っとパイッとそっぽを向いてポイコツトしようとしたら、随分と落ち込んでしまった。今度一緒に庭を散歩する約束で何とか機嫌を戻してくれたが……やはりグラハムさんの台詞は女性と相性が悪いのだろうか？（?）



……まあ、これで兄妹喧嘩にまで発展することは無いだろうが、今後の関係を良好に保つためにもそろそろちゃんと話すしかないか、と思いい口を開ける。

「兄上、姉上。2人の気持ちを嬉しく思う。2人の言うとおり私の改善すべき点はまだまだあるのだろう。しかし、私もそこまで万能ではないよ。どうしても兄上の言うとおり時間をもうけて1人で続ける必要があるものは理論的にできることが理想だ。しかし姉上の言うことも理解できる。体で憶えてこそ反復練習にも実りがあると言うもの。……しかし理解は出来ていても2人の好意を無下にもできん。……兄上にも姉上にも私などのことで言い争って欲しくはない。ここは両方の案を試したい」

「両方の案? 私と兄上2人の意見は平行線だ。どうするつもりだ?」  
「やはりここは2人とも別々に私に教えてくれればいいと思うのだが」

……いや、自分で言つてて割りとうんざりする自覚はあるが、これが一番だと思ふ。  
私は学びたい(グラハム)。姉上は鍛えたい(何故)。そして兄上は理解させたい(何故)。言葉にすると何も問題はないように見えるのだから。

「……それもそうだね。思わず口を出してしまっただけ、そもそも僕たちは一緒にグラハムを鍛えようと話していたわけじゃないし。……いやはや、こんなに感情的になったのは久々だよ」

私の言葉に納得の意を示してくれるシュナイゼル。

先に納得してくれるのはありがたいけどそもそもその話のはじまりはお前だぞ？

「……………私も少々感情的になりすぎたようだ。グラハム、お前の気持ちも考えずまなかつたな。今後はちゃんと時間を決めて話し合ってからやろう」

コーネリアもわかってくれたようだなによりだ。

いやまあ、そもそも気持ちを考えるところで言う点で私とは一度も鍛えてほしいとは口にしていないのだがな？（日頃の行動）

2人ともうんうん、と納得しササつと日付だけ話し合うととつとと部屋を出ていってしまった。

月曜日にシュナイゼル。木曜日にコーネリアが勉強と鍛練を手伝ってくれることが（勝手に）決まった。

まあ、これも精々活用させてもらおう。ここまでトントン拍子に環境が整うのは予想外。しかし、先程も前半部分だけ引用したが。

「私もそこまで万能ではないよ。因縁めいたものを感じてはいるがね」

これも皇族に生まれた因縁と思えば良いものだ。

そうして、今日もまたコーネリアによつてちよつと変わっていく筋トレを始めるのだった。

「フーン……フーン……フラッグ……乗りたい!……フーン!」

尚、どこから話を聞き付けたか知らないが、いつのまにか土曜日にはV・Vが勉強と鍛練を手伝う話になっていた……

どうしてこうなった!?

## 初めましてだな！謁見！

あれから更に5年の月日が流れた……。ふ、はしよりすぎだど？メタイことを言うな。私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ。

しかし、この5年もの間起こったことは筆舌に尽くしがたく、あまりにも濃厚な日々だった。

まず第1に………コーネリアとシユナイゼルから（後V・V）勉強と鍛練を手伝ってもらい始めて2年後の皇歴1997年5月6日……シャルルの地位とやり方に異議を唱え反旗を翻した不平貴族と反シャルル派についたナイト・オブ・ラウンズの半数以上が死に、そして2500名もの人間が逮捕される事件。通称「血の紋章事件」が起きた。

私自身まだ7歳だったため、これといつて何もできなかったのだが……聞いた話によると御しやすいと見られているオデュッセウスか私を次の後釜に据えるつもりで動いていたらしい。……知らなかったけど。しかしもしそうなら私は00のユニオン軍を作るつもりだった。無論フラッグも作って量産してフラッグファイターを沢山産み出し、その先にはフラッグの模型を全国で販売し新たなフラッグファイターの種を

世界中にばら蒔いていくことも可能だったのだろう(いろいろと無理)。くっ、その未来が少し惜しいぞ!

まあ、いろいろと私の周りで軽く事件は起こったらしいが、コーネリアとシユナイゼルとV・V・が裏で動いていたとか何とか。ぶっちゃけ知りたくない。怖い

あ、そうそう「血の紋章事件」が起こったことで知ったが、どうやら現在ナイト・オブ・ラウンズって2名だけらしい。残り全部死んでしまった(というかシャルル側が殺した)。

しかも、原作でナイト・オブ・ワンとして登場するビスマルク・ヴァルトシユタインの前任者を殺したのはあのマリアンヌだっけ言うからビックリした。というかマリアンヌは既にナイト・オブ・シックスとしてラウンズにいたらしい。……よく今まで存在を知らなかったな私。てか、現在のラウンズはKMFとか存在しない時代なので、素の肉弾戦による実力が普通の人間よりかけ離れているらしい。可能ならその実力を身に付けられる鍛練方法を知りたいものだ。そうすれば肉体的にはグラハムさんに匹敵できらう。

そして第2に起こった大きな出来事は、シャルルの弱肉強食主義の過激さが増したことだ。とうとうシャルル自身の口から、皇位継承権を持つ皇子・皇女同士を競わせ、勝ち残った者を跡継ぎにすると宣言したのだ。おかげで仲の良かったコーネリアとシユナイゼル以外の他の皇族はみな、私を避けるようになった。いや、元々部屋にいることが大半だった為、あの2人以外誰も私のところには来たことないのだが。まあ、自分で選んだわけではないが原作最強格の2人が敵にならないこの現状はありがたい。一気に生存確率が上がった。

さて、最後に3つ目だが……私の10歳の誕生日において皇帝シャルルから1つだけ願いを叶えてやろうと言われたのだ。

生きるとはそれだけで、様々な物を消費していく。まして体が弱い（ことになっていくらしい）私が10まで生きたことを祝して、褒美を与えてみてはという動きが裏であつたらしい。現在のシャルルを動かせる人間がいるとは驚きだ。

だからこそ、私はこのチャンスを最大限利用させてもらおうとしよう。生存確率を上げ、グラハムさんムーブの為の大きな一歩とするために。

ようやく……ようやく肅清が終わり、ワシとマリアンヌの……兄さんの夢を叶える大きな1歩を踏み出す事ができた。

最初はまず、様々な子供を沢山産ませることが計画の1つだった。その計画のために、ワシは妻を108人も持つことになったのだが、ワシの愛する女はただ1人のままだ。

嗚呼、マリアンヌ……。お前はとても強く、理知的で……。何よりワシの……。ワシと兄さんの夢を理解してくれた。他の誰にも理解されぬと……。計画が全て終われば誰もが理解するのだから構わぬと思っていたワシに、お前は光をくれたのだ。嗚呼、マリアンヌ……マリアンヌよ。ワシは兄さんとお前と歩める今が、そしてすべての人々とわかりあえる過去みらいが叶う日が待ち遠しい……。

女として愛した人はマリアンヌただ1人だが、ワシは自分の子供にたいしてはなるべく愛情を向けられるよう努めたつもりだ。

子供は良い。生まれた瞬間などは嘘など思い付きもしない、純粹無垢な子らを見る瞬間はいつも心を和ませる。しかし、余計な知恵を身に付けた子は別だ。ワシはその知恵を得意気に見せられた時に、言い様のない怒りに体を支配されたのを今でも憶えてお

る。

兄さんも同じ気持ちのようで、度々子供の話を着に食事を楽しんだものだ。やれ、賢しい子供は嫌いだ。やれ、従順すぎる子供は嫌いだ。等々、実は兄さんは子供が嫌いなのではないかと思ったりしたが、違うと言われ困惑したりしたのも懐かしい……

その兄さんが、やけに構っている子供がいると聞いたときは驚いたものだ。

ワシの2人目の息子と同じ母親を持つ、5人目の子供にして3人目の息子。グラハム・エル・ブリタニア。

「兄さん……最近やけに構っているそうで。あのグラハムをそんなに気に入ったのですか?」

そう聞いたこともあるが、兄さんは笑って

「気に入ったと言えば気に入ったのかな? ギアスの素質があるのにギアスが生まれる余地がないなんて……随分と不思議な子供だよ……それにね、彼とても面白い子だよシャルル」

と、イタズラでもするように教えてくれた。

憐れグラハムよ……兄さんはこうなるとことんまでおちよくつてくるだろう……。それがグラハムの人格にどのような影響を及ぼそうと知ったことではないが、それが原



因でワシらに齒向かうような愚かな真似だけはしないでもらいたいものだ。

かつて兄さんが言っていたが。子の持つものは親が全て最初に与えたものだ。

皇族の子ならば、その服も。家も。食事も。皇位継承権も。全て親が与えるものだ。もし、その子が己が命を賭けて獲得したものがあんならば別だが、それが無ければ子は親に生かされているに過ぎんのだ。

生きながらにして死んでいる。何も獲得できん弱者に未来はない。死んでいるのだから、権利も持たぬ。それらは、己で獲得せねばならんのだ。

そう、ワシと兄さんのように……………

何かの誰かの気紛れでしか得られぬ物など……信用ならぬのだから

ああ懐かしくも恐ろしき、裏切りの日々よ。何も自分の手で手に入れらなかつた屈辱の日々。嘘があるせいで、家族は死んだ。他者の気紛れで母さんは死んだ。己で守れぬ権利など持つから、周りが死んでいくのだ。

故に、嘘はいらぬ。

故に、生などなくても変わらぬ。

故に、兄さんとワシは誓ったのだ。嘘なき世界を……ラグナレクの接続を……

……もの思いに耽ってばかりではいかんな、計画を進めねば。そう思った時、氣配なく後ろに兄さんが現れた。

「ねえ、シャルル。子供たちはどうだい？今何人目？」

「はて……まだ10人届かぬと言ったところです。この間の「血の紋章事件」で殺された子もおりますゆえ、また作り直しです」

「じゃあさ、ちよつとした提案なんだけど、ここらで少し空気を抜いてみたらどうかな？」

空気を抜く？……何かの催しをしようと言うのだろうか。ふむ、計画のためにあまり悠長にはしていられないが、そもそとワシと兄さんの計画。兄さんが望むならそれも、また計画の1部なのだろう。

「息抜きのようなものですか？さて、では何をしましょうか兄さん」

「うん、前に話したグラハムが今度10歳の誕生日を迎えるんだけどね？あの子もあんな体でここまで生きてきたんだし、ちよつとばかり、ご褒美を上げたいと思ってる？どうかな？」

なるほど、今日も兄さんはグラハムを構いたいのだろう。しかし、医者からもギアス

教団のものからもグラハムの体に異常はないと報告は上がっているが、何故か兄さんはグラハムをなるべく部屋に居させるようにとワシに言っていた。最初は何かコード保持者でなければ解らぬことかと思っていたが、最近はまだ兄さんが気に入った子を、大事にして構っているように見えて仕方ない。

「……ふむ、ではこうしましょうか。あやつの誕生日に何か一つだけ願いを叶えてやりましょう。皇族のパーティーとして開き、ワシ直々に叶えてやると言えば、周りの不穩分子の洗い出しにもなりますし」

「うん、それでいこうか。ありがとうシャルル」  
兄さんは嬉しそうに返事を返すとまた、何処から来たのかわからぬまま、また何処かへと消えていた。

それから来る皇歴2000年の9月10日、グラハムの誕生日パーティー開いてやった。マリアンヌの妊娠も今年発覚していたのでワシ自身、今年はやる気に満ちている。

特製のケーキなどを用意し、料理もいつもワシと兄さんの分を用意させる料理人に作

らせた。あとはただワシの前に呼び、事前に用意しておいた台詞で望みを叶えるだけの、何とも形式だけのパーティよ。

「グラハム・エル・ブリタニアよ。ワシの息子よ。貴様は今日、10歳の誕生日を迎えた！貴様のような弱い体でここまで生きたことを、多少の強さは持つと認め願いを1つだけ叶えてやろう。ワシが与えるものだ。ワシがお前に与えるものだ。さあ、望みを言うがいいグラハムよ。貴様の生が獲得したこの機会。好きなように使うが良い！」

少々、大袈裟に体を動かしながらグラハムを見やる。

生まれてから、あまり顔を見る機会は無かったが。見違えたように見える。身長はまだまだ伸びる余地があるだろうが、それに対して体はまるで軍人学校に行っている子供のように引き締まっている。

シユナイゼルと同じ色の金髪に、緑に近い蒼い瞳。なによりその鋭き視線。生まれて初めてワシを見てきたこいつの目も同じだったな……。

シユナイゼルから貰ったという紺色のスーツと、コーネリアから貰ったという灰色のネクタイを着用してワシの前にいるが……：……まだまだ服に着られているように取れて、背伸びしている子供のようで少し微笑ましくもある。

「では、お言葉に甘えて私の願いを聞き届けていただきたい」

久しぶりに見る息子に少し、情のようなものを感じているとその息子が緊張ぎみに口

を開いた。

……これは兄さんのことを笑えないな。どことなく、ほうっっておいてはすぐに消えてしまいそうなこの息子は……少し幼い頃の自分自身を思い起こさせる。兄さんもそこを重ねて見ているのかもしれない。

「よい、申してみよ」

思わず笑いそうになるが、ここは皇帝として厳格に答えねばと言葉を促す。さあ、お前の望みは何だ? お前はそこどこか臆病差を感じる瞳で、ワシに何を求める!

「ならば私、グラハム・エル・ブリタニアは、日本への長期訪問を望む!」

初めましてだな！従者！

「ならば私、グラハム・エル・ブリタニアは、日本への長期訪問を望む！」

言った！言ってみせたぞ!!この内心「あれ？何か普通に機嫌良いんだけど、これまた知らないうちにやらかした？」ってビクビクしてたが、言ってみせたぞ！

そう、私グラハム・エル・ブリタニアは皇帝が願いを叶えてくれるというので、日本に行くことを望むと既に決めていたのだ。理由としては原作知識のことを含めて今のうちにおこなっておきたいことがあるのと、今後のグラハムさんムーブ……もとい栄光のグラハムロードの為の計画の1つでもある。後はシャルルが承知してくれれば、万事思い通りなのだが……

「……………ほう、日本。日本と言ったか？グラハム。お前はワシに日本を望むのではなく、日本に遊びに行きたいと？そう申したのか？」

まるで望めば国を取ってくるとでも言わんばかりの発言に私は目を丸めるが、こう返す

「遊び？いえ違います父上。私は私の求めるもののため、私が己の全てを持って手に入

「それ以外のもののために、日本へ渡りたく思います」

ああ、その通りだ。あれらを手に入れるためには文字通り私自身の全てを賭けて向かう必要がある。

シャルルは原作でルルーシュが「何故母さんを見殺しにした!」と、シャルルに謁見を求め詰め寄った時に言っていたのだ。己が命を賭けて獲得したものが無い者は、死んでいるのと同じことだと(ちよつと暴論)。

ならばその思想を利用させてもらおう。こう言えば、内心はどうであれ弱肉強食を是とする以上、認めざるを得ないはずだが……………

「……………ふむ。1つワシの問いに答えよグラハム」

「はー私にわかることであれば」

ああ、わかることであれば何でも聞くが良い。フラッグのことか?それともグラハムさんのことか?その2項目に関してならば3日3晩語り通しても尽きぬほどの愛を持っていてるぞ!

「……………お前は、訪問と言ったが、他にも人を連れいてくつもりか?」

なんだそんなことか、無論

「1人で行きたいと考えております。これは私の我が儘。元より父上からの温情による独断。ならば、ここから先は私1人の道でしょう」

私の言葉にシャルルはにやりと笑い

「その先は、お前にとつて地獄となるやもしれんぞ？」

興味深そうに私の先の道を告げる。

ふ、望むところだと言わせてもらおう……

そうだこれが私の望む道……修羅の道よ（違う）

私はシャルルの言葉に、願いが叶うことを確信し

「無論。承知の上です。父上」

ブリタニア式の敬礼を、取って答えた。

「ならば、よい。出立の用意が整い次第お前を日本へ送る。それまでは今までどおり過

ごすがよい」

シャルルのその言葉で、話は終わりのようで食事が運ばれてきた。……今まで食べた

ことのない料理ばかりで目が輝くではないか！己シャルル！これも貴様の策略か！（何

故そうなる）

「では堅苦しいのはこれまでよ。グラハム！今日はお前の生誕を祝う宴だ！存分に楽し

むがよい！」

そういえば誕生日の祝いで願いを叶えてくれるんだったな……。緊張で忘れていた。

ならば疑う余地無し！存分に食わせてもらおう！



……いや、やっぱおかしいだろ? シャルルってこんなに子供に向けてニコニコ笑う人だっけ?

パーティーは私とシャルル、コーネリアとシュナイゼルといった面識の有るものが招待されていたが、見慣れぬ者も数名いる。

「姫様、そう手が震えていてはケーキを落とされますぞ……」

そうコーネリアを気遣う者の名は、アンドレアス・ダールトン。まだ1度も話をしたことは無いがアニメと同じ声に特徴的な顔の傷、それらから彼であろうと思う。

しかし、若いな……あれでいずれ集めた孤児を自分の息子たちとし、その優秀な子らで結成した精鋭部隊グラストンナイツが出来上がるのか……このままブリタニア側にいるのであれば心強いな。

「お……あの、殿下。ジューズが溢れていますよ? どうなされました?」

そう言いながらシュナイゼルの足元をハンカチで拭く、まるで女性のような美少年は

カノン・マルデーニ。シユナイゼルが現在通っている貴族学校で不良のトップだったらしいが（信じられぬ）、何か……その……兄上の話では監督生として鞭で矯正しようとしたら懐かれたらしい（信じられぬ）。……え、アニメでも疑惑あつたけどそういう関係なの!?

まあ、鞭を振るつたのはどうせ、「合理的に完璧な平和」を求めたからなんだろうけど……実際そう聞いてみたら笑つてたし。

それにしても、コーネリアとシユナイゼルの動揺ツプリが面白いな！確かに事前に相談などしなかったし、ドツキリのような感じになったがここまで動揺するか！想像以上に私との親愛が高くて嬉しく思うぞ。これならば、例の計画の為に私の頼みを聞いてもらえそうだ。

そう内心でほくそ笑んでいるとシユナイゼルがカノンを連れてこちらに歩いてきた。

「……グラハム、10歳の誕生日おめでとう。いや実に目出度いね。君とはよく一緒に遊ぶからあまり自覚は無かったけれど、随分と遅しくなったように見えるよ」

「ふ、兄上こそ。昔は背丈も同じぐらいだったのに今はこの20cmの差が随分と大きく感じます」

「ふふ、君もいずれ私を越すかもしれないよ?」

「その時が来るのが楽しみです」

まあ、シュナイゼルは原作では201cmっていう超高身長だが、グラハムさんは180cmだからな、悔しいが追い越す未来はないな……いやあ!悔しいが仕方ないな!180cmで止まったら仕方ない!!!

「さて、僕からもプレゼントを上げよう。父上のものと比べるとやはり些細な物だが、受け取ってくれると嬉しい!」

「ふ、兄上からいただけるものにケチなどつけられるハズもありません。謹んで頂戴いたします」

「ありがとうございます。さ、カノンあれを」

そう兄上が言うのと、カノンがその手にもつ袋を渡してくる。さて、去年は今来ているスーツをいただいたが今年は何をくれるのか……今のスーツなんて00でグラハムさんが劇中何度も着用していた、恐らくグラハムさん愛用のスーツと同じ色の子供サイズ版なのだ……私がそれを受け取った瞬間に涙を流したのは言うまでもあるまい

「ありがとうございます。中身を見てみても?」

「ああ、開けてくれたまえ」

許可が出たので目の前で開けてみると……

「ふ、これはツ!!」

そこに在ったのは1冊の本。今私が最も欲していた本がそこにはあった。

『五輪書』<sup>じりんのしょ</sup> 日本のかの大剣豪が自ら記したという兵法書である。

00 製作陣のスタッフによる設定の話で、グラハムさんはfirst seasonで刹那という少年に敗北し、歪みを指摘されたことでそれを正そうと武士道を学ぶのだが、その学びの書の1つがこの五輪書だと言っていたのだ！

素晴らしい！素晴らしい対応だシユナイゼル！

「やはり、君が欲しがっていたものなんだね。良かったよ、君のメイドに君が欲しがりそうな物を尋ねたら、最近日本の剣豪が書いた本を探していたと聞いてね。もしこれならいいと思って、日本に住んでるブリタニア人に頼んでみたんだ。喜んでくれて良かったよ」

なるほど、私がメイドさんに頼みながら日本のことを調べていたのが切っ掛けになったのだな。それにしても、私のことをそこまで気にかけてくれるとは……少し恐ろしいぞシユナイゼル。勘繰ってしまいそうになる。

「ああ、これまでのプレゼントと同じで私のことを理解したとても嬉しいプレゼントだ！感謝するぞ兄上!!」

しかし、それはそれ、これはこれ。礼を欠いてはグラハムさんに失礼だ（いや相手）。しつかり礼を示し、袋を落とさぬよう抱える。

その行動に兄上は微笑み、そして私の横を通りすぎて行った。

「……さて、グラハム。何か頼みたいなら早めにね」

そう意味深い言葉をすれ違い様にかけてながら……。

……やっぱり恐いですシユナイゼル

てか、V. V. もだけどこの2人の頭ん中どうなってるの……

「グラハム!!日本に行きたいというのは本気か!?!」

ちよつと恐怖で放心していると、いつのまにか近づいていたコーネリアに肩を掴まれていた。

「本気も本気。私はあの国に興味を持ちました。やりたいのとやるべきことがあそこにあると信じています」

そう言い切ると、さすがの姉上も驚いた顔をして目を見開く。

うーむ、この顔原作でルルーシュを追い詰めた時の顔に似ていてカッコいいやら怖いやら美しいやら、感想に困るのでファンとしてはもっとしてほしいな(え?)

「…………お前の気持ちはわかった。しかし、本気で1人で行くつもりか? 供をだれも

付けずに」

「ええ、私は1人で行かねばならんのです」

そうしないといろいろ動きづらいからな。寂しさも無論あるが、私の栄光のグラハムさんロードの為だ

「……………ダールトンを連れていかぬか？」

「姫様!？」

いや、それはダメだろう。皇帝の前で言っちゃってるし何より、ダールトン自身が可哀そうだ。

「ふ、心配御無用。ここ5年で大分鍛えております故。その成果は姉上が1番ご存知でしょう?」

「しかし……………」

ふむ、もしか「血の紋章事件」で皇族が死んだりもしているから、不安でいっぱいなのかも知れないな。しかし、これからもつと悲惨な原作事件が続くのだ。耐えてほしい、姉上!!

「……………いや、もう何も言うまい。……男が覚悟を決めたのならやり遂げろよ、グラハム」

「無論、このグラハム・エル・ブリタニアに二言はない!」

そうだ、姉上はこれからのだから。前を向いてほしい……ふ、人のことは言えんな。私のほうこそ情が湧いている。

コーネリアは私の誓いを聞き、それに微笑みを返しパーティの食事を取りに戻っていった。去り際にダールトンが親指を立ててニツコリ笑ってくれたので、私も同じように返す。

さあ、いろいろとこれからやらねばならんが、今は私の祭りだ。今だけは思う存分誕生日を家族と楽しませてもらおう!

「……………やはり、ギルフォードだけでも」

「姫様!?!」

初めましてだな！別れ！

あの刺激的な（？）誕生日から一月たった10月10日。私はとうとう日本へ向かうことになった。この一月の間にコーネリアから再三ほんとに従者をつけなくていいのかと言われたり（姉上についてきているギルフォードが泣きそうな顔をしていた）、シユナイゼルには私の計画について打ち合わせしたり（とても面白がってくれて快く引き受けてくれた）、V・Vからは僕と会えなくて寂しくないようにってそっくりの人形渡されるし（ギアス関連で監視されるのも怖いので部屋に置いてきた）、いろいろとあつたがもはやこれまで……

私は今日からブリタニア皇族としての死亡フラグから離れに行くのだ!!!

そして、出発予定の一時間程前に皇族専用の飛行機の前にて、仲の良かった人達が別れの挨拶をしに来ている。

「……………ほんとに大丈夫か？従者がダメならいつそのこと私が」

最初にそう心配そうに言ってくれるのはコーネリア姉上だ。その愛情はいずれ生まれてくるユーフェミアに向けてくれ……というかあんたが来たらずいだろう皇族なのに（いやお前も皇族）



「姉上が来られては父上や兄上が寂しがりましょう。それにこの事は何度も話し合ったこと。私は一人で成し遂げて帰ってきますので」

「姫様……殿下も一人の男として覚悟が決まっているご様子、その覚悟に水をさしては……」

「わかつているダールトン……必ず便りを寄越すのだぞ……?」

「ええ、必ず。ダールトン殿、ありがとうございます。……姉上をよろしく願います」

コーネリアが泣きそうな顔で私と抱擁を交わし、離れていく。心配はいらないと思うがダールトンに姉上をお願いして、私の覚悟を理解してくれたことに対して敬礼をする。ダールトンも何処か涙ぐみながら「命に代えましても!」なんて返礼してくれる……。うん重いのだよ……君が命を捨ててやっちゃったことその真反対だからな?いくらギアスのせいとはいえ、真反対やっちゃってるからな?」

「コーネリア、もう少し毅然とした態度で見送ってあげなきやね」  
「そういう殿下も、昨日は柄にもなくソワソワしてらしたのに」

次に私の前に来たのはシュナイゼルとカノンだ。相変わらずの爽やかフェイスだな。まあ、グラハムさんのほうが数千倍カッコいいがな!!

「兄上、いただいた五輪書……本当にありがとうございました。読み終えてはおります

が…日本にも持っていき、これを励みにいたします」

「へえ……あれをもう読み終わつたのか……まあ原本じゃなくて大衆向けに書き直した本らしいから、もしかしたら日本で原本が読めるかもしれない……その時は遠慮なく捨ててくれて構わないよ」

「ふ、御冗談を……兄上、後のことは頼みます」

私の言葉に兄上は一層深く頷き、

「ああ、任せてくれ。キチンとやっておくから……コーネリアのことは言えないな……私にも便りは寄越してくれよ？無論帰るときには必ずね」

あの原作で見た、まるで何もかも見透すような視線で私を見つめる。

「ああ、必ず。……しかし兄上、その顔はあまり人には見せないほうがいい。心臓に悪  
い」

ああ、ほんとに心臓に悪い。……私はグラハムさん派だがその顔はギアスファンとしてドキドキしてしまう。

「うん、忠告ありがとう。カノンや君ぐらいだよ、僕に言いたいことを臆することなく言ってくれるのは」

「殿下の性格を理解して付き合えるのは、私かグラハム殿下ぐらいですからね。仕方ありません」

「うむ。カノン殿の言う通りだな……では、また会える日までさらばだ。兄上」

「……体には気を付けてね。こっちは任せてくれて構わないからさ」

シユナイゼルとは抱擁ではなく、しっかりと握手を交わし離れていく。カノンとは拳を付き合わせて、

「殿下のことは任せなさい。グラハム殿下も、理想のために頑張つてね」

「ああ、頼むぞ友よ」

ニヤリと互いに笑いながら別れの挨拶を済ませる。カノンとはこの一月の間に何度か話しをし、理想のロボットの話しで何故か意気投合し友となった。……やはり不良のトップでいただけあって、男の浪漫に一定の理解はあるようだ。叶うことなら彼にもフラッグの良さを理解してもらいたい、そのままフラッグファイターへの道を歩んでほしくもあるが……今はまだ無理だろう。彼にも原作での大事な役割があるのだから……

「うむ、別れの挨拶は済ませたな。ならば最後にワシからも餞別をくれてやろう」

そして、言葉どおり最後に私の前に現れたのは、あの特徴的な声にどこか喜びの色を感じさせながら来るシャルル皇帝だ。……だからそのキラキラでニコニコの顔をやめてくれ、涙みがあつて少し怖い。

「は！恐悦至極にて！」

「よい。臣下の礼なぞ今はとらずともよい。グラハムよ、ワシはお前の父として言葉を

告げにきた。故に面を上げよ」

シャルルが良いというのなら、と慌てて下げていた顔を上げてその目を真つ直ぐに見つめ返す。……いやだからギラギラした目をやめろというに（言えない）

「グラハム・エル・ブリタニアアニア！お前の望みとやら！果たし終えるまでは、帰らずともよい……がしかし！その苦難の道程に、もし……もしも力が足りぬと嘆いたならば。遠慮は要らん。この父の元まで帰ってくるがよい。さすればこのシャルル・ジ・ブリタニアの名に於いて、1度だけ助けてやろう」

……は？

「……今、何と仰せられた。今一度お聞きしたい」

「……ふ、父が子を思うて何がおかしい？皇帝の立場故1度きりだがお前をワシが助けると、そう申したまでのこと」

……え、マジ？は？嘘だろ？あのシャルルが？あの極悪非道、邪知謀逆にして弱肉強食を是とする暴君シャルル・ジ・ブリタニアが私を助ける？……Wh y?

「え？頭打ったか父上？」

やべ、あまりの原作との乖離に思わず言ってしまった!!!

「打ってはおらぬ、気に入った故の気紛れよ……しかし言葉に嘘はない。この約定は必

ず守る。安心せえい……」

「おお、怒られるずに済んだけど……え、マジで?何も私あなたの為に行動してないんですけど?むしろあなたの思想利用してこの願い叶えてもらっただけの男なんですが……」

「ま、いいか」

「貰えるもんは貰っておこう。頼ることはない(はずだ)が、保険としてこれ程心強いものもそうはあるまい。シャルル事態嘘を嫌う質だし、余程計画に支障がない限りはこの約束を破る必要もでないだろうし、ありがたく貰うことにしよう。」

「私がそんなことに頼るとは、思えませぬが……親の気遣いを無下にするのも失礼。ならばその約定、ありがたく」

「ふ、謙虚なのか図々しいのかわからぬ息子よお……1人の親として、貴様の願い!叶うことを期待する!行けえええ!!我が息子よ!!!」

「はー!」

その言葉を最後に私は飛行機に乗り込む。……ああ、何処か既視感を感じていたが、この飛行機にこの場所。ルルーシュが日本に飛ばされる前のシーンの場所か……ここでも皇族たちに見送られていたな。ダールトンと警護兵が悲しい顔をしながら敬礼していたのを憶えている。よもや、私がここにいることになるとは……乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない。

複雑な想いを抱きながら飛行機の中に入るとそこに待っていたのは、到着までの私の世話をしてくれるいつものピンク髪のメイドともう一人……

「やあ、待っていたよグラハム。忘れ物を届けてあげに来たよ」

ニコニコと笑うV。V。が座っていた。……私の気ままな修行生活はまだ来なのか？え？ここで普通、日本に向かってスムーズに行くんじゃないの？ねえ、何でもコードギアスの世界ってこんな理不尽ばかりなんだ!?!えええ!!?教えてくれカタギリ!!!  
(いや、いないから)

「まったく……折角の贈り物を置いていくなんて、よっぽど焦っていたのかな？仕方ないなあグラハムは。ほら僕のぬいぐるみだよ。君は僕がいないとすぐ泣いちゃうから

「わ」

いや、君がいないとすぐ泣くの赤ちゃんのころだけで。しかも心の圧迫が無くなって嬉しいあまりに体が興奮して泣き出したただけなのだが。てか、ぬいぐるみを押し付けてくるな。

「ま、ほんとのところは僕が別れの挨拶をしたくなつて来ただけなんだけどね」  
「ならばよ帰れ。とつとと挨拶済ませて帰ってくれ!」

「君は本当に面白い子だよグラハム……ずつと一緒にいるのに変化しない僕を気味悪がることもないし、疑問をぶつけても来ない………ほんとうにおもしろい子だよ」  
……………。

「……………」

「ほんととは何か気づいてるんだよね?でも、あえて知らないふりをしている………それに僕の知らないことも知っているんじゃないかな?何となくだけど」

「だとしたら?」

私は自分の舌がカラカラに渴いていくのを感じる。ああ、だから嫌なんだ、こいつと関わるのは。日本に行くことでこのラスボスから離れたいつてのに、最後の最後にこうやって踏み込んでくる。……シユナイゼルも恐ろしいが、奴よりこの子どものほうがよっぽど恐ろしい。無邪気ゆえのエゴイズム剥き出しの子ども。

「ああ、勘違いしないでね。別に怒ってるわけじゃないし、今さらどうこうしようとして考えてないからさ。ただね……」

……だが10年間こいつにただ振り回されていた訳じゃない、こいつの性格は知っている。それこそ、あのシャルルと同じくらいには知っているつもりだ。

「その知らないことを知らないままで行かせるのが寂しいだけさ」

だから、ここでどう切り抜ければ良いかもわかつてる。

「ならば、この私の生を見届けるがいい。恐らく不老不死の人間なのだろう貴方は。私はこちらから私の為だけに生きる。私の理想の為に。理想の自分になる為に。私は必ずここに戻ってくる。その時まで貴方が興味を失っていなければその時は……」

「君についていけって?」

「このグラハム・エル・ブリタニアが生きていれば」

「……………ふふ、ふふふふ。アハハハハハ！ やっぱ面白いね君は！ 僕から逃げるには死しかないとわかつてるのにそれを選ぶなんて！」

ああ、そうだ、その為の計画なのだ。お前は興味を持った以上はそれで遊ばないと気がすまない子どもだ。故に……

「いいよ！ 君がどうやって死ぬのか見てあげるよ！ どんな風に僕から逃げるのか楽しみだ!!」



そう、彼はこの挑戦をのむ。V・V・そつくりのぬいぐるみが彼の手で引きちぎられていく……いや、自分のぬいぐるみ引きちぎっていいの?何か呪われそう何だけど……

「じゃあね、グラハム。次に会うときが楽しみだよ。僕の興味が尽きるのが先か……君の命が尽きるのが先か。ふふふ」

ぬいぐるみの成れの果てを持ったまま、私が入ってきた所とは違う扉からV・Vが出ていく。……てか、ほんとにぬいぐるみあんなにしちやつて良いのだろうか……作つた人泣かないかな?

「では殿下、席にお着きください。もうすぐ発進しますので」

呆然としていると、メイドに促されたので言われた通り椅子に座る。……メチャクチャふかふかだこれ……やばい、気持ちいい……あ、そういえば、

「君はあの少年のことを知っていたのだな……何も言わないのか?」

まあ、考えれば当然か……昔から私の部屋を訪れていたのだから知らないはずがないか。

「ええ、皇帝陛下からいろいろお聞きしていましたから」

やはりそうか。……もしか、このメイドもシャルル側のスパイとかなんじゃ……「自分のことを偉いと勘違いしている中二病持ちのシヨタが行くだろうが、あまり気に

するな、と。まさかほんとにずっと幼いままとは思いませんでしたがね……いやあ、ビックリです」

「どことなく感情がこもってないその声で言われても……と、普段なら思うが。うん、こいつ素で驚いた時はこうなるんだつたな……てことはシャルルのV、V、を見る印象って……いや、やめておこう。これ以上はファンとしては考察してはいけない……」

「さ、殿下。日本に着いてからもお世話させていただきますので。もう暫しの時間よろしくお願いいたします」

「…………いや、私は日本には一人で向かうと父上と約束を」

「その皇帝陛下からのお達しでして。覚悟あるものにはそれ相応の慈悲をと。さ、お疲れでしょう、向こうに着くまでお休みくださいませ」

「…………そうか。ありがたく休ませていただきます」

「もしや、シャルルの言っていた「餞別」って彼女のことか……」

「この世界、実はコードギアスの原作とは違う世界なのは……と思いながら、私はメイドに毛布を掛けてもらいながら、眠りに着くのであった。」

初めましてだな!日本!

飛行機に乗ってどれくらいの間時間が経ただろうか……。眠りが浅かった為にすぐに目が覚めてしまったが、まだ日本に着いていないためそう時間が経ってはいないのだろうか。

「お目覚めになられましたか、殿下」

「ああ、中々ぐっすりは眠れないものだな。やはり目的に手が届きそうだと思うと心が踊る」

「殿下の目的……ですか」

ああ、今回私が日本行きを希望した目的だ。

1 つ目は最初から切望していたラスボスの魔窟からの脱出。これは現在叶いつつあるがV・Vのせいで先行きが不安になりつつある。……あとはシユナイゼルが私の計画を実行してくれるかどうかにかかっている。シャルルの温情も今は期待できよう。

2 つ目は私の武士道を見つけることだ。五輪書を読んである程度はグラハムさんらしきものといふミスターブシドローの片鱗は掴みつつあるが、私が最終的に求めるのは劇場版のグラハムさんだ。年齢にはまだまだ届かないが心構えぐらいはしておきたい。本質

は最後まで変わらなかつたしなグラハムさん。

そして、3つ目は原作キャラたちとの交流だ。

現在日本で生まれていないのは

枢木スザク、皇神楽耶、紅月カレンの3名ぐらいか？可能なら扇要と篠崎咲世子には接触を試みたいが、そもそも何処にいるのか検討もつかないため無理だろう。扇に関しては思うところはあがあるが、同じ年の為会えば多少なりと友好は気付けると思っていただけに、偶然的の運命とやらを信じる他ない。乙女座の私が輝くのを期待している。

逆にハッキリと会える可能性が高いのは、首相の枢木ゲンブとキョウト六家、そして軍人たちだ。軍人の中でも藤堂という男には是非とも会っておきたい。

藤堂鏡志朗。私が今回来た目的の中でも最上位に位置する会いたい男だ。原作では旧日本軍の中佐として登場し、高いKMF操縦技量と洞察力を併せ持つ優れた武人として描かれ、ブリタニアにおいても「将軍と騎士の器を持つ者」としてその名は知られ、高く評価されていた。彼の異名、「奇跡の藤堂」と呼ばれるようになった戦い「厳島の奇跡」において日本軍で唯一ブリタニアに勝利した男。是非ともその武士としての心を教えていただきたいものだ!!

さて、そうこうしているうちに、飛行機が着陸体制に入ったようだ。そろそろ私も降りる準備をしなくては……

簡単な服と日用品を積めたバッグを持つ

「こちらは私がお持ちいたしますので、殿下はそのままでお待ちください」  
てはいけないようなので、そのまま待つ。……10年経つがやはり慣れんな、皇族と  
いう立場は。

無事着陸したようで、自然と外への扉が開く。そこから1歩外に踏み出して行くと、  
私を出迎えてくれている日本の要人たちが目に入った。

左から屈強そうな男、くろ木のまき 枢木ゲンブ。(ちよつと若々しい)

続いてまるでぬらりひよんかと言いたくなりそうな老人、きりはらいたいぞう キョウト六家の桐原泰三。  
(アニメで見た姿のまんま、化け物か)

そして、少々恰幅のよい軍服を来た男性、かたせたてわき 片瀬帯刀。つくカタギリではないのか!!!カ  
タ違いとは紛らわしいぞ! (いや失礼)

その横には数名の軍人が立っていた。

私は飛行機から降り、メイドを伴って彼らの前まで挨拶に向かう。すると枢木ゲンブ  
から先に口を開いた。

「これはこれは、ようこそ日本へお越しくださいましたブリタニアの皇子どの。今回は非公  
式の来日と伺っていたが、相違ないだろうか」

なるほどなるほど、私の来日は非公式の扱いなのだ。まあ、私の我が儘による来日なのだから妥当ではあるか……そうとなれば遠慮なく……

「うむ！私は今回非公式の来日をさせていただいた、グラハム・エル・ブリタニアである！！否、これから世話になる間、ブリタニアの名はいらん!!! グラハム……そうただのグラハムとして扱って欲しい！」

そうだ！もう面倒なのは嫌なのだ！ブリタニアの名はいらん!! という気持ちで言い切った瞬間、他の人たちが啞然としている中、枢木ゲンブだけが何か興味深そうな顔で私を見ている。

「……ほう？では歓待も護衛もいらないと言うのかね？」

「無論だ。こちらは客人ではあるが無理を言った身。また頼む側である以上、遠慮は無用に願いたい」

「……君は自分が何を言っているのか解っているのかな？国の要人がそんなことを」  
「解っているとも」

ああ、解っている。本来ならば国の要人が歓待を無下にするなど、相手への侮辱に等しい行為だ。だがしかし、私がここで歓待を受けてはならない。ここで私が無理を言つて日本に来ている以上双方に迷惑をかけかねない行為は慎まねばならぬのだ。今は相手に悪い印象を与えたとしても、私のことはブリタニア皇族としてではなく、ただのブ

リタニア人として扱ってもらわねばならない。そうしなければ、ブリタニアが日本を攻めるときにつけ入る隙になり……何より私がブリタニアに帰還するとき日本に迷惑をかけてしまう。故に

「解っているが故にお願ひしたい。私のことはただのブリタニアからの来訪者として表面上は接していただきたい、枢木ゲンブ首相」

「私のことを首相とわかった上で、その発言か……そうなると、君の命の保証はできんぞ？」

「ッ!!ああ、その言葉を待っていた!!私は保証されては困るのだ!私がいずれ死ぬ身である以上どこにも迷惑をかけないためには、保証しないことを明言してもらわねばならない。」

「……ふ、もとよりその覚悟はある。……これからよろしくお願ひしたい。枢木ゲンブ首相」

そう言つて、私は左手を差し出す。やはり挨拶は利き手で行うべきだろうか？

「……………変わった皇子……いや、変わったブリタニア人だな。私が今まで会ってきたブリタニアの貴族の誰とも違う。ならば今は私もただの枢木ゲンブでいい……日本にいる間は仲良くできることを祈る」

枢木ゲンブはそうニヤリとした顔で、私の手を掴み握り返す。

「皇族として、扱わないのは承知した。だが、せっかくの客人をただここで放り出すのも寝覚めが悪い。せめて今日一日だけはこちらで用意している歓待を受けてもらうぞ？ 坊主」

「それは……」

あくまでも今日だけは歓待するというゲンブに、遠慮しようとしていると

「ふむ、若い者にしては物怖じせず言葉を交わすのは度胸があつて良いが、好意を無下にするものではありませんねぞブリタニアの皇子……いえグラハム殿。ここは我らの歓待を受けていただく。既に今日の分は用意が済んでいるものばかり、日本のことを知っていただく為にも、そして用意している日本人の為にもじゃ」

桐原翁がそう言つて私を諫めてくる。自分から言つた手前甘えるのは心苦しいが、彼の言っていることもまた事実。この要人たちの思いはともかく、用意してくれた日本人を無下にはできんか（手のひらドリル）

「では、今日はお言葉に甘えて」

「ああ、そうしなさい。……随分としつかりしているようだが君はまだ10歳なのだろう？ まだ大人に甘えてもいい年頃だ。覚悟は認めるが、まだ君にとつての異国に来たばかり。今日だけは我ら大人に任せなさい」

……どこか子供扱いされすぎのような気がするが……仕方ないか。事実私は1



0歳だし、この大人たちからすると他国の子供が背伸びしているようにしか見えないだろうし……

「さて、ではグラハム君。車を外に止めてあるから一緒に来てくれ。まずは日本の料理を召し上がって貰いたい」

そう言つて、握つたままにしていた私の手を引くゲンブ。……ふむ、これからあのスザクが育つと思うと些か信じがたいが、外面が良いだけなのかも知れないな。そう思いつつメイドと一緒に、停められていた車の中に入る。まるでリムジンのような車だ。運転席には既に人が座っていたようで、助手席にあの軍人、片瀬が。運転席の真後ろに座つた私の前に枢木ゲンブ、その隣に桐原翁。そしてもう1人だけ軍人が桐原翁とゲンブの間に座つてきた。無論、私の隣にはメイドさんが座っている。というか、この軍人どつかで見たような……

「さて、では出発してくれ……。そう言えば自己紹介がまだだったな」

そうフランクな口調のままゲンブは言つて桐原翁を指差す。……私から皇族扱いはやめてくれとは言つたが、ずっとフランクだな……ほんとにあの徹底抗戦派の枢木ゲンブかこいつ?

「改めて私は現日本国の首相枢木ゲンブだ。そしてこちらが私を支援してくれている日本の重鎮桐原泰三氏」

「先程は失礼したな。桐原泰三じや、要人扱いはせぬがワシはワシじや。日本にいる間だけでも憶えておいて欲しい」

……うん、ほんと何か食えないタヌキみたいな性格してそんな顔だな。正直こいつと最初っから顔を合わせるとは思ってたが、口にしてしまったものは仕方ないか。……自分の命だけはほんと気を付けよう。

「助手席に乗っているのは我が日本の軍人。片瀬少将だ。今回……というか今日は私たちの護衛としてついてきてもらっている」

片瀬少将は紹介に合わせて、軽く会釈をするのみだった。やっぱりこいつが片瀬少将か。とてもではないが尻の重そうな顔はしてないな（失礼）。これから老けていくにつれて、きつと慎重派になっていくのだろう。もう少し若くて髪の毛長かったらカタギリと呼んでやっても……いや、ダメだな。フラッグを作れないカタギリなぞカタギリではない！カタギリに失礼極まりない。……すまん、カタギリ……お前のような男は今だ現れんようだッ……！（何に謝ってるのやら）

「そして、最後にこの真ん中に座っている男なんだが。我が日本の期待の星でな。今回外交を学ぶ良い機会だと感じて、片瀬少将の推薦で来ている」

ほほう、あの片瀬少将の推薦か……てことは若かりし四聖剣の誰かだろうか？いや、にしてはどうも切れモノのように見受けられるのだが……四聖剣以外で片瀬が肩入れ

する人っていたのかなあ?

いや……まさかね?こんな早いタイミングで会うわけないよね?まさかねー?

と、思っていると片瀬少将が口を開いて

「彼は将来が有望な軍人です。名を藤堂鏡志朗と言いまして。先程のしつかり話された殿下……失礼、グラハム殿とも話が合うやもしれませんな!」

なんて陽気に紹介してくれた。その紹介に合わせてその武骨な顔を下げてくる藤堂鏡志朗。

「しばらくは護衛につかせていただく予定でした、藤堂鏡志朗と申します。今後よろしくお願ひし」

「枢木ゲンブさん、やはり護衛だけでもしばらくお願ひできないだろうか!」

思わず、手のひらドリルしてしまった私は悪くないと思う

私の日本での生活はこうして順調に（？）幕を開けたのだった

## 初めましてだな!藤堂!!

私はあれから啞然とする枢木ゲンブに、ひたすら頭を下げて藤堂鏡志朗の護衛を頼んだ。理由としては何処か私の琴線に大きく触れたからだと言ったが嘘ではない。しかしそれに対しゲンブはただ頭を縦に振ることはなかった

「ふむ、そこまで坊主が言うのなら彼に護衛を頼むのは構わんが……一つ条件がある」  
「うむ、私にできることならば」

そうして、藤堂を護衛につける条件として提示されたのは……

「君の持つ、どんな情報でも良い。話して良いと思つたことを藤堂にでも、直接私にでも構わんから教えて欲しい」

「ふむ、どんな情報でも……そして私が良いと思つただけでいいのだな?」

「ああ、構わんとも。男に二言はない」

……何とも食えん男だ枢木ゲンブ。私が最初に皇族としての扱いを拒んだ時から考えていたのだろうか?それともそんなことがなくとも言うつもりだったのか……しかし上手い手だ。私が皇族ではなく、一ブリタニア人としての立場を選んだため、おのずとその口は軽くなる。いや、軽くなるがざるをえない。公式の場で発言をする機会が無い

ため当然だが、彼らは私から何かしらの情報を得るための手段を選ばなくていいのだ。私が例え拷問にあつて死んだとしても、「この国にグラハム・エル・ブリタニアなる人物は来ていない。来ていたのは一ブリタニア人のグラハム君だ」と言つてしまえる。言葉遊びの範疇ではあるが、こう言つてしまえばブリタニア側が例え日本を攻撃したとしても、日本側はそれを大義無き侵略と触れ回り、国民の意気を高められる。……故に口を軽くせざるを得ぬ。私の命の保証のため……そして、私の計画通りに。

「承知した。では藤堂殿、これからしばらくよろしくお願いしたい」

「……片瀬少将、よろしいので？」

私が差し出した左手をすぐには取らず、私から視線を片瀬に向けて尋ねる。まあ、最初から決まっていたことだが、ゲンブが良いとはいえ仮にも軍の上司にやめたことをやめるなんて言つたことは失礼だな。伺いをたてるのは当然か。

「片瀬少将殿。どうかこのグラハムの我が儘……通してはいただけぬでしょうか」

「……子供の我が儘に腹を立てるのも大人気ないか……。グラハム殿、構いませぬがどうか協力のほうはよしなに」

「無論。この恩は必ず」

ちよつと嫌そうではあるが、ゲンブと桐原翁の手前断ることもできないのだろう。協力を念押しされたが問題ない。もとより多少の協力を影からするつもりだったのが、公

にできるようになっただけのこと。そうして、私が安心して息をこぼすと私の肩にメイドさんの手が乗せられる。

「良かったですね、殿下」

「ああ、日本人はとても懐が深い人たちのようだ」

この台詞は、飛行機から降りる前にメイドさんと打合せしていた、いざというときに使う場をばかす誉め言葉だ。私の肩に手を置くことが開始の合図にしてある。これを今されたということは何かあるな……。

注意して見るとわかった。片瀬の右肩が軽く上がっており、この位置からは少し見辛いが、その軍服の内側に左手が入れられていた。よもや、こんなところで拳銃を抜こうというのか!?そしてよく気づいたメイドさん!ほんとお前は何者なんだ!?

そんな風に内心驚いていると、

「総員伏せろ!!!」

藤堂の叫びと共に身を低くした私たちの頭上を弾幕の嵐が通りすぎる。……うん、よく避けたな私。あれか。日頃の体力作りが功を成したか。うん。グラハムさんもフラッグで緊急回避なんてお手の物だしな!うん、恐くないぞ!別に初めて直接的な暴力を目の当たりにしたからといって恐くなんてないぞ!!おい、メイドさん!頭撫でるな!恐くないから!!!ゲンブも桐原翁もそんな生暖かい目で見

なあああ!! 見るなと言うに!!

……………失礼取り乱してしまった。私ともあろう者が……。大丈夫だ。フラッグが1機、フラッグが2機、フラッグが3機……。グラハムさんが4人……。天国ではないか? うん、落ち着いた。落ち着いて見てみると、片瀬少将と藤堂さんが既に拳銃を取り出しており、私たちを庇うように身を乗り出していた。既にこちら側からも発砲したのだろう。外からの銃撃は止んでいる。軽く頭をあげて見てみると、数人の死体のようなものが見える。私はその光景を見て……。安堵してしまった。

安堵してしまったのだ。

私は、自分が襲撃され、何もせず、襲撃者が死んでいることに安堵してしまった。

私は……。グラハムさんのようになりたかったのではないか?

私は襲撃にあった身だ。しかし、それにたいしてなんの行動も起こせていない。



私の尊敬するグラハムさんはこんなところでただ怯えて、自身が助かったことに安堵する人間か？

否、断じて否だ。

だが、私は幼い身。

だから良いのか？このまま何もせず、自身の弱さを確認するだけか？

しかし、私は今自身の弱さ、臆病さを目の当たりにしたばかりだ。どうしろというのだ。

だが、思い出せ。グラハムさんもいつも戦うときは自身の魂を震わせるべく、自身を勇気づけるべく叫んでいただけだろう

しかし！叫んだところで私は弱い！！

それがどうした！！！！

何も動けなかった！当たり前だ！私はまだ何も戦いを知らないのだから！

弱いのは当たり前だ！私はまだ子供なのだから！

臆病なものも当たり前だ！私はまだ人を手にかけてことなどないのだから！

だが、それがどうした！私は！君は！！グラハムに憧れたのだろう！！

その生きざまを、素晴らしいと！そこに魂を震わせるものを感じたのだろう！！

ならば叫べ!!!己の心のままに!!!君のやれるように!!!

君の心を殺したくなければ!!!その手に…生きてみせると！勝利を掴んでみせろおお

!!!

気付けば私は、左手に藤堂が身に付けていた刀を鞘から抜き、握りしめていた。

「なッ!!グラハム君!!今はまだ危ない!外に出では行けないぞ!」

その心配するような色の言葉が、私の耳に届く。ああ、ありがたい。こんな状況でも貴方のような武人は心配してくれるのだな。その優しさに敬意を評する。

だが、私は今行かねば死んでしまうのだ、故に……

視界の端に、まだ息のある襲撃者が映る。まだ諦めていないようで、誰を狙っているのかはわからんが、拳銃を迷うことなくこちらへ向けてくる。

故に私は駆け出した。

「グラハム君!!!」

「坊主!危ない!!」

「ツ!殿下!!」

心配する声が三度後ろから響く。しかし振り向かずには私は駆ける。

3発続けて銃声が響く。それが誰のものかはわからぬが、私の頬を確実に1発の弾が掠れ流れていくのを感じる。

襲撃者の目前まで私が迫ると、その顔が衝撃を受けたように歪み私を睨み付ける。

「ぎ、貴様!何者だ!!!」

いまだに銃口は私を向いているが、幼い金髪の子供が刀を持って迫ってくるのに恐怖を感じたのだろう。未だに銃口は震えたままだ。

「何者か……か」

私はその銃口に臆することなく刀を上段に構える。再度発砲。またもや私の頬を掠める。

「ならば、あえて言わせてもらおう」

ああ、我が魂の名を聞くがいい!!

「グラハム・エーカーであると！」

私はその日、初めて人を己の手で殺した。

その後の事は、あまり覚えていない……………

次に目が覚めたのは、車の中でも、襲撃にあった道路でもなく、古風な和室の畳の上だった。

「私は……あれからどうなったのだ……」

手には、しっかりとあの肉を切る感触が残っている。正直言つて気持ち悪いが……どこか心はスッキリしている。一皮剥けたというやつか。

それにしても、藤堂さんには悪いことをした……恐らくあれは新品の刀ではなからうか……刀を抜いたとき、あまりにも抵抗がなくてビックリした。

それにしても案外、落ち着いているな私。何か頭も全然痛くないし、実は結構強いのか? 私? (なわけ)

「お目覚めになりましたか、殿下?」

……どこからか、メイドさんの声が聞こえるぞ? いったいどこから

「良かった! いきなり気を失ったので心配していました」

ぬゆつと私の目の前に、メイドさんの顔が出てきた。

「皆さんを守ろうと、立ち向かうのも素晴らしいですが、ご自身の身を大事になさつて

くださいませ。私、気が気ではありませんでした」

そう言いながら、また私の頭を撫でるメイドさん………というか、この状況は膝枕  
されてるのか……。そうか……。メイドさんに膝枕か……。……うむ。

フラッグが1機、フラッグが2機、フラッグが……

「ここは藤堂さまのご自宅になります。何でも道場を開いてるそうで……。それにしても  
殿下。先程のお名前のことなのですが」

……現実逃避もさせてくれないとは、ふ。我が身のことながらなんとも忙しい1日だ  
な。だか、問われたからには答えるのが道理。

「グラハム・エーカー。今日から私はグラハム・エーカーと名乗るよ。私の魂の名さ」

そう、私は今日からグラハム・エーカー

私の魂に灯したこの未だ小さく、しかし猛る炎の行き先は

まだまだ不透明なままのようだ……

## 幕間・藤堂の矜持

「自分にブリタニア皇族の護衛、ですか」

私は朝起きて着替えている最中に掛かってきた電話で片瀬少将に呼び足され、軍の会議室で彼の前に立っていた。

片瀬帯刀少将。もうすぐ50歳にもなる方だが、未だその眼孔は鋭く、その恰幅の良さも相まって前に立つだけで、まるで押し潰されるかのような気迫を感じる。私も老いていったとしても、この人のように自身を若く保てるのかと、悩んだりする日もある。未だ妻も子も持たぬ男の考えることではないかもしれないがな。

そんな片瀬少将が眉間に皺を寄せながら、話し始める。

「そうだ。枢木ゲンブ首相から昨日連絡が来てな、ブリタニアから皇帝の子息が1人、日本に非公式に来日するそうだ。それに際し、枢木首相からの我々への要請は……表面上丁重に扱うよう見せるため、軍部の中から何名か選んで欲しいとのことだ」

表面上……ね。政治について私が詳しく何かを知るわけではないが、枢木ゲンブ首相からは最近キナ臭い噂が流れているのは知っている。現状日本は強力な軍事力を持っているわけではないが、他方を海に面した小さな島国のため、他国からの侵略には海か

空からしか攻め込めぬ。それ故、どうしても補給線の確保がしづらくなり、纏まった戦力を送ろうにも日本側が包囲戦を取れば、戦車や海岸沿いの砲台を有する利をとり撃退しやすい。

しかし、それだけだ。我が国自ら他国へ侵略するだけの力は持たない。他国から守ることは出来ても、他国に圧力を持つだけの物を持たない。それが現状の日本……。

それを引っくり返す準備を枢木ゲンブ首相が筆頭に行っていると、噂が立っているのだ。

日本の軍事力を増設して、他国に攻めいるつもりなのか。

何かしらの特産、資源を優遇することで他国の庇護下に入るつもりなのか。

どんな手段を模索しているのかはわからないが……どんな手段にしろ必ず戦が起きると軍上層部は睨んでいるらしい。

若い将校の間で流れる程の噂だ、決して楽観できる状態ではない。

もしや、この期にブリタニアの訪問があるということは、そこに枢木ゲンブ首相の計画があるのだろうか……

そう思案していると、片瀬少将は私の肩を叩く。

「藤堂、そう思い悩む必要はない。今回お前を護衛に選んだのはその実直さを見込んでのことだ」



「自分が硬い人間であるとは自覚してはいますが……何故それが護衛の理由に？」

確かに、上官である片瀬少将や草壁中佐からよく「君はもつと賢くならんと、上には中々上がれんぞ？その実直さは好ましく映るがな」と言われていた。しかし、ならばなおのことわからない。その非公式の来日の護衛をするのならば、何かしらの情報を引き出すまたとない機会なのは私にもわかる。それならば少将たちが常々言っている、「賢い」者が適任なのではないのだろうか？

「無論その話が最初に来たときは、スパイとして接近してもらい枢木ゲンブ首相の腹の内を探ってもらおうと考えていた。だが、来日する皇子はまだ10歳の少年だと聞く。同伴者も20代の奉公人の女性……いくらブリタニアが強国とはいえどこの2人だけで黒い話などできるとは思えん……」

そこまで言って、片瀬少将は再度私の肩を叩く。先程よりも強めに叩かれた肩は、痛みだけではなく期待が込められているのがわかる。

「だから君なのだ藤堂大尉。私も初日は同伴するが、いざこの若い要人を守るとなると腕のたつ者が必要だ。そして、彼らに悪印象を与えない実直な青年将校は君だけなのだ。やってくれるな」

「はっ！藤堂鏡志朗大尉、慎んでこの任務お受けいたします」

私はそこまで言われて否と答えるような男ではない。この期待に答えられるよう、尽

力しよう。

「おお！ やつてくれるか藤堂おお！ うむ！ お前ならばその実直さ故に相手も油断して口を滑らせてくれるだろう！ 頼んだぞ！」

……正直、一度断るべきかと悩んでしまったのは秘密だ。少将……せめて私が居ないところで言つてほしかったです……

そして、皇子来日当日。私は榎木ゲンブ首相、キョウト六家の桐原翁。そして片瀬少将と数名の年若い将校を連れて空港に来ていた。

「君が片瀬少将が言っていた藤堂君か。今日はよろしく頼むぞ」

そう言つて榎木ゲンブ首相が私より武骨な手を差し出してきた。私はそれに応じ握手をする。……ふむ、こんな武人のような手を持つ男が、国を軽んじて過激派になるとは思えんな……。思い過ごしか、あるいはこの手の先には……

「はっ！ 今回の任務、必ずやり遂げて見せます！」

「ホッホッホ……そう固くなる必要はないぞ藤堂とやら。大層立派な刀を腰に指して、大和魂を見せてくれてありがたいが、来る相手は子供。あまり気負うなよ」

考えていたことをすぐに頭の中から追いやり、決意をもって返礼した私に桐原翁が笑いかける。キョウト六家の重鎮桐原泰三……枢木ゲンブ首相とは比べ物にならないほど黒い噂が流れている人物。首相の噂と違うところはそれが全て結果的に日本の利になる行動であるとわかるどころか。

「ところで、枢木首相。今日はSPを連れて来てはいないのですかな？」

「ああ、皇族とはいえ子供。あまり大柄な男ばかりでは怖がらせてしまうかもしれんと思つてな」

首相が片瀬少将の質問に答えたと同時に、片瀬少将が右手に着けていた手袋を外す。それを見た若い将校の内、2名が駆け足で空港を出ていった。

「おや？少将、何かありましたかな？」

「いえ。恐らくトイレにでも行きたかつたのではないでしょうか？しかし、上官に何も言わずに抜けるとは、後で説教ですな。まったく今日は見学として連れてきたから良いものの。藤堂と同じく任務だったら厳罰ものです」

少将はそう困つたように頭を振りながら言うが、片瀬少将の部下ならば全員知つている。先程の手袋を外す行動は緊急時のサインだ。左手の場合は「ここに本命有り。全力を尽くせ」。そして右手の場合は「本命は別。即時逃げて探索せよ」だ。

なるほど、そういうことか。これは私にも理解できる。先程動いた部下は予めサイン

を送ることを伝えていたのだろう。そして、ここでいう本命が他にあるということ、恐らくSPの行き先。別の場所でも軍部も知らないもう一つの非公式の要人もしくは何かしらの密会にSPを動員してると……そう少将は読んだのだろう。……風の噂ではあるが、一目見ただけでは見破れぬ変装術の使い手が存在すると聞いたこともある。私には本物に見えるが、下手をするとこの枢木ゲンブ首相が偽物の可能性もあるのだろう。やはり政治の駆け引きとは恐ろしいものだ。

私がそんな日本の影の駆け引きを思案していると、とうとうブリタニアの飛行機が飛行場に着陸するのが見えた。時刻を確認するが到着予定時刻より数分遅れているようだ。何かあったのかもしれない。そう思いながら私は自身の装備を確認しつつ、首相たちと飛行場に向かう。

私たちが着陸しているブリタニアの飛行機の側で整列を終えたとほぼ同時に、飛行機の高ハッチが開く。

「ほう……あれが……10歳の子供とは本当だったか……」

誰が溢したのかわからない声が耳に響く。

私も思わず呆けてしまっていた頬を引き締めるべく姿勢を正す。

そのブリタニアの皇子は、あまり着なれていないように見える紺色のスーツを身にまとい、少々癖毛がある金髪にどこか喜んでいるような輝く瞳。それに反比例するかのような外から見てもわかる、10歳という歳に不相応な引き締められた体躯。

そんなチグハグな少年というのが、私のグラハム君への第一印象だった。その印象も、ものの数分で覆されるとは思ってなかったが……

開口一番は皇族としての礼儀を感じて、それに続いた発言

「皇族としての扱いを拒否する」と言うのには思わず啞然としてしまった。その上歓待だけではなく、護衛すらいらないと。

もしや、この少年……自身が監視のような目にあうことを理解していて発言しているのだろうか。それに他国の要人が歓待を断るという理由は私でもわかるが、わかった上でそれを拒むという……気付くと最初の、体を鍛えた若々しい少年という印象から、自身の立場を理解し大人を巻こうとする知恵者という印象に変わっていた。

これにたいして、私自身も礼儀をかいて甘くは見られてはいけないと気を張って車の中で護衛につく際も、毅然とした態度で首相と桐原翁の間に居座る。片瀬少将からの紹介でしっかりと挨拶をしようと

「しばらくは護衛につかせていただく予定でした、藤堂鏡志朗と申します。今後よろし

くお願いし」

「枢木ゲンブさん、やはり護衛だけでもしばらくお願いできないだろうか!」

したが、途中でグラハム君が遮るように首相に言葉の撤回を伝えてきた。

車に乗ってる途中から私をじつと見ていたが、何か私にたいしてあるのだろうか? 私はこの少年……いや、そもそもブリタニア人に知り合いなどいないのだが……

「急にどうしたんだ坊主?」

「すまない! 先程の言葉を早々に撤回してしまつてすまないが、やはり護衛はつけても  
らえないだろうか! この通り!!」

目の前で少年が必死に頭を下げている。……本当に何故私はこの少年に求められて  
いるのだろうか? まだ言葉も交わしておらず、どこかであつた記憶もないというのに  
……。

「この藤堂鏡志朗という男に! 私は心引かれるものを感じた! 恐らく高名な武人なので  
はとお見受けする! 私が日本に来たのはそんな武人に会いたいのもあつたのだ! こん  
なまたとない機会を逃したとあつては後悔してもしきれぬ! 私の琴線に触れたこの藤  
堂鏡志朗殿に! 是非! 護衛に着いてもらいたいのだが! 無礼は先刻承知だ! この通り  
!!」

「ふむ、そこまで坊主が言うのなら彼に護衛を頼むのは構わんが……1つ条件がある」

その熱意の籠った早口の言葉と、何度も頭を下げる姿勢に首相も折れたのだろう。私たちがへの善意での情報提供を口約束していただき。私が護衛に正式につくことを了承することになった。

……ふむ、高名な武人か……。私が目指す所ではあるが、こんの年端もいかないう少年にそう見られるとは……。私のこの21年間も無駄ではなかったと思える。しかし、こんな少年に求められることだけは素直に喜べんな……。ふ、嬉しくないわけではないがな。

グラハム君の左手をしつかり握り返して握手をしていると、微かにだが車外かは殺気のようなものを感じた。ふと助手席の片瀬少将を見ると、既に軍服の内にある拳銃を握っている。

「良かったですね、殿下」

「ああ、日本人はとても懐が深い人たちのようだ」

握手していた手を離し、私も自身の服の内に入れてある拳銃を取り出そうとしていると、彼らが急に演技臭い誉め言葉を言った。それにたいして、世辞など無用と言おうかとしたその時、車の窓の外に数名の機関銃を持った男たちが見えた。次の瞬間私がグラハム君を庇って伏せようと

「総員伏せろ!!!」

咄嗟に指示を出しながら拳銃を取り出し発砲する。私が庇おうとしていたグラハム

君は、私の声よりも少し早く身を屈めていたようで、私の胸の中ではなく、私の目の前でしやがみこんでいた。

視界に移っていたのは8から9人の男性。服の内側から隠していた機関銃を取り出そうとしていたということは、これは公に大勢を引き連れた襲撃ではない。増援があるとしても同じく8名程度だろうと推測を瞬時にたて、片瀬少将と共にすぐに無力化にかかると。

片瀬少将が正面と左側。私が右側を主に射撃しつつ、車の中の人員の安否を確認する。

私や少将の弾が高い精度で当たっているのだろう、次第に機関銃の発砲は収まってきている。

枢木ゲンブ首相と桐原翁は言葉と同時に伏せていたのだろう、体に傷は見当たらない。しかし、ニヤニヤしているのは何故だろう？ もしや、これは日本政府側が仕組んだ襲撃なのか!？と思つたが直ぐに違つたとわかつた。

もう片方の要人たちをみると、ピンク髪の奉公人に抱えられて頭を撫でられているグラハム君が目に入った。奉公人も、怖いのだろう。手が震えているものの笑顔のまま、必死に「大丈夫ですよ、殿下。大丈夫です」としきりに囁いている。

しかし、とうのグラハム君はどこか呆然としているようで、言葉が届いていないよう



に見える。少年の口からは「私は……私は……」と呟くような声が聞こえる。

仕方ないだろう。いくら皇族とはいえ未だ10歳の子供。見るからに体は鍛えてい  
るし、先程の反射神経も流石といえるが。恐らく直接的な死の恐怖とは無縁だったので  
はないか？……やはり怖いものは怖いだろう。私も今回のような襲撃にあつたことは  
初めてだが、戦場で初めて敵から撃たれたときは恐怖で体が動かなかつたものだ。

だが心配しなくていい。今は私が少年を守ろう。怯えていいのだ。私はこの少年の  
印象がまた変わったのを感じる。この子は年相応のただ背伸びをしている少年だ。

「これで最後か！」

片瀬少将のその声と発砲で、機関銃の音が完全に止む。しかし、まだ油断はできない。  
流石の防弾仕様の専用車も、窓ガラスは粉々に割れてしまっている。この中にいれば要  
人たちは安全だ。私だけで外の様子を見ようと、体を起こすと。

「行かねば……」

グラハム君が、いつの間に私の腰から抜いていたのか、抜き身の刀を左手に持ち、割  
れた車の窓から車外へと飛び出そうしていた。

「なツ!!グラハム君!!今はまだ危ない!外に出ては行けないぞ!」

そうだ!危ないんだ!君のような子供が背伸びして立ち向かう必要などないんだ!  
まだ息のあるものがあるかもしれない!

しかし、私の声に彼は振り替えることなく車を飛び出し駆け出していく……予想通り、まだ息があるものがいた。しかし、彼はその敵に向かって走り出していく。

「グラハム君!!」

再度声をかけるが止まらない。ならば先に敵を撃とうと拳銃を構えるが射線上にグラハム君が当然重なつてしまう!

「坊主!危ない!!」

首相も声をあげるがやはり止まらない。敵が首相の声を聞き、隠し持っていたのだろう小型の拳銃を抜き、首相に向けて銃口を

「ツ!殿下!!」

向けようとしていたのがとまり、グラハム君へと向けられる。奉公人の声が、グラハム君が首相も気にする重要人物ととられてしまったのだろう!こいつらの狙いはやはり国際問題を引き起こすことか!!

瞬間、3つの銃声が響いた。

1つは私が撃つたもの。焦っていたため、敵の遥か後方にある電柱に当たった。

1つは片瀬少将が撃つたもの。私の注意が逸れた隙に近づいていた他の敵を撃ち抜いてくれたようだ。視界の端で血塗れの男が倒れる。

1つはグラハム君が駆けていった相手が撃つたもの。それは少年には当たらなかつ

たようだが銃口の位置を見る限り2度はない。早く退くんだ少年!!

しかし、私の願いは届くことなく少年は敵の前で立ち止まる。もしか、本当はさっきの1発があたっていたのか!?

そんなことを考えてしまったが、またの発砲で思わず私も車を飛び出す。今の発砲は私でも片瀬少将でもなかった。ならば撃つたのは敵! あんな至近距離で撃たれたらほんとに死んでしまう!!! 少将に護衛を任されたのに! あの少年にも必死に護衛を頼まれたのに!! 目の前で死なせてしまうなぞ!!!

早く! 例え当たっていたとしてもすぐに治療すれば助かるかもしれない!

早く! 例え当たっていないくて、まだ敵の銃が発砲されても私が盾になれる!

早く!! 早く早く!!! 彼を助けるために!!!

「グラハム・エーカーであると!」

しかし、私の足は届くことなく、

されど、少年は死ぬこともなく、

そして、敵は2度と銃を撃つことはない。

その日、私を武人と呼んだ少年は、無茶無謀を行って尚、傷は頬をかすった弾1発。私の刀を使い敵を切り伏せてみせた。まるで、心の底から出た叫び声と共に。

「殿下！殿下！！何故こんな無茶を！！」

「……私は……私は……死ぬところだったのだ」

「坊主！それはお前がいきなり飛び出すからだ！」

「いえ、違うのです。私の命ではなく。私の心が……私の魂が……死んでしまうところだったのです」

少年は息も絶え絶えといった様子で、虚ろな表情で心配する奉公人とゲンブ首相の声に答えている。

……この少年は、あの状況で己の命ではなく。己の心を守ろうとしていたのか？この

歳で？

「ですが！ここで死んでしまつては殿下の夢が！」

「……夢……ああ、夢だな……だがその前に守るものも守れず魂が死んでしまふなぞ耐えられんのだ……」

……護衛の立場として、私や少将は確かに敵を速やかに討伐した。少年が立ち向かわなくともあの敵も、私が少将が殺していただろう。しかし、この少年はそれを良しとしなかつた……自身の手で恐れを払拭しようとした

「私は……もう……何も……」

「むッ！おい、小僧！しつかりせい！」

そこまで言つて少年は崩れるように刀を落とし倒れこむ。桐原翁が少年を揺さぶるが、既に返事はない。氣を失つてしまつているようだ。

……私はいまだに呆然としてしまつている。

私は護衛に選ばれた。今回は何とかなつたが、次はどうなるかわからない。何よりこの少年はあまりに氣高すぎる。自分の命よりも、自分が怯えてしまつた心を恥じて敵に立ち向かつてしまつた……その心が何を表すのかはわからない。動けないことを恥じたのか。身近な人間を守るのではなく守られることを恥じたのか。もしくは

「あの奉公人を守れぬ自分を恥じたのか……」

あの時、この少年は奉公人の声には微かだが、反応していたのだ。他の国では本当の親が育てるのではなく、あえて血の繋がらぬ乳母に子を育てさせることがあると聞く。少年にとって、この奉公人がそれなのかもしれない。

そんな想像をしていたが、いずれにしろまた同じように、その心を守るために、自身の命なぞ投げ捨てるように立ち向かっていくのだろうと、容易に想像がつく。本当になんと気高すぎる魂か。私の身近な軍人にこんな行動ができる人間がどれだけいるのだろうか。

「片瀬少将……今日は、このまま私の家に彼らを連れていってもよろしいでしょうか」  
思わず、そう溢してしまっていた。

魂の気高さもそうだが、もう一つ気付いてしまったことがある。先程の太刀筋……おそらく我流ではあるが、力の入れよう、握り、腰の入りようは様になっていた。……私の悪い癖もまた、顔を出してしまったようである。

「む、藤堂。お前まさかとは思いが……」

「少将、さすがに私もそこまで見境なしではありません。ましてや他国の要人に勝手にするなど」

ああ、勝手にはすまい。しかし、もし、武人に憧れるというこの少年に、やる気があれば……

「はあ………まあ、仕方あるまい。今回の襲撃者は全員日本人のようだが、狙ったのがグラハム殿下なのか、枢木首相なのかわからない現状をハッキリさせるためにも、1度別行動をとるのもありだな。これで殿下が狙われているのであれば護衛を増やすし、首相が狙いならば殿下を遠ざければ大丈夫だろう」

「おいおい、片瀬少将。自分の国の首相を案ずるのが普通じゃないのかね？」

「たしかに枢木首相の命は大事ですが、ここで安易に国際問題に発展するのは避けなければなりません。……無論首相のことも命に代えてお守りする次第。どうかここはこの片瀬の意見を聞き届けていただきたい」

「良いではないかゲンブ。これで敵もハッキリとするもの。お主にとつてもそれが最善であることはわかっているはず……異論あるまい？」

「確かに……桐原翁の言うとおりだな。……片瀬少将、念のため藤堂君の家の周囲にも警備を頼むぞ」

「御意」

そんな上層部の会話を尻目に、少年を抱き抱える奉公人に声をかける。

「今回はあまりに怖い思いをさせてしまつて申し訳ない。客人にこれ以上の危害は与えぬよう、全力を尽くそう。まずは私の家でグラハム殿下の容態を見ようと思うが、構わないか？」

「はい、よろしくお願いいたします」

その後、新たに応援に駆けつけた即席の護衛隊と共に、進路を変更し首相たちは、予定通りのルートで炙り出すために食事へ。我々はそのまま私の家へと帰るのであった。

私の脳裏には、撃たれても弾が当たらないグラハム君の後ろ姿が……その日ずっと焼き付いて離れないままに……



## 初めましてだな!武人!

しばらくメイドさんの膝枕を堪能……いや、なすがままになつていると、足音が近付いてくるのが聞こえてきた。

「……まだ、グラハム君の意識は戻らないか? 君だけでも先に食事……を……」

その音の方向に顔を向けると、そこには何かの料理が乗った御盆を手に持つ、甚平のような和服に身を包んだ藤堂鏡志朗が口を開けて立っていた。……そいえばメイドさんがいつてたな、ここ藤堂さんの家だつて。フラッグ数えてたからちゃん聞いてなかつたな。にしても、何故藤堂さんの家に私は運ばれているのだろうか?

「あ、おはようございます藤堂殿。私が気を失っている間に運んでいた」

「よくぞ! よくぞお目覚めになられた! グラハム君!!」

私がお礼を言い切る前に、藤堂さんがその顔をクシャツと歪めながら膝を曲げ私の顔を見つめてくる。……いや、うん。原作よりまだ眼孔の鋭さは劣るけど恐いのだが。そんなに心配してくれてたのか……いやまあ、他国の要人が勝手に自分の武器をとって、死にかけてのだから当たり前か。

「こ、この度は大変失礼を……武人の魂とも言える刀を勝手に使ったばかりか、皆に迷惑

をかけてしまった……本当に申し訳ない」

メイドさんが私の両肩に手を添えて押さえているため、体を起こしての謝罪はできないが。誠心誠意込めて謝罪の言葉を口にします。

「ふ、そう言われては私も似たようなものだ。まだ10歳の子供に緊張していたとはいえ刀を抜かれ、あまつさえ守るべき君を止められなかった。……謝罪すべきなのは私のほうだ。本当にすまなかった」

しかし、私の言葉に藤堂さんはむしろ守る力が足りなかったこちらが悪い、と私に向かって深々と頭を下げてきた。

……いや、やめて欲しい。あれは私の我が儘……もといちよつと情けない心が暴走した結果なのだ。無論暴走したおかげで私自身なんかスッキリした感はあるが、迷惑をかけたのは間違いない私の方だ。何より原作でと藤堂さんが頭を下げたのってゲンブとか日本の偉い人を除けば、志の高い四聖剣の仲間だけだったじゃないか。私はそんな志の高い人間ではないのだ、藤堂さんの貴重な頭下げる機会を私なんぞに使ってはいかない！自分で言うのも何だが私はただグラハムさんとフラッグ及びその派生機が大好きなだけのアニメオタクなんだ!!最後まで日本の為に戦い抜く武人が頭を下げる価値は無いんだ!!!

「どうか、頭をお上げください藤堂殿。やはり私が悪いのですよ。あれは私の単なる自

己満足……いえ、ただの子供の我が儘のようなものなのですから」

「……だが君はその我が儘が無ければ死んでいたのだろうか?」

「いえ、むしろ我が儘で動かなければ命を危険にさらすことも……」

私がそう否定しようとする、藤堂さんは私の胸に手を当ててきた。

「君は、その己の命よりもその魂が死んでしまうことを怖れて立ち向かったのだろうか? 少なくとも私にはそう見えた」

「ツ!!」

そして、私に手を当てながら藤堂さんの口から出た言葉は、まるで何かを押し殺すように苦しそうな声だった。

……何故、私が。いや、私の魂が恐怖に負けることを恐れたと、わかつているのだ? 私が藤堂さんの言葉に驚いて目をパチクリさせていると、藤堂さんは自身の腰に挿していた刀を抜き、その刀身を私に見せてくる。

「あの時、君は弱い自分を許せずに怯えていたように私には見えた。何も守れない自身の力の無さを嘆くかのように。その弱さを認めず強くあろうとする心は、君が私に「有る」と言ってくれた武人の心のようなものだ」

言葉を続けながら藤堂さんが刀の刀身を指でなぞっていく。不思議とその指先に目が吸い寄せられていく。

「確かに……行動だけを客観的に見れば、グラハム君にも否はある。国の名を背負う皇子という立場からすれば、決して行ってはいけない行動だろう」

なぞる指が刀の切っ先でピタツと止まる。強く指を当てているのか一滴だけ血が流れた。

「しかし、あの時君は……国の要人としてではなく、一人の男として守るべきものを守らんと立ち上がった。私はそんな君を守るべき大人だというのに……君に武人と呼ばれた男なのに守れなかったのだ！」

藤堂の顎からも透明な滴が一滴。畳の上に落ちるのが見えた。

「私は君の護衛だ！故に君の心も守れなくては意味がない！日本の軍人として！何より認められた武人として！私の魂が君を守れなくなるところだったことを悔いているのだ！」

私から視線を外して見た藤堂さんの顔は、哀しみに溢れ涙を流し……しかし、決意に溢れた武人の顔をしていた。

「故に謝るのは私のほうだ、グラハム君。だが、君の謝罪と私の謝罪に今誓おう。君が日本にいる間、必ず君を守る。命は当然。そしてその心も」

……なんと気高き男か藤堂鏡志朗。私の行動も含め自身の否と受け取り……それ上で今度こそ守り抜くと言ってくれた。……私自身の行動で迷惑をかけたというののだ。

これが原作において旧日本軍最後の武人と呼ばれた「奇跡の藤堂」か。この人ならば……私の求める武士道を学べる気がする。いや、この武人からこそ私の求める武士道が見つかる!

「やはり、私の目に狂いはなかった……。勝手をした身でこんなことを言えた義理ではないが。ありがとうございます……。貴方のその武人の心に敬意と感謝を」

うむ、グラハムさんには及ばずともなんと気高き男よ!

気づくと私は藤堂さんの手を固く握り締めていた。

この日私は自身の魂を守りぬき、新たな指標を見つけたのだった

「これからよろしくお願いたします!藤堂殿!」

「ああ!承知!」

終始無言で微笑んでいたメイドさんに膝枕されていたことを思い出し、一瞬で赤面したのは締まらなかったがな……

そうして、その日は藤堂さんの用意してくれた日本食をいただき。後日改めて枢木ゲンブ首相と会食をすることを電話で約束し眠りについた。

次の日は到着したことを伝えるため、メイドさんにシュナイゼルが持たせてくれた皇族用の国際電話を使って兄上に電話をかけた。

『やあ、グラハム。どうやら到着そうそう大変な目にあつたようだね』  
電話がかかって最初に出た言葉は、心配している口調ではなく楽しそうな口調だった。

「ええ、まさか到着そうそう日本人に襲われるとは思いませんでしたよ」  
しかし、それを指摘することも嫌がることもせず、私自身も少し軽い世間話をするよ

うに返す。

『でも、流石だよグラハム。襲撃者を1人、切り捨てたって聞いたよ? コーネリアが聞いたら喜ぶ……前に取り乱しそうだね……』

その言葉に思わず、自身の持つ拳銃付きのエストックを振り回しながら迫り来る姉上を想像してしまった。やめてくれ姉上。私が想像してしまったとはいえ、その怒りに満ちた顔はギアスファンの私にいろんな意味で効く

『それにしても、まさかこんなに早く引つ掛かるとは……ブリタニアの皇族問題は怖いねまったく』

「ほんとに驚きですよ。まさかとは思っていましたが、日本内部にまで既に手を回しているとは」

そのシュナイゼルの言葉に私は同意を返す。

どうやら予めシュナイゼルと話し合っていた、予測可能な面倒な事態が日本内で起こっているようだ。

元々私の日本行きは誰にも喋ってはおらず、急遽誕生日にて異例の皇帝権限によって決まったことだった。普通に考えれば私がピンポイントで狙われることはないはず。しかし、それに否と答えたのはシュナイゼルだった。

『父上が日本行きの準備を整えるために声をかけたブリタニア軍人、貴族の中に。いまだ父上の命を狙うものがあるかもしれない……まさかとは思ってたけど事実とはね』

初めにその可能性を聞かされた時は、まさかあの『血の紋章事件』の後にそんな事を企むブリタニア人がいるのか？と思つたが……直ぐにルルーシュのことを思い出し「む、有り得るな」と答えてしまったものだ。どこでシュナイゼルがその情報を仕入れた（もしくは予想した）かはわからないが、現実問題襲撃はあつた。

『狙いとしては、皇帝が恩情をかけた子供を人質にでもとつて……もしくは殺して国同士の戦争を引き起こし。国内の混乱に乗じての皇帝暗殺……といったところかな？なんともし低レベルなシナリオを思い付くものだよ』

そう、今回の襲撃は私が狙われた可能性が極めて高いのだ。無論日本人が襲つてきた以上、狙いが同じ日本人の枢木ゲンプの可能性もある。だが、私が最後に切つた男が持つていた拳銃が引つ掛かるのだ。

『間違いないんだよね？その拳銃がブリタニアの軍部の要人にしか支給されていない、既存の探知機に引つ掛からないニードルガンだつたつてことは』

「はい、出国前に兄上に見せてもらった銃と同じでした」

そう、それが問題なのだ。その拳銃をいつたい襲撃者がどこから手に入れたのか……『ま、それが確かなら容疑者は大分絞れるよ。こっちは任せてくれ。必ず見つけ出して



制裁を与えるよ。君の計画のためにもね』

「ふ、頼りにしている」

『その期待に答えられるよう、がんばるよ。またねグラハム』

そこで会話を終えて電話を切る。

日本初日から何とも大変な目にあつたが、まだまだこれからだと気を引き締めて、藤堂さんが用意してくれるという朝飯を食べに、客人用の寝室から居間に向かう。

藤堂さんの言うとおり、昨日は何とかなつたが、これからだ。これから私の輝かしい日本での生活が待っているのだ。全ては私の憧れるグラハムさんロードの為に!!

「グラハム君、今日は精がつくようにステーキを用意したんだが食べれそうかな?」  
「ステーキ!!!是非ともいたただかせてもらおう!!!」

藤堂さんやメイドさんに笑われようとも、私の日本での生活は始まったばかりなのだ  
……だから、好きなものが出て喜んでも問題あるまい？

初めましてだな!修行!

私はグラハムさん……もといミスターブシドー時代の武士道の根源は自身の歪みを指摘された少年を見返すため……何より歪みがあったから負けた(ほぼ相討ちではあるが、条件はイーブンではなかった)と考えた結果ではないかと思うことがあった。しかし、その武士道自体も五輪書を英訳して自身のみで紐解こうとした結果出来上がった時代劇被れと評される結果に終わった(尚異論有)。

やれ『言い回しが古いだけのストーカー』だのやれ『服に合わせていだけのストーカー』だのやれ『歪みまくったストーカー』だの一部では酷い言われようだった……本当に一部だけで実際のところ大多数は『え?あれ?ミスターブシドー言ってるけどグラハムさんだよな?』この粘着質に圧倒的な操縦技術、何よりガンダムへの『愛』はグラハムさんだよな!』ってな感じだったのを私は知っている。知っているたら知っているのだ。ほら一部では『グラハムさんよりミスターブシドーの方が好き』とか言われて……いや、これはいいか。私はどつちも好きだし。何よりミスターブシドー時代でもフラッグへの『愛』も失っていないかったところとかポイント高いと思うんだよね私。ユニオンフラッグカスタムII。通称GNフラッグの時から格闘武器を主体にしてるし。確

かにもう武士道行っちゃってもいいよね、とか思ったものだ。一部ではGNフラッグはジnkスを態々解体して疑似太陽炉を旧式機体に取り付けただけの片落ちとか言われちゃいたが、そこにフラッグへの『愛』とグラハムさんの操縦技術が加われればカタログスペックなぞ関係無いと思うんだ。何より武装を一本化したことによる……（割愛）

ふう。……語りたいたいは一杯あるがここはまだフラッグも生まれておらず、何よりガンダム概念すら無い世界。語る相手のいないことほど哀しく寂しいものはない……。

さて、ここまで心のうちを荒立てていたのには勿論理由がある。武士道云々も無論歪んでいないのが大事だが私は歪んだ末のミスターブシドーを否定はしないし、その結果あの劇場版に行き着いたのだからむしろこの過程は……。おほん、とにかくだ。私が武士道のことを考えている理由なのだが。

「さて、グラハム君。今日もそろそろ始めようか」

「はい！師匠!!」

私、グラハム・エーカー（偽）は現在、藤堂鏡志朗の弟子になっているのだ。……感無量である。

此処に至るまで、然程複雑なことは無かった。

あのステーキを食べた日の翌日、道場があるとメイドさんが言っていたのを思い出して、ならば日頃の筋トレをその場を借りてやりたいと藤堂さんに頼んでみたのだ。

「トレーニング? ふむ、別に構わないが。他の門下生もいるからな。朝一か、もしくはみんなに混じつてもいいなら昼からでも構わないか?」

「ならば最初のうちは朝一でお願いしたい。然程時間はかかりませんので」

そして、次の日の朝から道場を使わせてもらったのだが……

「フーン……フーン……フーン……フーン……フーン……フラッグ!!」

素振りを初めて何回目か……実に182回目のことだったが、藤堂さんが様子を見て来てくれた。

「グラハム君、大丈夫かな。体に大きな傷は無いとはいええ、あまり過度な運動は控え……た……ほうが……」

「む、そうか。普段よりは抑えているつもりだったが……どうされた藤堂殿?」

「……君は普段から素振りをやっているのか?」

藤堂さんが何か変なものを見るような目で私を見ていたので、思わずどうかしたかと

聞くと愚問が返ってきた。いや、愚問ではないか。藤堂さんは私のことは何も知らないのだし。いや、失敬。

「ああ。4歳の頃からだったかな。なるべく毎日トレーニングをしているが……普段は1000回はやるので今回は500ぐらいにしておこうかと思っていたんだが……少ないだろうか？」

今までの自身のトレーニングを思い返ししながら答えたが、藤堂さんの顔はますます険しくなっていく。何故だ。

「グラハム君……君はあの襲撃以前に何か刀、いや剣を振ったことは？」

「いや、ないな。この特注の棒切れだけだ」

この棒切れ。シュナイゼルが頼んでどっかの職人につくってもらったらしいのだが、とにかく重いのだ。なんか鉄と銅の比重がどうか、先端部分に重しがどうか言っていたが詳しくは知らん。……カタギリだったら答えてくれたらうに。クツ！まだが私のカタギリ!!……おい脳裏によぎるな若い片瀬！このパチもんが!!……いや、片瀬に罪は無かったなまだ。スマン……。

「その棒切れ、少し持たせてもらっても？」

「ん？ああ構わないが……どうぞ」

「ああ、ありが……とう……。……いつもこれを振っているのかね？」

「ええ、もちろんですが。……どうかされましたか?」

私から棒切れを受け取った後、2、3回振って私にまた質問がくるので、「当たり前だ」という気持ちを含めて答えると

「グラハム君!!君、ちよつと剣道やってみないか!」

「なんと!是非とも!!」

肩をがっしり掴まれて、いきなり熱烈なお誘いを受けたのだ。それにたいして私は直ぐ様OKと答えたが……今思うと何が藤堂さんの琴線に触れたのだろうか?まあ、実際藤堂さんの生活から武士道なり剣道なりを、見よう見まねで盗んでいくつもりだった為ありがたい。その厚意に甘えさせてもらおう。

「ならばまず最初に言っておくことがある」

「なんででしょうか師匠!」

「師匠か……うむ、師匠として言おう。先程の素振りだが」

お、何だ!さつそく良いところがあったのだろうか。藤堂さんは褒めて伸ばすイメージがあったからな、きつと良いアドバイスを

「あの掛け声はやめなさい」

「……………そんな殺生な!!」

くれなかつた……………私が唯一大つぴらにフラッグを叫べる機会を奪うな藤

堂うおおおお!!!

といったことから今日で1ヶ月経つ。ああ、掛け声？すっかり死守したとも。ただし、藤堂さんの前では禁止されたが……。

「さて、グラハム君。今日は素振りはやめて実際に打ち合ってみようか」

お、打ち合い。つまりは死合いか！（違う）なんと、今まではずつと素振りと姿勢の矯正、そして脳裏での仮想試合だけだったが、ついに打ち合えるのか!!

「はい！よろしくお願いします!!」

「うむ。では蹲踞から……」

藤堂さんの言葉に従い、互いに道場の中央から端まで向かい一礼。そして、直ぐ様膝を曲げながら蹲踞。2本挿した木刀のうち長い方を抜刀。と動作をこなす。最初に指導を受けたときから毎日やっているため、動作に淀みはない。

「はじめ!!」

「グラハム・エーカー、参る!!」



藤堂さんの開始の合図と共に、私は先手必勝とばかりに駆け出す。

相手はあの藤堂。何より私はまだ10歳の子供。搦め手は通用しないと思い、愚直なまでに真つ直ぐ上段から木刀を振り下ろす。

「チエストオオオ!!」

「甘〜」

しかし、その木刀は藤堂さんの木刀によって受け止められる。

「示現流を教えたつもりはないんだが、な!」

「なんの!」

受け止めた木刀を横に流しながら、そのまま私の籠手を目掛けて軽く打ちに来た。私は焦ることなく木刀を引き戻し合わせるように軽く当てる。

「良い判断だ、だが!」

藤堂さんは、私の木刀に力を込めて弾くことはせず、当てた衝撃に従って木刀を引きつつ上段に構え直す。そしてそのままさっきの私と同じように振り下ろしてきた。いかん、これはまともに受け止めるわけにはいかない!私が体重を乗せても、先程のように受け止めることは叶うだろうが、大人の藤堂の剣は子供の私では腕が耐えきれん!!

そう直ぐ様判断した私は、腰を落とし木刀を斜めに構える。

「できるか!受け流しを!」

「やってみせるさ！フラッグファイターには意地がある！」

その姿勢を見て一瞬木刀を止めてくれた藤堂さんだが、私は構わず打てと気概を見せて答える！

「よくわからんが…行くぞ!!」

そして、さつきより少し速く感じる振り下ろしが迫ってきた。私はそれをフラッグファイター名乗りで高揚する感覚を感じながらも、冷静に木刀に触れる直前に握りを深く絞めなおし、衝撃に耐えながら木刀をずらしていく。

「くっ…だが…ここれで！」

少し手は痺れたが、何とか先程の藤堂さんのように横に流しきり、返す木刀で藤堂さんの横っ腹を風ぎにいく。

「君にできて私にできないことはない」

「なに!?!」

しかし、私の木刀はすぐに引き直した藤堂さんの木刀で阻まれた。さすがの反応だ藤堂志朗。やはり今の私ではまだ一撃いれることすら叶わぬということか。

「だが、良い動きだ。軽く打ち合うつもりだったが、気概のある一撃を打ってくるなグラハム君」

「無論だ。折角打ち合いを提案してもらったのだ。全力を尽くさねば無礼というもの

!」

「ふ、そうだな」

私の思いに、藤堂さんは「ふっ」と笑みを浮かべると先程とは違い、腰を軽く沈め肩越しの突きの構えを取った。

「ならば私も全力で応えよう。構えたまえグラハム君」

「!!望むところだといわせてもらおう!」

ああ、望むところだ。あのアニメでも思わず手を握り締めてしまったあの技を、よもやこの目で……いや、この体で受ける日が来ようとは!!

私も腰を沈め、藤堂さんとは違い正眼の構えを取る。正面から受けきってみせよう!

「……………行くぞ!!」

「来い!!」

少しの間の後、藤堂さんの木刀の切っ先が迫ってきた。恐ろしく速いが、私の木刀を打ち付けることでそらす!!

「くっ!重い!」

しかし、切っ先がそれただけで、威力は落ちず私の頬をかする。そして、そのまま木刀が同じ速さで引き戻され……

「ふッ!」

2 撃目の突きが迫ってくる。しかし私の手は既に先の1撃目をそらしたことでしびれて、すぐには動かない！ならばと体を強引にひねり、横つ腹をかすが何とか避わす。

そして、また先程のように木刀が引き戻された次の瞬間

本命。3 撃目の突きが眼前に迫っていた

これぞ『奇跡の藤堂』の代名詞。三段突さんだんづき！避わせる者は原作でも枢木スザクのみ！！

「うおおおおお!!」

しかし、ここで私も破ってみせよう!!この奇跡の一手で!!

私は痺れが多少は引いた右手で、腰に挿していた小太刀サイズの木刀を引き抜き、左手の木刀と交差するように眼前に構える。

ほんの一瞬。それは私が2撃目の突きを避けると同時に右手を小太刀サイズの木刀に添えていたが故に間に合った、当たる前の一瞬の行動。そしてその木刀が交差した点の中心に3撃目が衝突した!

「ぐあッ!!!」

そして、私は衝撃を殺すことができず、2本の木刀もろとも大きく吹き飛ばされた。

まあ、無理だよ。なんかはしゃいで思わず破ってやろうと意気込んだけど。大人と子供では地力が違うし……だが……だが……だが悔しいなあ!!

「しまった……すまん！グラハム君怪我はないか?」

そう落ち込んでみると、藤堂さんが私に駆け寄ってくる。いや、大丈夫大丈夫。結局吹き飛んだけど、木刀が衝撃を少し受けてくれたから大事ないよ大丈夫。

「見ての通り無事だよ、師匠。しかし、なんと凄まじき突き。あれが師匠の本気か」

うん、ほんと凄まじき突きだよ。成る程、原作でも四聖剣の1人ですら破れなかったわけだ。強い。……いや、まあ本気出してくれたことは嬉しいけど、子供に本気出す大人の絵面って結構駄目ではないか?今更だけど。

「そうか、無事で良かった。しかしまさか三段突きを対応されるとは……当てずに止めるつもりだったが十字受けを見せられてつい当ててしまったよ。凄いなグラハム君」

ああ、本気とはいえ止めるつもりだったのか……。いやでもいくら受けの姿勢見せたところで本気で当てにいくか普通（手の平）。

「咄嗟の行動ですよ。ありがとうございます。師匠」

まあ、それはそれ、これはこれか。私は藤堂さんが差し出してくれた手を握り起き上げらせて貰いながら礼を言う。

「ああ、こちらこそありがとうございます。まさかこの時代に咄嗟とはいえ二刀流を見れるとは思わなかったよ。次からは二刀流の動きも練習に入れていこうか」

「是非とも!!」

そんな感じに、運良く二刀流の指南も入れつつまた修行の日々を繰り返して行くのであつ

「殿下ー! 枢木ゲンブ首相から電話です! そろそろ会食の日程を決めたいとー!」

て欲しかったが、先にこちらを済まさねばならんようだ。私は道場の廊下を走つてきたメイドさんに手を振りながら藤堂さんと共に、電話の置いてある居間まで向かうのであつた。

初めましてだな！首相！

私が三段突き破りを試みた日から4日後、私とメイドさん、並びに藤堂さんの3名は木々の生い茂る山中の屋敷の前に立っていた。

「……では、準備はいいかな？ グラハム君」

「ああ、いつでも構わない」

藤堂さんが私に確認をとるかのように行ってきたので、大丈夫という意味を込めて返す。私の返事に深くうなずいた藤堂さんは、その手で屋敷のドアに手をかけた。

「失礼いたします！ 藤堂鏡志朗大尉、グラハム・エーカー殿と付き人1名を連れて参りました！」

扉を開け、畏まった挨拶とともに敬礼をした藤堂さん。その開けた扉の先には「うむ、待っていたよ。こんな山奥に来てもらってすまない。ここなら襲撃の心配もないだろう。先日のお詫びだ、今日は存分に食べていってくれ！」

Yシャツにエプロン姿の枢木ゲンブ首相が、フライパン片手にたっていた。

……うん、絵面が凄いんだが



私は先日の枢木ゲンブ首相からの電話で、会食の件で改めて話したいというので、安い所、旨い所、そして人目につかない所ならばどこでもいいと無理難題を言いつけた結果

「ならば、私の別荘などだろうか? 坊主にはちと歩く距離がキツイかもしれないが、一応近いものしか知らん場所だ。料理も何とかしよう」

と提案してくれたので、それでいいか、大丈夫大丈夫鍛えた体にキツイ距離などそうそう無いわ!の気持ちでOKしたのだが……。キツくは無かったよ? 藤堂さんもメイドさんも適度に休憩入れてくれたし、歩幅もなるべく合わせてくれたから然程辛くはなかったさ。そこは問題なかったんだが……………

どうにかするって、貴様が作るのか。しかも地味にエプロンが似合っていて笑うに笑えんわ。新手的のジョークだとしたら、拍手してもいいが。確かに自炊した方が安いし、自分の料理の腕を信じるなら旨いと言えそうだが……

……おい、絶句しているこちらが悪いが器用に卵をかき混ぜるなシェフか貴様。藤堂さんなんて敬礼したまんま固まつてるじゃないか! おい、しつかりしろ師匠! 傷は浅いぞ!!

「……は！枢木首相自ら昼食をお作りになられておるのですか!?な、何故!？」

我に帰った藤堂さんがゲンブに問い掛けるが、ゲンブ自身苦笑いしながらフライパンを持ち上げ……

「ははは、実は妻に頼もうと思ったんだが、つい1ヶ月前に退院したばかりで……あまり無茶はさせられないと、医者に言われてね。となれば私がやるしかあるまい。こう見えて昔はよく料理をしていたからな。味の保証はしよう」

ほほう……1ヶ月前に退院とな?……時期的にはそうか、今か

「枢木ゲンブ首相、奥方はどこか体の具合が悪いので?」

まあ、シャルルがあんなニコニコする世界だし、もし間違っていたら怖いので、あくまで体調を気遣うように聞いてみる。

「いや?坊主、妊娠って知ってるか?」

「その程度、熟知している」

「え、熟知してらっしゃるのですか?」

メイドさん、そこに疑問を挟まないでいいから。グラハムさんの台詞、ちよつと言つてみたくなっただけだから。

「そうか、知ってるなら話は早いな。つい4ヶ月前にな、私の息子が生まれたんだ」

それはもうものスツゴク嬉しそうに、顔をほころばせながら言うゲンブ。うん、嬉し

いのはわかるがその厳格そうな顔でニコオツと笑うと何か怖いよ。……最近怖がつてばかりな気がしてきた。大丈夫か、私……

ふむ、しかしやはりか……4ヶ月程前ということは7月頃。そして原作においてこの枢木ゲンブの嫡男、枢木スザクの誕生日は皇歴2000年の7月10日。これは運命か……やはり君たちと私は運命の赤い糸で結ばれていたようだ……そう戦う運め(割愛)「ほう。ご子息がお生まれになられたのですか。それはおめでとうございます」

「おう、祝いの言葉ありがとう。ま、そんなわけで実は君が日本に来る前から、家事は何とかやれるように頑張っていたからな。今日は気にせず上がってくれ」

「はーグラハム君以下3名、お邪魔します」

そして、藤堂さんを先頭に私たちは屋敷に入っていく。

ゲンブの先導に従うまま、廊下をしばらく歩いていくと、随分と広い居間にたどり着いた。なるほど、今日はここで会食と洒落混むのだな。床は一面畳だし、襖の障子には色とりどりの花が描かれている。なんと風情のある屋敷よ。私もグラハムさんロードの途中でこんな屋敷でも獲得したいものだ。無論庭にはフラッグの発着場を立て、いざというときの為に地下には、ブレイヴを3機待機させて置いてだな……(夢の世界)

そうして、案内された席に座って妄想に浸っていると、いよいよ料理が運ばれてきた。皿を見るに、ほぼ全て和食で彩られているが、ちらほらとブリタニアで食べたことの

あるケバブのようなものや、先日藤堂さんと一緒に食べたパフェのようなものまである。まさに豪華な食卓……このグラハム、感服したぞ！ゲンブ！

「さて、待たせてしまってすまない。さ、料理は全て出来上がった、みんな食べようじゃないか」

そう言いながら最後に卵焼きの乗った皿を持ってきたゲンブは、そのまま皿を机の真ん中に置くと、自身も上座の席にどっしりと座り込む。

「さ、みんな手を合わせて……」

この手を合わせるといふ動作も、最初のうちは懐かしさに目がうるうるしたものが、今ではメイドさんも慣れて一緒にニコニコして行っている。……食事なのだから笑顔でもおかしくあるまい？

「二二いただきます!!」

そして、感謝の言葉とともにみんなで仲良く食べ始めるのだった。

尚、玄関からこのご飯を食べ終わるまで、終始エプロン姿のゲンブを必死に顔をピクピクさせながら堪えている藤堂さんは中々に見物だった。……というか、こっちはこっ

ちで眉間に皺をずっと寄せているので若干怖かったが。

大分箸が進んでいき、料理が半分程なくなった頃ゲンブが口を開いた。

「さて、坊主。先日の襲撃の件だが。犯人がわかった」

「ほう。それは重畳ちゆうじゆう。して誰だったの?」

「うむ、どうやら我が日本の政治文官の一人だったようだ。今回は国内の問題で迷惑をかけた。申し訳ない」

「いえいえ、私はただのブリタニア人のグラハム・エーカー。日本の首相が態々頭を下げるほどのことはありません」

ほうそう来たか。

襲撃にあつた翌日にシユナイゼルと話した通り、裏で手を引いているのはほぼ間違はなくブリタニアだが。……実のところ、まだその確証は得られていないのだ。要職に就いている一部の幹部にしか渡されなかつた、特製のニードルガン。確かにこれは立派な証拠となりうるが、それはあくまでもそれを持つていた人物がブリタニアと関わりがあつたという程度の証拠にしかない。

誰が、何の目的で、誰を狙ったかがこれだけでは明確に指摘できないのだ。例えばブリタニアの貴族が裏で命令してしようと、人を使わしたのが日本人で、実際に行動を起こしたのも日本人なら、疑いの目は日本人で止まってしまふ。誰かが口を滑らせたところで、日本側からはブリタニアを一方的に非難することも国力的に難しい。……だからだろう。あえて犯人を指定して、日本側に非があるとし、それを餌にお詫びという名の楔くわさをうちに来たのだろうと推測する。

まあ、私としては犯人がブリタニアでなければ計画が狂うので困るのだがな。

「しかし、今回の襲撃者の中にはブリタニアでまだ正式採用されていない銃を持っている者もいたとか。これはこちらの領分。もしかや犯人は複数いるのではと、愚考しますか」

「ほう、複数か。……そうきたか」

私の発言にゲンブは、ニヤリと笑う。……どことなくシャルルとの謁見の時と同じ様な笑いに見える。これはあれだ、面白いおもちゃものを見つけた子供のような笑みだ。多分

「これはあくまでブリタニア人としての意見ですが。ゲンブ殿も注意されたほうがよろしいかと。自国の人間だろうと他国の人間だろうと、誰を狙うかなど予想がつきませんで」

「ふむ、忠告痛み入る。坊主も気を付けてな、実は身近な人間がその狙っているやつかも

しれからな」

「どこことなく意味深なことを言ってる、向こうも意味深なことを言ってくる。……腹の探りあいとかほんと苦手なんだが!!なあ、やっぱり全部戦いの中でわかり合うのが一番な気がしないか?!グラハムさんもそうしてきたし!やつぱそれが私にはいいと思うんだが!だが!!」

「ま、とりあえずはこちらの犯人はしつかりと処罰を与えよう。もし坊主の言う通り複数犯なら、また動きがあるはずだ。その時が来ないことを祈るがね」

「ありがとうございます。私も叶うならそんなこと、起きないことを願いますよ」

それつきり、互いに言葉はなくなり静かに食事は進んでいった。……なんか腹の探りあいしてきた腹いせに、料理にケチでもつけてやろうかとも思ったが……普通に旨かったせいで何も言えなかった……おのれゲンブ!!! (逆恨み)

食事をおえた後は、特に用事もないのでそのまま帰ることに。ゲンブが

「今度来ることがあったら、まだ小さい子だが……息子と(楽しく)遊んでやってくれ」と帰り際言ってきたので

「承知した。その時がくれば(フラッグで)遊ぶことにしよう」と、誓いをたてて私たちは帰っていった。

しかし、山道だけあって私たち以外に人が一切見当たらないのは怖いな……相変わらず怖がりだな私。グラハムさんロードを歩むというのにこんなんで大丈夫か？……大丈夫か！うむ、何とかなる!!こんなときは

フラッグが1機……フラッグが2機……フラッグが……フラッグが……

今日も私はフラッグで満たされている。

「殿下、コーネリア皇女殿下からの定期連絡を帰ったらお願いします」

………私はいつになつたら皇族から解放されるのか……そんなことばかり考えてしまう、冬の1日だった……別にコーネリアが嫌いなわけではないんだからね！（裏声）



初めましてだな!妊娠!

私が日本に来てから3年の月日がたった……2003年の3月の中頃にその報告は来た。

「妊娠した、だと!」

その驚きの報告は、電話越しにメイドさんから行われたものだった。

彼女は去年の春に実母の容態が悪いという手紙が届いた日に、緊急で首相に殴り……相談をしブリタニアに帰国させていたのだが……。え、いつの間に彼氏できてたのさ? え、既に結婚してる? 夫は軍人で単身赴任中? ……なるほど、だから君たまに夜に長電話してたのね。納得。

そうかあ、妊娠かあ。子供かあ……やっぱりあれかなあ、お祝いで何か贈らないとなあ……何がいいかなあ……? やっぱり、未来ある赤ちゃんには手製のフラッグ人形(SDサイズ)かなあ(ないない)

「……そうか。うむ、こういうとき何て言えばいいかはわからんが。とにかく、目出度いな! おめでとう!!」

「殿下から、祝いの言葉をいただけるとは……私は……私は果報者にございます」

うーむ、果報者は言い過ぎじゃないかな？まあ、喜んでもらえて悪い気はしないが！  
「出産の日取りは、もう目処がついているのか？」

「……いえ、今年中ではと言われておりますが。まだ何とも」

そうか……そんなものか。うーん、今年中に出産となるとまだ帰国できる段階でもないしなあ……やっぱりどうにかしてブリタニアに何かを送れないか模索するか。

「ならば、その時が来るまで体を大事にするのだぞ。また連絡する」

「はい、養生して御待ちしております」

その言葉で笑顔で手を振り返し、映像通信が切れる。

うーむ、それにしても今の言い方だと、私が来るのを待つてるみたいで申し訳ないな……。私が今帰るとただ死に行くだけになる。さすがに無意味に死ぬつもりはない。

それにしても、3年経ったと簡単に言ってしまったが、全然簡単じゃない3年間だったと言わせてもらおう。

まず最初の1年に関しては、完全に修行三昧だった。

藤堂さんに教わる剣術に武術。それ以外にも私の思い付きという名の前世知識を元にした、普通できないだろうと思う技を一緒に作ってもらったりした。いやあ、コードギアスの世界でも少しはできるんだな東方○敗。知らなかった。思い付きで言うん

じゃなかった。藤堂さんが習得できなくてほんとよかった。危うく早期に原作bre akするところだった。……こんなところでガバはしたくないんだ、カタギリ。もう少し待ってくれ、私のフラッグ。

ま、まあそんな修行の合間にゲンブとの会食（たまに桐原翁が来たりしたが別段話は無かった）。コーネリアやシュナイゼルとの電話（たまにシャルルが乱入してきて困った）。そして、藤堂さんとの釣りしたり（たまに桐原翁と一緒にいたりしたがやはり会話はなかった）と結構充実していたものだ。

そして、2年目。とうとう藤堂さんから「道場のみんなにも会ってみないか?」と言われたため。藤堂道場の門下生の皆さんと一緒に修行する機会も生まれた。……生まれましたがみんな私を遠ざけているように感じられ、あまり会話は無かった。少し寂しかった。まあ、年代が大分離れた人ばかりだったから、話せてもフラッグ談義にはついてこれなかっただろうし仕方ない。ハワードやダリルがこの世界に居てくれれば、存分に語り合ったもの!!……まあ、ハワードとダリルと言えば、この世界に来て初めて夢の中でこの2人と熱く語り合い、一緒にフラッグに乗るというまさしくフラッグファイターにとつては心踊る夢のような一時を体験できたことがあった。これはもう生涯の宝と言つても過言ではない。……何分、この夢を見る1ヶ月前ぐらいから道場の周りで、見覚えのあるような金髪を何度も見掛けて気が張っていたから……その分夢の中で発

散するかのように語ってスッキリしたのもあるだろうが。

そして、その年の暮れにメイドさんを帰国させて、私は藤堂さんと2人暮らしになり

.....

3年目。藤堂さんを拝み倒して戦闘機に乗せてもらえらることになったのだ。

いやあ、メイドさんがいたときは藤堂さんがOKサイン出してくれていても、メイドさんに無表情で

「なるほど、殿下は死に急ぎたいの？また危ないめにあいたいの？へえ、育ての親の前で？へえー」

と、感情の籠ってないような声で淡々と言われるので断念していたのだ。フラッグに乗る夢を見たときからずっと自身で飛行機を操縦したくて堪らなかつたのだ。

あの空を自由に駆ける、高揚感。

どこまでも広がっている空に浸る、安心感。

何より同士と共に飛べるといふ、圧倒的な幸せ!!

夢とはいえ、あれを体験してしまつてはフラッグに乗る前に、実際の空を飛んでみた



今、衝撃の事実が明らかになったぞ……いや、待て決めつけるのはまだ早い。よく考えろ。

シユナイゼルとコーネリアは兄と姉だから除外するとして、メイドさんは……育ての親のようなものだし。ギルフォードは話したことはあるが、いつも悲しそうな顔でいるから友達にはまだなれていないのだろう。ダールトンとは話も気も合うが、あれは友達というより、近所の気のいいおじさんみたいなものだ。カノン殿はロボット語りができるから友達でいいとして……藤堂さんは友というより師の面が強い。ゲンブもダールトンと似たようなポジションに感じるし……

私の友達ってまだ一人しかいなかったんだあ……へえ……

え？ V・V・？ あれは友達でもなんでもないよ。あれはラス……ボ……sってああ!! そうだよ！ そもそも私が1番人と接する機会が有った幼少期に外に出れなかったの、V・V・のせいだったな!?

やっぱり、私の順風満帆フラッグよろしくグラハムさんロードの目下最大の障害物は

V. V. だな……早く計画決行の準備が整わないものか。準備さえ整えば、すぐにV. V. の目からは逃れることができるのだが……急いても意味はないな。やはり気長に待とう。待つてメイドさんの出産でも盛大に祝おう。

そう考えをまとめた私は、藤堂さんのいる台所に向かう。私がメイドさんと映像通信をしている間に、昼食の準備をすと言っていたのでここにいるだろう。

「藤堂殿、今よろしいか？」

「ん？電話は終わったのか？ちよつと待つてくれ、もうすぐ一段落つくから」

「承知した。……ふむ。いや、私も手伝う故、やりながら話を聞いてほしい」

私の言葉にリズムよく動かしていた包丁の手を一瞬止めると、少しだけ視線を私に向  
け

「……重要な話なのだな」

と、一段と低くした声で問いかけてくる。

「無論だ。人生において重要な話だ」

メイドさんのだが。

「わかった。ではまずは話を聞こう。手を動かしてはいるがしつかりと聞く。心配はいらん、好きに話してくれ」

……思えば、大分藤堂さんの口調も柔らかくなった気がする。

やはり同じ釜の飯を3年も食えば、互いにある程度打ち解けられるものだ。私個人としては、既に最初の1年で存分に木刀や拳をぶつけ合ってわかりあった気になっていた。やはりテレビと現実は違う。わかった気で見えていたあの頃と、実際に生きる彼らと接するのでは、予想はについても決してそれだけで終わることはないと実感する毎日だ。

「ああ、実は妊娠が発覚してな」

早速本題を話し始める。やはり何事も単刀直入が一番わかりやすいだろう。

……ん？何故包丁の手が止まるのだ？やってて構わないのだが

「……そうか、ふむ。妊娠か。相手のことはしっかりと解っているのか？」

相手か……軍人ってことは聞いてはいるが詳しくは知らないな

「ふむ、職業については理解しているが詳しくは知らん」

ダンツ！っと今度は先程のリズム感はまったく感じない、荒々しい手で包丁を降ろしていく。……どうした、藤堂さん。何を怒っている。

「そうか……よくわからないのに妊娠か……覚悟はできているのか？」

覚悟？無論できているとも、私のできる限りのことで祝ってやりたいさ。相談する以上頭ごなしに否定はしないつもりだ

「無論だ！私に出来ることなら何でも!!」

私の言葉に、包丁を完全に下ろし。私に向き直る藤堂さん。いつにもまして真剣なそ



の表情は、以前初めて本物の刀を使って素振りをさせてくれた時に似ている。

そして、深く深呼吸をした藤堂さんは左手でがっしりと私の肩を掴み、

「覚悟があれば、何も言わん!!しかし、男ならばちゃんと責任を取るんだぞ!グラハム!!!」

なんて言ってきた。

は?へ?.....どゆこと?

「ずっと修行ばかりで.....たまに会うのも皆既婚者やおっさんばかりで、色々心配していたが.....まさか既に手を出しているのとはなあ」

いや、あの.....もしかして、スツゴい勘違いをしてるんじゃない

「私に出来ることなら助けてやるから、しっかりその相手と生まれてくる自分の子供を守るのだぞ!グラハム!!」

やっぱめっちゃ勘違いしているではないかこの男おおおお!!!

「いや、あの私の子供ではなくて」

「何!?まさか認知しないつもりだったのか!?いや、さすがにそれはいかんぞ!大変なのはわかるがしつかりと責任はだな……」

いや、だから……!」

「認知とかそういうのじゃなくて」

「は!?まさか違う人の子かもしれんのか!?うむ、それは難しい問題だが、今の日本では……」

あああもうツ!!

「早とちりするな!私の話を聞いてくれ藤堂おおお!!」

私の叫びの後で、メイドさんのことであること。私が相談したいのは祝いの品のことであることを、一時間かけて説得した。

グラハムさんの台詞で「聞く耳持たぬ」というのがあったが、私はちゃんと聞くようにしよう……いや、まあ台詞としてはいいか

## 記念話・夢の中で 出会い

我が名は未だない。生まれたときから今この瞬間まで、名を与えられたことは無かった。常に付きまとう言い様のない喪失感。それに突き動かされるように知識を求め、果てには「ダイアリー」と教主様に言われるようになった。何でも、日記という意味らしいが……何故そう呼ばれるのかもわからぬ。

しかし、未だ名はない。ダイアリーは教主様しか使わぬし、あれは名と言うより判別の為の記号のように聞こえる。我が姿形を表す言葉は見つかれど、我自身を表す名は見つからぬまま。教主様と同格と言われるV・V・様にいただいたギアスと呼ばれる超常の力。それをもってして、我は他者から我の名を探す毎日。

「他者の願い、魂を夢の中で共有するギアス」

我自身、求める者は自身の中で見付けられず、本や映像資料の中……つまり他者のアイデアをもってしか何も得られぬことを理解したが故の「願い<sup>ギアス</sup>」だと、V・V・様は笑って仰られていた。我はそれでも構わぬ。そもそも生まれてからこの教団の中で育ってきた。外も知らぬ。他の思想も知らぬ。何が当たり前で、何が不自然かなど判別できるものが他者の表面からは得られぬ。ならばこのギアスをもって心に踏み入れ、傷つけぬ

ように見れるこの力は非常に好ましい。答えは欲しいが、他者を害してまで欲しいわけではない。

そんな自身を探し、時にはギアスを使った成果を記録する毎日に、突如V・V・様から「お願い」をされた。教団においてこの「お願い」は神からの神託と同義だと教わった。それも真実なのか、最近では疑問である。

「やあ、えつとダイアリー、だっけ？君にお願いがあるんだ。ちよつと僕と一緒にお出掛けに付き合つてほしいんだ」

お出掛け……つまりは外。教団の外に出るといふことだろうか。我がギアスは既に教団内で使っていない相手がいらない程多用してきたため、新たな知識は突飛なアイデアを思い付いた人物からしか得られなくなっていた。これはチャンスだ。

「わかりました、V・V・様。何処へなりともついていきます」

表面上の態度は、努めて冷静に返事を返す。教主様とV・V・様はどちらもギアスが効かない、超常の存在。逆らう必要はないが、教主様と違いこのV・V・様はどこか恐ろしく感じる。昔、同じ年の教団の子の夢に入ったことがあったが、その中は人を害する存在で溢れかえっていた。表面上はとも優しい子だったが、内心ではあんな風に周りを害したくていっぱいだったのだろう。V・V・様はそんな彼に似ている気がするのだ。違う面もあるのだろうが、あのような内に秘めた恐ろしいものを持っている気が

する。

「それじゃ、行くうか。君のギアスを使って欲しい相手がいてね。行き先はね……」

日本。悪意か興味か……その行き先は、どうやら日本にいるらしい。私はV・V・様と教団の神官に和服というものを着せられ。飛行機に乗り込んだ。……さて、外の世界のその人物は、我にどんな知識を与えてくれるのか。それだけが楽しみである。

目的の人物は日本に来てすぐに見つかった。日本人は黒い髪色が多いから、その人物の金髪は目立っていてわかりやすかった。

グラハム・エル・ブリタニア。V・V・様の「お願い」によって我がギアスをかける人物の名だ。何でもV・V・様とは浅からぬ因縁の持ち主らしいが

「随分と僕を待たせてくれるからね、たまには痛みを与えて思い出させてあげなきゃい

けない……それに退屈なんだ、楽しまないね」

その言葉と共に、日本でやるべきことを理解した。ようは我がギアスでそのグラハムという人物を、叩きのめせばいいのだ。

我がギアスは対象に触れて、その対象と同じ時間に寝ることで発動する。教団内では基本的に皆の就寝時間は決まっていたため、然程苦労は無かったが、今回は少し面ど「ああ、そうそう。彼の就寝時間は事前に調べてあるから心配はいらないよ。後は触れるだけさ」

……いつの間に調べていたのか、「曜日毎に確実に寝ている時間」と書かれた紙を差し出してくるV・V様。もしかして、グラハムという人物、結構な恨みを買っているのだろうか。ちよつとばかり同情してしまう。

ならば、後は接触して触れるのみ。1度夢の中に入ってしまったら、我が姿形は思いのまま。夢の主になり代わることだけは出来ないが、その夢のルールさえ理解すれば、立場も力の使いようも自由自在に扱える。例えば、動物と仲良くなって暮らす夢であれば、こちらも仲良くなった動物を用意し、その動物達に夢の主を襲わせるなんてこともできる。相手の好きな人物になることも、逆に嫌いな人物になることもできる。これを使って「ちよつかい」を出して、V・V様の存在を焼き付けたいのだろう。

「……だよ、ダイアリー。君の髪の色は黒く染めだし、カラーコンタクトで瞳の色も黒く

なってる。流石に顔立ちは変えられないけどこれなら、日本人に見えなくもない」

そして、V. V. 様と共にたどり着いた場所は、道場と呼ばれる日本の修練所だった。既に変装を終えたこの姿で対象と接触し、速やかに離脱。後は同じ時間に寝れば、「お願い」の通りに夢で「ちよっかい」をかけるのみ。

「では行つて参ります」

「がんばつてねー。あ、気を付けてねー」

最後に意地の悪い笑みを見た気がするが、気にせず道場に入る。飛行機内で渡された資料によると、こここの門下生のフリをすればいいらしいが………さて、どうしたものか。

嗚呼、ほんとどうしたものか。

指し示したように、道場にはグラハムしか居なかつたため、出会うこと自体は難しく



なかった。

「さあ、自分にかかってくるがいい!!」

後は、不自然でない程度に触れるだけだ

「どうした!脇が甘いぞ!!」

触れるだけなのに……

「この軌道!目に焼き付けるがいいツ!!」

「くっ!なんと!という滅茶苦茶な!」

乱雑に見えて、しっかりと隙をついてくるグラハムの木刀に思わず尻餅をつく。

軽く挨拶をして、我も門下生だと嘯くと「ならば手合わせ願おう!」とか言われ。それなら手合わせの最中にでも軽く触ってとつと帰ろうなんて考えていたのに……

なんだこの男……V. V. 様の話ではまだ12歳になったばかりの子供。道場に通つてはいるが、我のような他者に触れるためだけに暗殺の技を習ったものでも、軽く対応できるとか言つてたのに……

「ふむ、少しやり過ぎたか？まだ手加減がうまくできてなくてな、すまない」

……え、手加減してこれか？木刀を振ってる最中に、急に笑顔で喋りだしたと思ったらどンドン加速していったんだが？え、手加減？これが？

「そうか、手加減してくれていたのか！いや、こちらこそ対応できなく申し訳ない!!ははは……」

乾いた笑いしかでないではないか……普通手加減してる人間が道場の壁を蹴りながら「隙ありツ!!」って三角跳びしながら木刀を振り下ろしてくるのだろうか……確かに攻撃は全て木刀目掛けて行われていたから……いや、でもこんなものなのか手加減ってそう思い悩んでいるとグラハムのほうから手が差し出されてきた

「ほんとすまないな、大丈夫か？随分と強く尻を打ち付けたように見えたが……ほら、手を貸そう」

……少々癪ではあるが、このまま手を握って帰るとしよう。

V・V様の因縁とは別に、ここまで変な動きで叩きのめされては我自身も仕返ししてやりたくなくなった。

「ありがとうグラハム殿。よいしょつと……ふむ、今日は他にも行かなければならない用事があつてな。申し訳ないがここで失礼するよ」

「ふむ、そうか……もう少しで手加減がしつくりできそうだったが。仕方ない。また縁

があつたら会おう！さらばだ！」

ああ、さらばだグラハム。そして、すぐに会えるとも。首を洗って待つているがいい！夢の中で今度はこちらがお前を圧倒してやる!!

V・V・様が用意した仮の拠点で、時間を待つて寝てみると……

「ほう、これがグラハムの想像、魂の世界か」

そこは海が見える箱の中だった。一応今回は正面から叩きのめしてやろうと敵の立場を想像しながら寝入ったが、成功のようだ。基本、夢の中で明確な立場を想像しないか、味方を選ぶとすぐそばに夢の主がいるのだが……どこにもいないということはしっかり敵側で入れたらしい。

それにしてもここはいつたいどこなのだろう。というか、この機械の人形みたいなものはいつたい……夢の中であるがゆえに自分の視点だけじゃなく、周囲も見ることができるとどうやら我は人形の機械の中にいて海の上を飛んでいるらしい。……初めての

経験だ。空を飛びたいという願いの夢に入ったことはあるが人形の機械で飛びたいなんてどんな夢を持っているのだろうか………

『隊長！見つけましたぜ!!』

思案しながらそのまま身を任せて飛んでいると、突如声が響いてきた。夢の中だからできることだが、ある程度の距離であれば他者の声を自由に聴くことができる。どうやら、今の声は我に向けて言ってるわけではないようだが……

『よく見つけたハワード！行くぞ！フラッグファイター!!』

突如、グラハムと思える声から聞き覚えのない名前と単語が出たと同時に体に軽い衝撃が響く！

「くっ！何だ!?!何が起こってる?」

思案を止め、再びこの機械の外に意識を向けると黒い飛行機のような機械1つと、似た形状をした水色の機械が2つこちらに向けて接近していた。先程の衝撃はこの黒い機械の先端にある銃のようなものから出た、青白い弾に撃たれたようだ。

『ようやく見つけたぞ！ガンダム!!夢のようだ！さあ、私の腕がどこまで通用するか……試させてもらおうぞ！ガンダム!!』

『お供しますぜ隊長!』

『私も続きます!』

『ダリル、ハワード……感謝する!』

何故かはわからんが……グラハムが現実でやりあつた時とは比べ物にならないほどの感情を爆発させているのはわかつた。やはりあの黒いのにグラハムが、そしてその後ろに続いている水色の2つにそのダリルとハワードとやらが乗っているのだろう。そして、我が乗っているこの白と青で彩られた……そうだなこれはロボットと呼ばれるものだろう、本で見た記憶がある。この人形ロボットがガンダムとやららしい。

名前を理解すると、装備している武装をどう使えばいいか何となく解つてきた。我はガンダムを振り返らせながら、その右手の銃のような物で、黒い飛行機目掛けて発砲した。

『は!その程度の腕では当たらんよ!!』

3発程撃つたが、その全てが避けられる。ならばとその右手の銃のような物を変形させ、剣に変える。

『ほう!接近戦がお望みのようだ!!』

『隊長!危険ですここは我々が』

『構わんだリル!ここが私の魂の正念場だ!!』

何か叫んでいるが、気にせず接近して剣で横一文字に切りつける。しかし、その黒い飛行機はその一撃を紙一重で避けて見せた。

「くっ！なら振り返り様に……」

もう一度切りつけようとした瞬間、背中に強い衝撃が走った！

「な、どうやって!?!」

黒い飛行機の銃は前方に固定されているように見えた。これに撃たれたわけではない。残りの水色の飛行機もまだ私の前方にいるためこの2つからの銃撃でもない。ならばどこから……戦いに集中していた為、行っていないなかった夢特有の俯瞰視点で見ると答えがわかった。

「黒い……ロボット!?!」

『くっ!!はーまだ呼ばれてはいないが……人呼んで、グラハムスペシャルツ!!!』

『あれは中尉のツ!』

そこにいたのは、先程の黒い飛行機ではなく黒い人形のロボットだった。いや、夢だからわかったが、このロボット……先程の黒い飛行機が変形したのか!!どうやら変形した直後にこのガンダムの背中を蹴り飛ばしたらしい。

何だこの男の想像力は……何だこのロボットたちは!?!何だこの魂は!?!我は今までこんな夢に出会ったことはない!

そんな驚愕も、一瞬にして切り替える。

しかし



我はまたあの夢の世界に行けるのだろうか……この世界に、あの高揚感を感じさせてくれるものが現れるだろうか……今はそればかりが頭の中を埋めつくし。V・V・様のことも忘れ、感慨に浸るばかりだった。



尚、その頃のグラハムはというと。

「ん!?ここはどこだ!?何故君たちが私の世界に!!」

「隊長のいるところに我ら在りですよ」

「例え、違う世界であろうとあの人の魂があるならば、どこだろうと駆けつけますぜ」

「うううう……これは夢か、夢なのだな!!ハワードとダリルに会えるなんて!!」

「驚くのは早いですよ、どうせ夢なら乗ってみませんか?」

「ちゃんと隊長のも用意できてます」



「これは……………フラッグか!!!!」  
夢の中で歓喜乱舞していたことは言うまでもない。

## 初めましてだな！取引！

「と、言うわけなんだが何がいいだろうか？」

「いや何が。と、言うわけなんだ。なんだ？説明ぐらいしろ坊主」

「ぼーずー！」

私は藤堂さんを必死に説得したあと、それならば私より枢木ゲンブ首相の方が適任だろう。と後押しされたので、またあの山奥の別荘に来ていた。ゲンブの言葉を真似て、手を上げる可愛い赤子は枢木スザク。今年で3歳になるコードギアスの主人公ルルーシユの親友にいずれなる予定の男の子だ。いやあ、それにしても何処と無く少年の面影を感じるような気が……いや、まだ少年……刹那には程遠いか。何がとは言わないがな。……言わないがな!!

ま、まあ戯れはここまですて、話をしなければな！

「実はな、かくかくしかじかで」

「なるほど、うまうままるまるなんだな……」

お、なんだちゃんと伝わってるじゃないか！

「なるほどなるほど………ってわかるか!!真面目に話さんなら帰れ!!」

ほほうーノリツツコミとは珍しい!!

「いやあ、なんだかんだ言って、私との会話を楽しんでくれてるようで何より!」

「え、楽しんでるように見えるのか?」

「とうちやま、たのちそう!」

うむうむ、スザク君ですらわかっているのだ。私にだつてわかつて当然だな(何故そうなる)

「まあ、ふざけるのはここまでにして」

「最初からふざけないでくれ……」

「今回は相談したいことがあつて来た。相談に乗ってくれるなら私のとつておきをくれてやろう」

「……………ほう。そのとつておき次第だが?」

「あう?」

私のとつておきに反応して、目を鋭く細めるゲンブ。その頬を引っ張るスザク君。……………うーん、枢木シユールだ。

「見返りは、現在の私が知る限りの情報を1つ教えよう。ブリタニアで行われている研究について。皇帝が探しているもの。どんなものでも構わん。相談の結果次第では1つと言わず、2つでも3つでもくれてやろう」

まあ、正しくは私が持つ情報で今開示しても問題の無いものに限られるがな。本来ならば知り得ないことまではさすがに教えるわけにはいかぬ。神根島しかり、ギアスしかり。だが、それ以外ならば差し出すつもりでゲンブの目を真つ直ぐ見つめる。

「……それほどの相談か。良いだろう。私にできることわかることの全てで、その相談に応じよう。何に悩んでいる」

少しの間はあつたものの、引き受けてくれるようで安心した。藤堂さんは少し勘違いの傾向が見えてきた上、やはり既婚者でもない人間に聞くのも違うだろう。ゲンブが駄目なら次はもう、桐原翁しか思い付かなかつたため助かる。あのぬらりひよんモドキとは、叶うならあまり話したくはない。いつつも会う度にじーっと見つめてくるから不気味なのだ。

ま、とりあえずは用件を伝えねばな。

「感謝するゲンブ殿！実は私の側に去年までメイドさんがいたのを憶えているか？」  
「いや、憶えているに決まっております。あいつ何度も私に日本料理を習いに来ていたからな。坊主が美味しそうに食べてるから、私が作ってあげられるようになりたいとか言つてな」

なんと！そんなところまで気を回してくれたのかメイドさん!!これは是が非でも満足のいく贈り物をせねばならんな!!!

「そのメイドさんなんだが、妊娠しているのがわかってな!」

「……………ん?妊娠?」

「お祝いに何を贈ればいいか、どうしたら喜ばせられるか考え付かなくてな」

「ほお?」

む、何だこの藤堂さんのときのような違和感は。ちよつニコニコしてるが…………いや、でもゲンブだぞ?流石にこの大の大人が勘違いすることはなからう?

「坊主。何を贈つたら良いのかは、当の本人に聞くのが一番いいのはわかってるか?」

「理解しているが、それを直接聞くのは流石に駄目ではないか?」

「妊娠まで行つてて、聞かないのかお前?」

いや、妊娠したら聞いて良いのか?そういうものなのか?…………やっぱ何かおかしくない?違和感強くなってきたぞ

「何故、妊娠まで行つたら聞けるのだ?」

「いや、そういう関係になつてゐるなら聞いても問題無いというか、むしろ聞かなきゃいけないだろ普通?」

「あう?」

……………おい、まさかな?

「……………普通なのか?」

「いや、じゃあ何で坊主はあの奉公人を妊娠させた!？」

ほら来たああああ!! やつぱ勘違いしてやがるう!!

え? マジで? この世界の日本人って勘違いしやすいのか!? それとも私の言い方が何か変なのか!? どうしてお前から私が妊娠させた体で話進めていくのかなあ!?

「もしや……好いているわけじゃないのか? もしかして、あれか! ちまたで言う遊びつてやつか! それなのにお前、祝いの品なんて贈ろうとしてんのか!? 流石にそれは」

「あのなあ……藤堂さんといい」

「責任はちゃんと取れるのか!? いいか、まだ小さいからわからんかもしれないが、こういうのはとても神経質な……ああデリケートな問題でな」

「ちよつと待つてくれないか……いい加減堪忍袋の緒が切れる……」

「いや、待つもなにも大事な話なんだぞ? こういうのはもつとしつかりと」

「いいから、聞け!!!」

「きやう!？」

私は気付くと、思わずゲンブの胸ぐらを掴んでしまっていた。その行動に驚いたのか、スザク君がゲンブの腕の中で驚いているのが見えるが今はちよつと置いておく(え)。

「まず最初に言っておくが、私の子ではない。いいか?私の子ではない。メイドさんとそういう関係になったこともない。いいな?」

「え、それじゃいつ妊し」

「いいいな?」

「う、うむ」

「おいこら、お前が怯えるからスザク君も泣きそうじゃないか。何を考えている(いや、お前が)」

「相手はブリタニアの軍人だ。それに元々彼女は結婚していたらしい。いいか?私はただ、育ての親と言っても差し支えない彼女に日頃の礼も込めて、贈り物をしたいだけだ。いいな?」

「ここまで言えばちゃんと理解してくれたのか、無言で首を縦にブンブン振るゲンブ。うん、それが面白く思えたのかスザク君もブンブン振りながら手を叩いている。昔あつたお猿のおもちやかお前は、可愛いなおい

「ん、まて坊主」

「何だ？まだ何か？」

思わず言葉が強くなつてゐる気がするが、もういいや。ここまできたらこの態度で突っ切つてやる。

「その程度の相談事に国の重大な情報を賭けるか普通？それがあつたから坊主自身のことだろうと、想像をつけていたんだが」

何だそんなことか。前にも考えていたことだが、そもそもこの日本に多少の情報には賄いていくつもりだった。それが理由の1つではあるが……

「自身の恩人の為に何かをするならば、自分ができること。差し出せることの全てを持って当たるべきと思つたまで」

「え、じゃあ何か？国と同じ価値があるつてか？」

私はその言葉に深く頷き、先程まで掴んでいた手を離す。まあ、流石に国と同じは言い過ぎな気もするが……気持ち的にはそれぐらいあるし構うまい。

「そうか……坊主は国を人と見るか……ふつ。見る目が違うな」

おい、何い話みたいに笑つてやがる。つか何でそういうのに行き着くの!?!そもそもこつちはただお礼の品に何が良いのか教えてほしいだけだつてのに！

「で！結局こういうときは何を贈るのが一番いいのだ？」

もう、無視だ。とりあえず私の用件とつとと済ませて、スザク君と遊びたい。去年か



らゲンブの別荘に行った時には、スザク君の遊び相手を必ずするようにしており、手製のフラッグ人形を使って、ちよつとずつ洗……興味を持つてくれたら嬉しいなあと思いなながら接しているのだが。……赤ちゃんつて結構可愛いものだ。これがあの乱暴乱雑なのに天然で年上キラーにして人生螺旋がりまくりの好青年になるんだから、時の流れは残酷だ。

「いいか、まずな坊主。基本的には妊娠中の女性に贈り物をするのは御法度だ。贈るなら出産祝いとしたほうがいい」

口を開いたゲンブが最初にそう忠告をくれた。

確かに私の前世でも、昔はそういう風習があつたと聞く。何でも出産前にも妊婦にプレッシャーを与えかねないとかなんとか言っていた。でもそうか、こちらの世界でもそう思われているなら、渡すとしても出産後になるか。

「出産後に贈るものは、まあ赤ちゃんの服だったり、靴下だったり無難なものが喜ばれたりするな」

無難なものかあ……うーむ。

「私にとつて無難なものとなるとフラッグか……」

「いや、坊主にとつての無難なものって意味じゃなくてだな? てか、何だフラッグつて」  
「ああ、気にしないでくれたまえ」

やっぱり、私的にはもうこの手製のフラッグ人形が一番ベストなのではと思えてきた。人形とはいっても全て表面は肌触りの良いシルク生地で出来ていて、子供が口に入れたりしそうな部分はしっかりと補強もしており、何より内部に流体サクラダイトと呼ばれる高エネルギー物質の欠片を嚴重にモーターと接続させて潜ませていて変形も可能な上、所持者が危険に晒されると周囲の危険人物に突貫して爆発するという何があっても大丈夫！という優れものだ。……………まあ、2体作るのに3年もかけてしまったがな（何やってんの）。

「うむ、そうなると赤ちゃん用の服と、子供が安全に遊べるぬいぐるみ（フラッグ人形）を贈るかな」

「え、あそうか。それに決めたんだな？ 案外早く決まってよかったな……ハハハ」

ゲンブが何か疲れたように笑っているが、疲れたのはこつちだというに。まあ、疲れながらも互いにスザク君をあやす手は決して止めていないのだが。

「存外、そういう物で良かったのだな。もつと仰々しい物がいいのかと思っていた。助かったぞゲンブ殿」

「何、この程度で情報を貰えると考えると、安いものだ。それに、知ったからには私のほうからも祝いの品を用意しておこう。さすがに首相から奉公人へとはできんから、坊主経由で渡してくれ」

「ああ、重ねて礼を言うぞゲンブ殿」

さて、ここまでしてもらったからには礼の情報も良いのをあげねばな。

「さて、返礼の情報だが……何が知りたい?」

私の言葉にゲンブは1分ばかり思案したあと、こう問うて来た。

「坊主……ブリタニアは日本をどう見てる?わかるか?」

割りとベストな質問が来た。答えは簡単だ。この一言でこと足りる。そして、きちんと理解してくれば多少は対策をとってくれると期待して

「悲しいことだが、「糧」<sup>かて</sup>として見ているだろう」

私はそう答えた。その答えにゲンブは真剣な表情で額に皺を寄せてただ一言「やはりな……」とだけ応え。この日はここで解散となった。

そして、私はこの日を最後に、ゲンブの別荘に行くことは無くなった

## 初めましてだな！資源！

『――先日より、日本にて発表された『サクラダイト』と命名されるレアメタルの重要性について各国で協議が始まっておりー』

「そうか、とうとう動き出したかゲンブ……」

私はテレビの目の前で、少し青みがかったロングヘアの優しげな目をした女性キャスターが話している報道の内容に事態が急速に動き出していることを実感する。

先日の私の、メイドさんへの贈り物何にしようか相談所が終わり、ゲンブからの質問に追加で2つ、3つ答えた結果な今日の前で起きているニュースなのだろう。

「日本はブリタニアからすれば、糧のように見られている。実際には日本に限った話ではなく、諸外国全てをそう見ているだろう……しかし、これはナンセンスだ」

あの後聞かれた質問は、「ブリタニアと戦わずに済む道はあるか」「君から見て我が国の強みは何か」といった解決策を模索するようなものだった。その全てに答えたわけでは無いが、確実に伝えたことは

「決して傲らず、謀らず、誠実に行くことだ。そうすればブリタニアに睨まれても、抵抗できる」

それだけは……いやそれしか伝えることはできなかった。別にブリタニアの国力に劣っているとはいえず、日本軍人の練度そのものは高い方だろう。少数とはいえナイト・オブ・ラウンズに食らい付ける者もいるだろう。藤堂とか……後……うん……いるだろう。後十年もすれば出てくるさうん。

「サクラタイトの重要性に目をつけていたのは流石だが、よもやこのような手段に出ようとは……やはり歴史は繰り返す運命か」

まあ実際には繰り返すのではなく、原作通りに起こるだけなんだがな。何せテレビの報道はこのレアメタルの発見だけではなく……

『……現状でこのサクラタイトの採掘が好調な我が日本国は、他国との共存共栄の為、この貴重なレアメタルの輸出を決定いたしました。それにともない、今後の国交に関しての話し合いが……』

既に輸出の話までしてしまっている。……このまま利権を握り続けて他国に目をつけられるのも悪手だが。これもブリタニアに対しては悪手だぞ、ゲンブ……。

現状はこのレアメタルの使い道が明確に定まっておらず、これから各国で協力して経済の発展を望む腹積もりだろうが……。その使い道が既に見えているのがブリタニアだ。ゲンブが知らないとしてもおかしくはないが、現在我が国で開発している人形の口ポット・KMFはまだ実践運用が不可能というだけで、構想自体は固まっている。問題

はそれを支え、かつ確実な稼働を可能とするエネルギーだけだった。それが、こうして提供されてしまえば……後はあのシャルルとV・V・のことだ。原作と同じで上手い餌きつかけが転がり込んできたと思うだろう。

例え、原作と同じくそれが各国に平等に配分されるとしても彼らには関係ない。ラスボス

ここで、改めてこの世界と前世での違いが際立つのだが。

前世では核エネルギーを初めとする、割と豊富な資源をもっていた。それによって熱エネルギーを基礎とする科学の発展が根幹にあるが、この世界は違う。

基礎とするエネルギーが、電力に依存するのだ。すなわちエネルギーと言えば電力が主流として浸透している文明世界なのだ。

さて、そこでサクラダイトというレアメタルの性質が鍵となる。このサクラダイトの性質とは常温で超電導状態にあり、この世界の発展の基盤となつている電力文明における壁。高温時の超電導体の完全な調整に必要不可欠な存在なのだ。

さて、ではこの電導体を調整してできるものは何か？簡単に言うともーターエンジンだ。それも巨大構造物を動かせるほどのとびつきり高出力のな。その上、このサクラダイトというレアメタルは流体した場合、引火性の強い物へと変化してしまう性質も持

つ。

その技術に行き着くまではまだまだ先があるが、その先を見通せるだけの傑物はどの国にもいるだろう。後はどうやっても時間の問題。加えてシャルルとV・V・にとつてはこの日本そのものに用がある。まだ、ラスボスの計画も終わりが見えているわけではないのだろう。じゃなければ、私の我が儘を通して日本にやるなんてことはしないだろうしな。

「さて、賽は投げられた。後は私の計画次第といったところか……」

サクラダイトの取り扱いにたいして、ゲンブに伝えられれば良かったが、そもそいつこの世界でサクラダイトが発見されたかも知らなかった為、変に助言すると何故知っているのかと面倒な言及があると踏んで黙っていたのだが……。既に発掘してそれを足掛かりにしようとはな。

思案しながらテレビを見てみると、藤堂さんが昼食を運んできてくれた。

「さて、今日は君の大好きな卵焼きと鯖の味噌煮だ」

「おおお!なんとという僥倖!!いただきませうだ!!」

後のことはシュナイゼルからの連絡次第。それが来るまではこの生活を甘受させて

もら……「旨い!!!」



あれから数日後、とうとうシユナイゼルから連絡が来た。

『やあ、待たせたねグラハム。こちらの準備は万全だ』

「ありがとうございます、兄上。……サクラダイトの動きは？」

『ああ、今のところは特に何も。皆何に使えるかの手探り状態だよ。それに我が国でも少しは取れるみたいだし、1年ぐらいは研究の日々なんじゃないかな』

科学者たちの嬉しい悲鳴が目に浮かぶよ、と額に指を当てながら首を振るシユナイゼル。月日というのは残酷で可愛らしさの方が上回ってたシユナイゼルも随分と切れ長な目になり、顔立ちは一層イケメンな優男という印象を抱かせるようになった。それに時折とるポーズが様になっていて余計に目立つ。グラハムさんも、ガンダム系の雑誌でいろんなポーズ決めてたし！別に負けてはないからな!!ミスター・ブシドー時のあの顔を上げながらの仮面に手を当ててニヤリとするポーズとか超カッコいいし!!!あれを本編で見れたらきつと全国のグラハムさんファンは心を乙女にしていたに違いないのだ!!!あのカッコよさに合わせて言い回しも強くなつていいじゃないか!!!このブシドーだけはああああああ!!!



………久々に荒ぶってしまった………今は電話中だ、落ち着け私。

「となると、現状のKMFの開発状況は?」

私が内心を整えて聞くと、珍しくシユナイゼルが顔をしかめた。

『悪くはないよ。悪くはないんだが………はつきりいつてコストがかかりすぎている。君がくれたこのフラッグ人形を見せたりしてインスピレーションは与えているが、いかんせん頭が固い人たちばかりだね。まあ、だからこそ研究者なんだろうけどさ………一応動く理論は完成している。後は実際に稼働させるだけだ』

「なるほど、つまりその問題が稼働しないということですね」

恐らく、形は既に人形にでも近づいてはいるんだろう。まさか私が誕生日に贈ったフラッグ人形試作三号機を見せて回ってるとは完全に予想外だが、問題そのものは予想通りだ。

『そうなんだ。現状稼働させるための動力が弱すぎる。ある程度スケールダウンさせてみても、精々首が回る程度。そもそも足も腕も動かさないんじゃない意味がない』

となると、やはりこれを解決するのは

『ま、だからこの間発表されたサクラダイトにみんな夢中さ。現状ある動力機関はすべて試した。単純に一方方向に動くだけなら大量のモーターを積みばなんとかなるだろ

う。だがそれではわざわざ人形にする意味がない。KMFに求めているのは汎用性だからね』

「ならば、私の夢はまだ遠いですね……」

私の落胆するような声に、抱えていた頭から指を離してそのまま自信の唇まで持つていく。……だからいちいち行動がなんか艶かしいんだよ!! 私は男食家……ではないのだ!! そこだけはドラマCD版のグラハムさんだけで勘弁してほしい!! 愛は認めるが! 愛は! ちよつとその勇気が私にはない!! そこだけはない!!

『それはどうかな?』

その色気を持つ口で、私の落胆を笑うように言葉が出てくる。

『あのフラッグ人形を見て、想像の意欲が湧いたって言う学生が3人程いてね……もしかしたら、作ってくれるかもしれないよ』

——原寸大のKMF:君のフラッグをね。

私はその言葉に、自分の心臓を鷲掴みにされたような感覚を味わった。

その3人とは、もしや原作において活躍する大半の名前つきの一騎当千系KMFを設計したあの人たちなのでは?

そして、もしや私の尊敬する、本来ならこの世界には存在しないはずの3人すらも私

は脳裏に浮かべてしまった。よもや、よもやだ。もし前者であるなら喜ばしい。しかし後者であった場合は………いや、自分で想像しておきながらあり得ないだろう。

「しかし、興味が湧いてくれるのは嬉しいが。私のフラッグに妥協はない」

『そのほうが彼らも喜ぶさ。何せ、KMFがまだ日の目を見ていないのにもう、可変機の構想を練ってる少年がいるなんて、正しく驚嘆に値するだろうからね』

私の口調を真似するように、そう言つて笑うシュナイゼル。それならば喜ばしい。私の愛は決して妥協を許さないのだからな

『さて、では作戦の日取りはグラハムが決めてくれ。こちらはそれに合わせて動く』  
「わかった、ならば——」

——皇歴2004年の春に、血塗られた場所で。

その言葉を最後に通信を切る。切った後も画面の前で私は意地の悪い笑みを浮かべるのであった。

「あ、メイドさんの出産日決まったか聞くの忘れてた!？」

初めましてだな!やらかし!

皇歴2003年10月26日。私の元に吉報が届いたのは、秋の夜更けの事だった。いつも通りに計画の段取りを頭に思い浮かべながら、藤堂さんとの稽古の振り替りや、最近仲良くなった千葉という年上の女性の門下生や、卜部という少年の門下生との日々を思い返している時に、唐突に電話がかかってきたのだ。

『も、もしもし!?!』

「はい、こちらユニオン直属米軍第一航空戦術飛行隊……」

『え、私かけ間違えた……?』

「失礼、グラハム・エーカーです」

くっ!せめてMSWA Dまでは言わせて欲しかったぞ!!

『ああ、良かった!やはり殿下の連絡先で間違いないですね!!急に変なこといいですから困惑しちゃいました!』

変なこと……変なことだとおっ!!……いや、まあただグラハムさんの台詞言いたくなっただけだし。このユニオン軍とか知らない人々には確かに奇怪な発言に聞こえるか……世知辛いな、グラハムさん……

「それは申し訳ない。ところで君はいつたい？」

『あ、あたしのこともう忘れちゃいました？』

何!? その台詞はよく聞く。「あ、久しぶり! あれ? わたしのこと憶えてない!? ほら! 中学で同級生だった、隣の席の……」とか言っておいて「へへ、ちよろ(笑)簡単に騙されてやんの!」とかのパターンに落としこむ美人局系女性か!? (いやなんでそうなる) 私は騙されん! 騙されんぞ!! いや、騙されてもいいかもしれない!! (いいのかよ)

「失礼、どこかで会ったような気もするが……」

『それは酷いですよ殿下あ……ほらあたしですよ! あたし!』

あたし? ……あたし……ああ、何か思い出してきたぞこのよく泣く顔!

「ああ……そうかお前は!」

『そうですあたし!!』

「誕生日パーティーで給紙やってたどじっ子メイド!!」

『ええ! あのとときはシャンパンを溢して大変な迷惑を………つて違う!!』

む、何だ違うのか。わりといい線行ったと思ったのになあ

『殿下、あたしですよ。ナターシャです! 殿下のオムツを変えてたナターシャですツ!』  
そう言いながら「えっへん!」っと胸を張る姿と泣き顔が頭の中で1人のメイドを思い出させる。

「ああ!私の出立の後すぐ結婚したあのメイドさんか!!」

『そう!そのメイドさんです!いやあ、今では一児の母なんてやってます!えっへん!』  
 とうとう自分の口でえっへん!と言ったかつての私つきメイドの一人。ナターシャ。  
 現在の名をナターシャ・ヴァインベルグ。……勘の良い読者は気づいているだろうが  
 (メタい) 煩い!私は四次元の壁など気にしない!何故なら!私もその壁を越えてきた  
 のだから!!(ドヤるな)

ピンク髪のメイドさんは、実は最初から登場していたわけではなく。最初から私の世話を担当していたメイドさんが、このナターシャさんだ。私の初めての言葉をシユナイゼルと共に聞いたのも彼女。コーネリアからいっつもお土産を手渡されていたのも彼女。ぶっちゃけ、私が出掛ける時がピンク髪のメイドさんで、他が全てこのナターシャさんが担当していたのだ。

それにしても、結婚相手がまさかヴァインベルグ家とはなあ……………まあ、これからあれが産まれてくるとは思えんし……………きつと分家筋とかだろう。そうであつてくれ……………

『あ、そうでしたそうでした!殿下に至急報告がありました。同じく殿下に仕えていた私が任を授かりました!』

「同じく……………ということは彼女に何か?」

まさか！計画が嗅ぎ付けられて！私の縁者として彼女が!?……いや、それならばナターシャも殺されておかしくはない。ということは事故か何かにあったのか!?

『はい、おめでとうございます！つい先程、無事に出産を終えられました!』

……………はい?!

「出産!?!」

今年中かとは聞いていたが……え、今日!?だつて今日は……………

私はメイド。今はそれでいい。それで良かった。

本名。ヘレン・アールストレイム。しかし、今はただのメイド。私は常にそれを意識してきた。

いつからだつたらう……そんな私のメイドの仮面が剥がれていくのを感じたのは。始まりは、ただ新たに誕生した皇帝陛下の子の世話を任されたという榮譽からだつた。

この時既に私の夫、ハルト・アールストレイムは軍人として最前線で戦っており、年に1度か2度会えるのみだったが、別段寂しい思いはしていなかった。遠くに居ようと



想いが色褪せることなど、私たちには無いと思えた。

最初に皇子……グラハム殿下と会ったときは、自身の子供もこんなふてぶてしい表情をするのか、等と変な考えを巡らしていたものだ。……それも直ぐに別の考えで上書きされたが。

変化を感じ取ったのは、グラハム殿下の元に、あの幼くして天才、冷静に物事を捉える才多き子と持て囃されるシュナイゼル殿下が、足しげく通われてると気づいた頃だった。もう一人のメイド、ナターシャ・メイスンからグラハム殿下の最初の声をシュナイゼル殿下と一緒に聴いたと、涙を流しながら報告があったときは、泣くほどかと呆れていたが……それがシュナイゼル殿下を引き寄せたのか。瞬く間に二人の殿下の事は噂になっていった。その時のグラハム殿下の顔は、とても赤子とは思えないほどはりつめた表情だった。子供には似合わない……そんな仏頂面とも言うべき顔。私はそんな殿下に思わず

「大丈夫ですか?どこかお体の具合でも?」

なんて、子供が理解できるはずないか……と思いつてしまった。それにたいてい、殿下は赤子のようにわからないと首をかしげることはなく

「ふ、ちんぱいむよう、だ!あちがとう!」

なんて、舌足らずなりに懸命に言葉を紡いでくれたのだ……。赤子とは、こんなにも

可愛いものなのだ……（

それから、私もシユナイゼル殿下が興味を持ったのがわかるような感じで、日々グラハム殿下の成長を見守っていた。

そして、殿下が5歳の時だったか……何人も新たに皇帝の子が産まれていく中で、殿下がお絵描きをなされるようになったところに、私はそれを見てしまった。いや、見てしまったというより、見せられたのではないかと、今では思ってしまう。

何枚も描かれた、黒い飛行機と黒いロボット。そして、ある程度書き慣れた頃に書き足していったのか、似た形をした青い飛行機とロボットの絵。それだけ見れば、子供が何となく思い付いた落書きで終わっていたのだ。しかし、そのお絵描きの紙の中に、1つだけ文字だらけの紙があった。そこに書かれていたのは……

「クロヴィス ゆーふえみあ じえれみあ まりあんぬ じの どろてあ びすまる  
く ぎるふおーど  
」

最近産まれた皇族や、貴族達の名前が書き連ねられていた。そこにはグラハム殿下が産まれるより前の貴族の名前もあつたが、それを引いても沢山の名前が書き連ねられていた。その中に唯一フルネームで書かれており、尚且つ◎で囲まれた名前に私は驚愕したのだ。

「アーニャ・アールストレイム」

何故ここに、アールストレイムの名がある?何故この名前だけ、フルネームなのだ?何故この名前だけ◎がしてある?何故だ?この名前に何がある?むしろ他の名前に何かあるのか?いつたいこれは何だ……?

そんな思考の渦の中で困惑しているところに、殿下が声をかけてきたのだ。

「む!それを見てしまったのか!」

「うえ!?あ、いやその一生懸命お絵描きされていたので、どんなものを書かれているのか気になったもので……」

私はこの時、言い様のない恐怖を感じて思わず声が震えてしまっていた。しかし、殿下はそれを意に介せず、ただ人差し指を自身の口と私の口に押し当て

「ふむ、内緒だぞ?これは今まで、そしてこれから先産まれてくる人たちの名前さ」

と、まるでイタズラを思い付いたような顔で話し始めた。

「私はね、ここに書かれた名前の人達がどうか幸せになつて欲しいと。身勝手に願って書いていたのさ」

その言葉は、まるでイタズラがバレた子供のようでもあり、その顔に似つかわしくもない、何かしらの覚悟を決めたような顔でもあった。その顔にこの疑問は聞かなくてはと、焦った気持ちで口を開いてしまった

「で、では殿下。その丸で囲んである名前は？」

「ああ、この名前はね。……うん」

先程よりも悩んだ素振りを見せた殿下は、天井……いや、窓から見える空を見つめながら答えた。

「もしも、この名前を見掛けたら、その子にはみんなが優しく接してくれたらいいなあって、勝手にお願いを込めてたんだ」

そして、また殿下は人差し指を自身の唇に押し当て

「ーだって、まだ誰も見つけてない名前だからね。それぐらいの願いを勝手に込めても、構わんだろう？」

なんて、ニヤリと笑ってみせた。

その言葉に私は、ふと最近の自身の出来事を思い出してまう。

年に1回は必ず帰ってくる、夫いつも子供が欲しいと話していた。しかし、産まれた子供にたいして、父親である自分は戦場で戦うばかりで、年に1度しか帰れない。そんな親が子供を持つなんて、産まれてくる子供には申し訳ないと言う夫。私自身も、今はメイドとしてこの離宮に務める身。仮に子供が産まれて仕事を辞めれたとしても、子供を養いながら生きていくには平凡貴族なアールストレイム家では厳しい。自ずと子供にたいして、まともに接してやれる時間は少なくなる一方だろう。

しかし、この殿下はその話をどこから聞き付けたのだろう。でなければ、あんなド  
ンピシャでアールストレイムの名字を付けた名前に、そんな願いを特別に込めるなんて  
言うわけがない。……………この殿下は、一方的に見えるが、どうにか周りの悩みを解決  
できないかと頑張る傾向があると、コーネリア殿下が仰っていたが、どうやらそのよう  
だ。

ああ、その優しさはとても胸に響いた……………私や夫が勝手に諦めている子供の将来  
を、まだ産まれて年端もない殿下にまで未来が明るくあるようにと願われては、勝手に  
諦めるなどもつての他だ!

「殿下……………このアーニャという名前……………私から産まれる子につけても構わないでしょ  
うか?」

気付くと私は、今さらながらにメイドとしての礼儀を思い出して、片ひぎを付きなが  
ら殿下に頼み出た。

「ふむ……………ピンク髪……………まあ、名前だけならばいいと思うぞ」

なんて、訳のわからない照れ隠しまで使って、殿下は名前を与えてくださったのだ。  
……………思わず泣いてしまった私に、「あ、女の子ならアーニャでいいと思うけど、男の子な  
らやめた方がいいかもしれん」なんて違う名前をつけても怒らないと、フォローまでい  
れてくださった。

ああ、私のなかでの殿下のイメージがどんどん変わっていったのだ。しかし、それが不快でないことが嬉しい……。ふふ、次はどんな優しさを見せてくれるのか。それをどこか楽しみにしてしまう自分を恥ながら支え続け、日本での命の危機などを乗り越え……。ついに今日出産となった。

5時間以上も死ぬと思う体の痛みを耐えて、産まれた赤子はとても綺麗なお揃いのピンク髪の女の子だった。

「あなたは……。アーニヤ……。アーニヤ・アールストレイムよ」

ー殿下が付けてくれた名前と願い。それが貴方を守りますように。

私はそう思いながら赤子の、頬をなで続ける。嗚呼、グラハム殿下。殿下の優しさが、このアーニヤを守りますように……。そして、私が貴方をアーニヤと共に守ります……。その優しさゆえにいつも苦勞をされる貴方を………

私は出産の疲勞もあり、ここで意識を落とすのだった………

『と、いうことがありまして無事へレンさんの出産は完了です！』

ーえ、どゆこと？あの紙を見せた記憶はあるよ？もう見られちゃった以上は仕方ないかあつて思つて、伝家の『GN口滑った』を使つて難を逃れたつもりが、自分が原作

キャラの名付け親になっていた!?何を言っているのかわからないが、と軽くポルナレフ状態だぞこれは!?!どうしたらいいんだカタギリ!?教えてくれ!!フラッグは何も教えちゃくれない!!

なんて様々なネタで混乱したところで動き出したものは仕方がない……………腹をくくるしかあるまい。

と、いうわけで

皇歴2003年10月26日……………アーニヤ・アールストレイム。

グラハムの名付けにより誕生。

うーむ、カオスだ……………大丈夫か?コードギアス?ま、今さらか!!これであると計画実行と共に帰るのみよ!(目線そらしながら)

『あ、そうそうシユナイゼル殿下からも言伝てです!』

ほらな?さすが我らのシユナイゼルよ!もうお前がカタギリポジ……………は、やれんな!

『不足の事態発生、日本にて暫し待機。だそうです！』  
「……………はっ。」

どうやら、まだ計画は進まんらしい……………何故だ!?



## 初めましてだな!兆し! 前編

「コーネリア様!ご無事ですか!」

「ああ、こちらは大丈夫だ。ギルフォードたちはどうか?」

「私の息子たちと共にこちらへ向かっています」

「ふむ、ダールトンの子供たちも中々腕が立つのだな。このままここで待機して、あいつらと合流するぞ!」

「はっ!!」



「クーデター? 『血の紋章事件』で反シャルル派は全て排除されたはずでは?」

私は、あの出産報告の次の日にシュナイゼルからの連絡を受けて、本国で起こっていることの説明を受けていた。まさかまさかのまたクーデターですかお父様。勘弁してください。

『そこは父上って言ってあげなよ』

私の言葉に苦笑しているが、否定はしないということはまだまだ反シャルル派は残っているということか……確か原作でも主義者がどうか言ってる奴がいたな。親衛隊とかいつてたっけ？

「それで？クローデータ程度で計画を中止にするのかな？」

そうだ、私はそこが解せない。あのシュナイゼルがたかが（いや普通に危ないが）クローデータ程度で、計画の実行を躊躇するとは到底思えない。私の言葉にたいして、珍しく顔をクシャッと歪めたシュナイゼルが重々しく口を開いた。

『彼らの狙いは君なんだよ、グラハム』

ん？いや、クローデータってあれでしょ？シャルルのクルクル野郎の弱肉強食なんて酷すぎるわ!! 私たちも周りと優しく一緒に暮らしたいの!! だから殺す!! ってな感じだろ？（物騒過ぎる）なんで私が狙われるんですか？

『今回のクローデータも父上を狙ったものではあるが、鍵となるのは君だ。君を首謀者として担ぎ上げて事を起こそうとしている』

フア?! いや、何で私が!?

『だって、君の行動は融和派の行動に見えるのに父上に黙認されている。それどころか、公式の場にこそ出ていないものの父上の信頼を言葉として受け取っている。彼らからしたら、君を旗印にして父上と交渉……あわよくば排除といきたいだろうさ』

………ほーん。ふおーん。あれか。グラハムさんムーブの為の努力が全て他人には融和派の行動に見えるわけか。ほーん。全然違うのに。むしろ、フラッグを作って乗り回して自身の想いを遂げたいという、至極真つ当な理由で戦いの渦中に切り込もうとする私の何処が融和派だというのは。是非ともクーデター首謀者に聞いてみたいものだ。

『その様子だと、自覚は無かったようだね。でも取り乱す様子もないし、流石はグラハム。この程度の障害は想定内つてところかな』

いや、まったくもって想定外なんだが。……まあ、でも話を聞く限りだと命の危険は無さそうだし。最悪捕まっても、私に何かある前にきつとラスボス達が駆逐してくれるだろう。

「無論だ。その程度で私の歩みは止められない」

自分の中で大丈夫という結論が出たからには、進むのみ。私はシュナイゼルに肯定の意を示し、計画について相談を進めるのだった。

………というか、このシュナイゼルの『わかってる』感がまるでカタギリのようで安心感を覚えている自分がちよつと怖いのだが………だって………ラスボスの一人じゃん………。



「こちらは粗方片付きました、コーネリア様」

「よくやったギルフォード。もうすぐグラハムが帰ってくるという時にクーデターとは……」

「姫様、ひとまず暴動も落ち着きました。そろそろ体をお休め下さい」

「進言には感謝するぞダールトン。しかしこれは一刻も早く抑える必要がある事態だ。私は行く。休息はお前たちだけでとっておけ」

「姫様を一人で行かせるなど……ありえませんな」

「ダールトン殿のおっしゃるとおりです。姫様の騎士とて休みはいりませぬ！」

「お前たち……よし！行くぞ！ついてこいッ!!」

「「イエス・ユア・ハインス!!」」



「そうか……帰るのか」

そう重々しく口を開いたのは、私の師匠こと藤堂さんだ。心なしか元気が無いが、何

かあったのだろうか?まさかまた近所の子供に、顔の怖いおじさんとかわられて泣かれたのだろうか?以外とそういうところに弱いので勘弁してあげてほしい。実際私もグラハムさんのように若々しく在りたいが、中々現実的に藤堂さんのように若くとも老ける実例を目の当たりにして手前、何とも言いがたいが。

「今までお世話になりました、藤堂さん……いえ師匠。私は貴方のように武士道を心に、これからも生きていきます」

「う……ううう……うむ。グラハム君の志は既に年相応を越しているが、それで止まることはない。君の武士道をどうか……うう……どうか貫いてほしい!」

私が自身の目的だった、武士道概念の吸収については微妙だった修行生活だったが……それでも学ぶものはあった。それを胸に生きると宣誓すると、藤堂さんは泣き出してしまった……もしかして、おじさんよりも酷いことを言われたのか?……まさか……まさかよりもよって「万年女ツ毛のない中年野郎」とか言われたんじゃ……無いな。うん、いい加減解るは、ここまで別れを惜しまれては私の計画やりにくいぞ藤堂……「これこれ、そう泣いては旅立つ童にも辛かろうて。武人として認められた者ならば、しかとその先行きを見据えてやらねばな」

藤堂さん泣きを、やんわりと諫めたのはぬらり……ゲフンゲフン桐原翁だ。何度も会う機会事態は有ったものの、ぶつちやけ会話が無い。一言二言喋るだけとかそんな可愛

いもんじやない。

——マジで一言も喋らない。

基本的にはゲンブや藤堂さんと居るときにしか顔を見せないが、ほんとに顔を見せるだけ。一言も喋らずに私を観察するかのようひっそりと佇んでいるだけなのだ。……もしや嫌われているかと思えば、目が合う度にちよつと意味のわからない笑みを浮かべてはくるので、嫌われているとは言い難い。

むしろ個人的にはちよつと苦手だったりするので、大体目が合った後は明後日の方を向いて、意味深に腕を組みながら「ほう……？」何て言いながら誤魔化してしまう。その誤魔化しに対してすらジロリと見て来るのでなおのこと苦手だ。

「さて、国に戻るとなれば何かしらの手土産は必要じゃろうて。儂から一つお主にくれて……いや、貸してやろう」

どことなく気味の悪い笑みを浮かべながら、桐原翁は自身の指をパチンツと鳴らした。

「……………はっ」

思わず私は、その行為とその結果にポカンとしてしまった。だってそうだろう？指を

鳴らすだけで何も起きては……いや、起きてはいる。桐原翁の着物の裾からゆつくりと煙が溢れている。

……ぶっちゃけ、この煙もくもくは原作2期にて見覚えがあるが……まさかね？  
この時代にはいいっしょ？

そして、そのもくもくが晴れた時に私の目に写ったのは。

「以上が桐原様からの言伝てになります。ブリタニアに帰国の際の護衛兼侍従として、この篠崎流36代目直系子篠崎咲世子。グラハム・エル・ブリタニア様に仕えよとの命。どうかよしなに」

齢10歳とは思えぬ例句をハキハキと述べる少女がそこには居た。

……あれ、原作ってなんだっけ？

私は今からクーデターの起きてる自国に帰ろうとしているのに、何故こうまで頭を悩ませる事態が増えていくのか不思議でならない……。ほんとどうすればいいんだ！教えてくれ！グラハムさん&amp;mp;カタギリイイイイイ!!!



# 幕間・ジョウシキ ト ショウジキ

―――6年前

『お前は我が一族の最高傑作だ』

齡4歳にして、父から出た最初の言葉がそれだった。

篠崎流36代目直系子篠崎咲世子

それが私の名前らしい。父の話では母の名前も篠崎咲世子らしいが、その名前はもう私の名前だと言われた。正直意味がわからない

母についての話は、その名前以外何も知ることは無かった。

物心がついてからの日々は、全て篠崎流というものの修行の日々だった。

女性の柔軟性を基礎とした体作り

声帯を鍛え、様々な声の出し方の練習

瞬時に移動できるような歩法の練習

日々高くなる障害物を飛び越える練習

体格が大きい相手にも使える護身術

日本に伝わる様々な歴史と知識

そして、人殺しの練習

どれ程の長い間、その修行を続けていたかは記憶にない。

恐らく途中で意識がとんでいた時もあっただろうし、もしかしたら辛い日々の記憶として思い出せないだけかもしれないが、それが辛いものだということは子供ながらにわかっていった。

わかってはいたが故に、気付けなかった。その辛さばかりに目が行き、その成果を周りがどう視てるかなど子供にはわからなかったのだ。

『……何故お前は女に産まれてしまったのだ』

辛い日々の合間に1年に数回しか会わぬ父の言葉は、次第に口数が減っていき、二言目にはそう言われるようになっていた。

『御当主、あの咲世姫の御子故大層な別嬪となり、後々の御家の間諜としてこれ程の逸材

はないと思っておりましたが……』

『ああ……分かつておる。我が娘の才。たかが他国の妾として送るには余りにも惜しい』

『しかし、国内に留め置けば母君のような事態にならぬとも……』

『あれは事故よ……事故としか思えぬわ、故にそれは語るなと申し付けたであろう』

『ツ！申し訳ありません……』

いつの頃からか。母のことが少しは知れるかとも思い、私が寝た後に開いていると言う会合の話に聞き耳をたてていた時の話も、私をどこか惜しむような話しかしなくなつた。

『咲世子、お前に教えるかは迷っていたが……今日より女の武器について教えていく』

そんな日々が唐突に終わりを告げた日の父は、どこか嬉しそうな顔をしていた。

『まだ内密の話だが、近々他国からその国の世継ぎとなる男が我が日ノ本に来るらしい。お前は持てる全てを使いその者を我が国の傀儡へと仕上げるのだ』

父はまるで、私が金平糖を初めて食べたときののような顔をして私にその命を下した。

——嗚呼、私は漸く報われるのか

幼心に思うのはそれだけだというのに……

父の口はまるで三日月のように怪しく歪むばかりで……

それが今までに見た、人の死体や臓物よりも恐ろしいと感じたのだった

「咲世子、先日ブリタニアという国の世継ぎが日本に来日したのは聞いていな。とうとうお前に大事な仕事を与えるときが来た」

「はい、父上」

いつまでいって続つくかわからない苦痛くつうの日々が唐突に終わりを告げたのもまた、そんな父の嬉しげな声からだった。それに対してなんとも平坦な声で返事を返すが、特に異を返す様子もない。まったくもっていつも通りの篠崎家の会話の空気である。

「大恩ある、桐原翁からの依頼でな。我等篠崎家全員でことにあたるが……咲世子、お前だけは別に任務がある」

不思議なものだ、篠崎家全員と言っておきながら私だけは別とは。それ程大事な仕事なのだろう。また何処かの要人の暗殺だろうか？もう何も構れない体格の違う男性に

変装してからの暗殺だが……いつも1人での任務故におやつが食べ放題な点だけが救いではある。昨日こっそり食べた鯛焼きは絶品だった。帰りがけに猿と出くわさなければ家まで持って帰っていたかもしれない。

「我等は中華連邦からの客人を桐原翁と共に歓待しに行くが、桐原翁不在の間お前が変装し代わりを勤め、ブリタニアの小僧の相手をしておけとのことだ」

「私が……翁の代わりを、ですか？」

「そうだ、あくまで桐原翁の代わりに相手をするだけだが……」

父上はそこで言葉を切ると、私を数秒黙って見つめたのち

「落とせる隙を見つけたならば」

——傀儡へと落としてこい、全てを使つてな

「……はい、父上」

私の頭の中の鯛焼きは、そんな父の言葉に書き消されていき……何とも形容しがたい思いに埋め尽くされるのであった。

ーはい、そんな気持ちに埋め尽くされた日は一瞬で崩されました。

「チエストオオオオ!!」

「まだ甘いぞ、グラハム君!!」

いったいなんなのでしょう、この光景は。

私は、桐原翁に化けてブリタニアの皇子の接待をするために、預け先である藤堂という名の軍人の家に向かった。

そして、案内されるままに住居の離れにある道場へ入ったのだ。

はい、入ったのです

「これはどうだ!」

「うおっ!武器を投げるとは!しかし、狙いはいいぞ!」

「ふっ、誉められても避けられては…なっ!!」

確かに道場に入ったはずですが、私はどうも、世間というモノをあまり知らないと言われていますが。ええ、一般的な価値観ぐらいは叩き込まれたはずです。

道場——強き者になるため、己を鍛えるために用いられる修練の場。日ノ本には様々な道場があるとか。

剣道。柔道。空手。相撲。弓道——等といった武に通じる道を極めんとする場。そ

こはともすれば、数多の人たちが喧しくも健やかに修練を励む場のはず。

「さて、どこまで腕を上げたか…試してみようか!!」

「ふー来るか!!三段突き!!!」

はず……ですよね?

「うおおおおオオオオオ!!!」

「はああああアアア!!!」

決して…そう決して……

「セエエエエエイイイ!!!」

「なんとおおおおお!!!」

地面が陥没していたり、木刀で壁を切り裂いたりするような場所では無かったと思うのですが……………

むしろ何故、二人とも笑っているのでしょうか

何故、周りは止めようとしないのでしょいか

というかそもそも、この二人はいったいなんなのでしょいか……………

そんな私の常識を初めて壊してくれた、彼らの真つ正直な気持ちのぶつかり合いに

ええ……………まあ、なんといいいますか

可笑しかったのか、苛立ったのかはわかりませんが



思わずといたところでしょうか……

「ふふッ……!!」

初めて心が自然に笑えた動いた気がしたのです